

Title	体験型民宿コミュニティ春蘭の里におけるサービス提供の価値形成に関する調査
Author(s)	王, 也
Citation	
Issue Date	2018-09
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/15445
Rights	
Description	Supervisor:池田 満, 先端科学技術研究科, 修士(知識科学)

修 士 論 文

体験型民宿コミュニティ春蘭の里
におけるサービス提供の価値形成
に関する調査

1610029 王 也 (WANG YE)

主指導教員	池田 満
審査委員主査	池田 満
審査委員	敷田 麻実
	小林 重人
	田中 孝治

北陸先端科学技術大学院大学

先端科学技術研究科 [知識科学]

平成 30 年 8 月

Research on value formation of service provision in community Shunran village' experience-type inn

Wang Ye

School of Knowledge Science,

Japan Advanced Institute of Science and Technology

August 2018

Keywords: Farm-inn, New tourism, Subjective happiness, Value-in context, multifunctionality of agriculture and rural area, Social capital

In recent years, in various fields the researches related to tourism are attracting much attention among government, industries, academia and people. In various regions, more and more researches on tourism have been proposed, such as town planning, regional activation, promotion of tourism. Due to the rapid growth of the tourism industry, the government is expecting economic ripple effect and more employment opportunities. Even regard the tourism Nation as an indispensable part of economic recovery. At the same time, local residents and social organizations are actively start travel program to develop regional economy.

Along with the rise of tourism, a new way of tourism is gradually being accepted. This new way of tourism is pay more attention to experience and communication. Compared with the traditional way of tourism, the new way is more responsive to the needs of customers.

Contrary to the fast-growing tourism industry, the aging population and depopulation are getting more and more serious. Local residents are becoming more and more uneasy.

In this research, the inn operator of local emergent organizations is used as the research object. The survey will test their subjective happiness and what they value in addition the economic factors.

By analyzing the information obtained from the survey, the following results were obtained. For management purposes, so inn operators pay more attention to regional revitalization, town development, and income increase. Regarding the intention of conservation of rural multifunctional function, inn operators see the importance of all eight functions : food security, land conservation, water source recharge, climate stability, landscape conservation, physical and mental well-being, education, cultural tradition. Regarding conservation activities of rural village, inn operators have the highest frequency of road / waterway management, traditional entertainment and festival participation. In case of the promotion activities of rural villages, green tourism accommodation, green tourism day trips, local production and local consumption activities are frequent. Whether the ideas such as services proposed by the organization leader, objectives of management, emphasizing cultural elements and so on are consistent or not between the inn operator and the organization

leader are considered to be directly related to the success of the project. However, this research answered common points and differences of ideas of the inn operator and the organization leader. In order to contribute to the region, the idea of the inn operator and the organization leader are roughly agreed. Based on highly similar values and values of happiness between the inn operator and the organization leader, the activities of the regional activity have been achieved. Also, through analysis of the occurrence and impact of impressive experiences, the impact on happiness have been discussed.

Next, the contents of each chapter will be introduced.

Chapter 1 will introduce the research background, research purpose, and then explain the research objective and research methods.

Chapter 2 is the review of the advance research. First, start with the review of the farm-inn. And then introduce the related papers of new tourism, the revitalization of the depopulated areas. After that is the introduction of value creation/co-creation of lodging/tourism. Finally, is the introduction of the survey criteria of this research.

Chapter 3 introduces the respondents of Shunran village. The content of the introduction includes overview, operation organization and management philosophy of the leader.

Chapter 4 explores the relationship between Shunran's village organization, Inn operator and tourists, and explain the problem cognition from the perspective of the Inn operator.

Chapter 5 introduces the interview survey on the organization leader Mr. Tada, and then analyze the survey results. Next, combines the preliminary research and the interview survey to explain the question setting of the questionnaire survey.

Chapter 6 will analyze the data and then discuss the results.

Chapter 7 investigates the results and answers the research questions. Then explain the significance of the research and future issues.

目次

第1章	序論	1
1.1	研究の背景	1
1.2	研究の目的	2
1.3	リサーチ・クエスチョン	2
1.4	研究の方法	3
1.5	本論文の構成	3
第2章	先行研究のレビュー	5
2.1	ツーリズムの現状	5
2.1.1	過疎地への影響	5
2.1.2	観光庁の観光振興活動	6
2.1.3	ニューツーリスト	8
2.2	宿泊・ツーリズムの価値創造・共創	9
2.2.1	企業と消費者の関係変化	9
2.2.2	宿泊・ツーリズムの価値創造・共創	10
2.3	主観的幸福度	10
2.3.1	個人属性に関する要素	11
2.3.2	経済的要素	15
2.3.3	農村農業多面的機能に関する要素	19
2.3.4	ソーシャル・キャピタル	23
2.3.5	将来展望	26
2.3.6	まとめ	28
2.4	春蘭の里に関する文献調査	29
2.4.1	地域発展過程の合意形成	29
2.4.2	春蘭の里の成功要因分析	30
2.4.3	村づくり産業化	30
2.5	おわりに	31
第3章	春蘭の里の紹介	32
3.1	春蘭の里の概観	32
3.2	春蘭の里の運営組織	33
3.3	春蘭の里実行委員会事務局長と経営理念	34
3.4	春蘭の里から発信している情報	35
3.4.1	情報の構成	35
3.4.2	春蘭の里の創業構想	36
3.4.3	地域システムの組み込み	37
第4章	研究の構成	38
4.1	農家民宿に組み込む三者の関係	38
4.2	組織リーダーと民宿運営者の目的共有	39
4.3	問題意識	40
第5章	組織リーダーに関する予備調査とアンケート設定と実施	41
5.1	組織リーダーに関する予備調査	41
5.1.1	予備調査行程	41
5.1.2	春蘭の里の現状	43
5.1.3	創業理念	43

5.1.4	農村農業生活に関する各要素のレビュー	44
5.2	アンケートの設定と実施	46
5.2.1	アンケートの設計	46
5.2.2	調査概要	48
第6章	データ分析	49
6.1	アンケート調査	50
6.1.1	主観的幸福度	50
6.1.2	個人属性	51
6.1.3	農村農業多面的機能の保全意向	58
6.1.4	保全活動参加頻度	61
6.1.5	促進活動参加頻度	64
6.1.6	10年後の主観的幸福度	67
6.1.7	将来展望	70
6.1.8	ソーシャル・キャピタル	73
6.1.9	アンケート調査の考察	77
6.2	インタビューについて	79
6.2.1	質問に対する民宿運営者の観点と考え	79
6.2.2	印象深い経験と民宿運営者への影響	81
6.3	民宿運営者と組織リーダーの考えの共通点と相違点	82
第7章	まとめ	84
	謝辞	87
	参考文献	88
	付録	90

表目次

表 2-1 都市住民と農村住民の主観的幸福度.....	12
表 2-2 多面的機能の価値の分類	19
表 3-1 春蘭の里の概観	32
表 3-2 外部リンクネット	37
表 5-1 第 1 回実地調査の行程表	42
表 5-2 組織リーダー多田氏の農村農業生活に関する各要素のレビュー	45
表 5-3 調査カテゴリー，要素，意義，出典.....	47
表 5-4 アンケート調査行程	48
表 6-1 回答者の個人属性	51
表 6-2 農村農業ため面的機能の保全意向データ	58
表 6-3 保全活動参加頻度データ	61
表 6-4 促進活動参加頻度データ	64
表 6-5 将来展望データ	70
表 6-6 ソーシャル・キャピタルに関するデータ	73
表 6-7 アンケートによって民宿運営者のまとめ.....	78
表 6-8 質問に対する観点と考えのまとめ.....	79
表 6-9 印象深い経験と民宿運営者への影響.....	81
表 6-10 組織リーダーと民宿運営者の考えの共通点と違い.....	83

図目次

図 2-1 都市住民と農村住民の主観的幸福度比較.....	12
図 2-2 主観的幸福度の分布	13
図 2-3 性別と主観的幸福度	14
図 2-4 年齢と主観的幸福度	14
図 2-5UIJ ターン経験と主観的幸福度.....	15
図 2-6 世帯収入と主観的幸福度	16
図 2-7 相対所得と主観的幸福度	17
図 2-8 金融資産と主観的幸福度	18
図 2-9 不動産資産と主観的幸福度	18
図 2-10 多面的機能の保全意向と主観的幸福度.....	20
図 2-11 農山村での活動と幸福度の関係（都市住民）	21
図 2-12 農山村での活動と幸福度の関係（農村住民）	21
図 2-13 地域の食や農に関する行動頻度と幸福度の関係（都市住民）	22
図 2-14 地域の食や農に関する行動と幸福度の関係（農村住民）	23
図 2-15 近所付き合いの程度と幸福度	24
図 2-16 地域活動への参加の程度と幸福度.....	24
図 2-17 地域活動における互惠性の規範と幸福度.....	25
図 2-18 主観的幸福度の 10 年後の見込み.....	26
図 2-19 農業農村の将来展望と幸福度（都市住民）	27
図 2-20 農業農村の将来展望と幸福度（農村住民）	28
図 3-1 春蘭の里の運営組織	33
図 3-2 春蘭の里実行委員会事務局長.....	34
図 3-3 ホームページの構成	35

図 3-4 春蘭の里構想	36
図 3-5 春蘭の里趣旨	36
図 4-1 全体の関係	38
図 4-2 サービスの提案者と提供者の目的共有.....	39
図 4-3 問題意識	40
図 5-1 多田氏との写真	42
図 5-2 囲炉裏	42
図 5-3 伝統的彫刻	42
図 5-4 伝統的食事	42
図 6-1 主観的幸福度の分布	50
図 6-2 年齢と主観的幸福度	52
図 6-3 性別分布	53
図 6-4 性別と主観的幸福度	53
図 6-5 運営方式の分布	54
図 6-6 運営方式と主観的幸福度	54
図 6-7 都市生活経験と主観的幸福度	55
図 6-8 経営目的認識	56
図 6-9 運営期間の分布	57
図 6-10 運営期間と主観的幸福度	57
図 6-11 農村農業ため面的機能の保全意向.....	59
図 6-12 農村農業ため面的機能の保全意向と主観的幸福度.....	60
図 6-13 保全活動参加頻度	62
図 6-14 保全活動参加頻度と主観的幸福度.....	63
図 6-15 促進活動参加頻度	65
図 6-16 促進活動参加頻度と主観的幸福度.....	66
図 6-17 10 年後の主観的幸福度の分布.....	67
図 6-18 年齢層と 10 年後の主観的幸福度.....	68
図 6-19 10 年後の主観的幸福度の人数変動.....	68
図 6-20 年齢層と人数変動	69
図 6-21 将来展望	71
図 6-22 将来展望と幸福度	72
図 6-23 近所付き合い程度と主観的幸福度.....	74
図 6-24 居住意識と主観的幸福度	75
図 6-25 観光客信頼性と主観的幸福度	76

第1章 序論

1.1 研究の背景

近年、あらゆる分野で観光に関する産・官・学・民の取り組みが脚光を浴びている。観光庁の協力、各地における観光を基づいて、町づくりや地域活性化対策、ツーリズムの振興など、観光に関する研究がますます増えている。観光産業の急速な成長によって、政府は地域活性化、雇用機会増加など経済波及効果を期待している。さらに、観光立国という政策を、経済の勢いを取り戻すための不可欠な成長分野と考えている。同時に、各地における地域住民や関係団体は、地域資源を活用し、地域の経済を潤し、活気に溢れる地域社会を構築するために、積極的に努力している。

観光の台頭とともに、体験型・交流型の要素を取り入れた新しい観光形態の認識が進んでいる。地域固有資源を見直し、旅行商品化を通して、自主財源の確保を促進し、自立的経営を実現する観光地域づくり事業が各地で展開されている。この傾向は顧客追求の変化に伴って発生した。工業エコノミーから、エクスペリエンス・エコノミー、ナレッジ・エコノミーまで社会の変化とともに、人々の追求は製品の所有権から、体験・自己実現まで転化して来た。顧客のニーズは高い品質製品から、ライフサイクルの満足まで変わっている (Brand and Rocchi 2011)。また、通信技術の発展と、P2P アクセスの実現とともに、顧客の参加意識が喚起されている。

急成長している観光産業と対照にして、地域における少子高齢化と過疎化がますます深刻化すると伴って、将来への不安感が高まっている。幸福度への追求もしくは喜びへの追求は人々の自発的な行動である。本研究では、地域創発団体の農家民宿運営者に対して、経済要素以外に農村農業生活に関する他の要素を重視しているかを明らかにしたい。また、地域創発団体組織リーダーとの考えが一致しているか、農家民宿サービスについて、幸福度にどのような影響を与えているかという問いを考えることを通じて、春蘭の里のような地域コミュニティのメンバーがどのような参画意識を持つか考察する。

本研究は、農家民宿運営者の立場から、これらのいくつかの疑問に回答するために、能登地域における、農家民宿に関する地域創発団体春蘭の里を調査対象として扱い、主観幸福度という尺度の上で、観光活動に関するサービス提供者の調査を行う。

1.2 研究の目的

本研究は、少子高齢化と過疎化に直面している地域における、地域活性化と町作りを目的にしている地域団体春蘭の里を対象とし、民宿運営者の主観的幸福度を検討する。アンケート調査とインタビュー調査によって、民宿運営者はどのような要素を重視するか、また民宿運営者の考えが組織リーダーを一致しているどうかを明らかにする。そして、サービス提供中に、幸せを感じているか、観光客と共同で作っている経験は幸福度にどのような影響を与えているかを検討する。

1.3 リサーチ・クエスチョン

以上の目的に基づいて、以下のMRQとSRQを設定する。

本研究では民宿運営者の立場で、組織リーダーとの考えの共通性・相違性に関する調査・考察である。民宿運営者を中心にし、主観的幸福度、農村農業生活に関する重視している要素、民宿サービスへの考えを測定する。他人との影響は幸福度に関与している重要な要素として、観光客とのつながりは幸福度に大きな影響を与えていると考えている。だから、SRP3で観光客とのつながりの影響を調査する。

MRQ：民宿運営者が幸せを感じられる観光活動はどのような価値を形成しているか？

SRQ 1：主観的幸福度について、民宿運営者はどのような要素を重視しているか？

SRQ 2：主観的幸福度について、民宿運営者の考えは組織リーダーと一致しているかどうか？

SRQ 3：体験・交流型観光において、観光客とのつながりは幸福度にどのような影響を与えているか？

1.4 研究の方法

本研究ではアンケート調査とインタビュー調査を行い、家民宿運営者の主観的幸福度と幸福度に影響している要素を調査する。主観的幸福は個人の主観的な判断である。この判断は人の過去の経験・将来の期待・他人との関係などに依頼している。

アンケート調査は農家民宿運営者の個人属性、農村農業ため面的機能の保全意向、農山村で保全活動の参加頻度、農山村で促進活動の参加頻度、調査対象の将来展望、社会関係資本で構成されている。インタビュー調査は調査対象が観光客・春蘭の里のグループ同士との付き合いによって、良い経験を生み出すことに関する調査である。データ収集はアンケート用紙を配布し、調査対象と相談しながら、筆者が記録する方式で実施した。

1.5 本論文の構成

第1章では、ツーリズムの現状から本研究の対象農家民宿運営者と主観的幸福度を導き出す。そこでの問題認識から、研究目的とリサーチ・クエスチョンを明確にし、研究方法を述べる。第2章では、先行研究レビューを行う。まず、農家民宿の観光に関するレビューから始め、ニューツーリズム、過疎地への影響、観光庁の振興活動、観光客対応に関する理論を検討する。その後、宿泊・

ツーリズムの価値創造共創に関する文献調査を説明する。最後に、本研究の調査尺度農村農業多面的機能とソーシャル・キャピタルを論じる。第3章では、調査対象春蘭の里を紹介する。春蘭の里の概観、運営組織、リーダーの経営理念を含めて説明する。第4章では、春蘭の里組織、民宿運営者、観光客という三者の関係を検討し、民宿運営者の立場で、問題意識を説明する。次いで、第5章で、組織リーダー多田氏に関する予備調査を紹介し、多田氏とのインタビューの結果を論じる。次いで、先行研究と予備調査を結びつき、アンケート設問を説明する。また、調査概要を紹介する。第6章では、得られたデータを分析し、その結果を論じる。第7章で、結果を考察し、リサーチ・クエスチョンに回答する。また、研究意義と今後の課題を説明する。

第2章 先行研究のレビュー

第2章では本研究に関連する分野について先行研究をレビューする。まず、ツーリズムの現状を紹介する。主に新しい観光形態、新しい観光形態が過疎地への影響、また新しい観光形態の特徴と対応する観光客の変化を論じる。次に、宿泊・ツーリズムの価値創造・共創に関する文献をレビューする。主に、価値共創において、企業と消費者の相互作用と観光の交換価値、使用価値、文脈価値を紹介する。その後、研究目的を達成するために、本研究の調査尺度主観的幸福度に関する文献をレビューする。主観的幸福度の概念、主観的幸福度に関与する農業・農村多面的機能と社会関係資本を含めて紹介する。最後は調査対象春蘭の里に関する文献をレビューする。

2.1 ツーリズムの現状

観光に関する政策の確立、及び地域活性化の必要性がますます緊急化していると同時に、観光の社会的な機能が拡大している。観光によって、観光地域づくりを主体として、地域活性化、地域原風景の維持、住民参加まちづくり、住民が誇りできる故郷など概念と結び付けており、政府でも地域組織でも関心が高まっている。日本において、ニューツーリズムという用語は、この新しい観光形態を指している。以下では、ニューツーリズムに関する過疎地への影響、観光庁の観光振興活動、観光客対応を論じる。

2.1.1 過疎地への影響

近年、シェアリング・エコノミーは多大な注目を集めている。宿泊、交通など産業における、シェアリングにより、創業して世界的に注目される成功事例を持つ企業が数社ある。ビジネスが成功していると同時に、消費者の消費活動に大きな変化をもたらしている。

宿泊産業において、Airbnb という企業が代表的事例として、よく論じている。数年間に高速的に発展している Airbnb は、ホテル産業のチャレンジャーとルールの破壊者とみなされている。プラットフォームを構築する上で、P2P の技術を活用し、顧客の間に使わずにおく部屋など資源を流通させており、以前と異なる運営方式を提供している。具体的には宿泊施設など情報をネットやスマホで紹介し、部屋の所有者と利用者に、予約・交流・決済など活動の実施できるプラットフォームを提供している。

Airbnb はホテル産業に大きな変革をもたらしただけでなく、観光産業にも大きい影響を与えた。以前ホテルがないために、観光できなかったエリアを訪問可能にさせている。Oskam & Boswijk (2016) は Airbnb の成功を論じる時に、コミュニティーのような生活という体験価値を強調した。体験型民宿という観光方式は宿泊サービスだけ提供している観光と比べ、体験型民宿は観光客とコミュニティーの交流の場を提供し、関係構築の役割が更に重要になっている。

以上のように、以前は行けなかった過疎地に訪問できるようになることと、地域の住民のように生活することという二つ新たなニーズによって、過疎地の発展の可能性を高めている。また、地域の振興、町づくり、農村文化・風光守りなど目標の実現が可能になっている。

2.1.2 観光庁の観光振興活動

日本において、観光促進の背景における、インターネット技術が情報発信、予約、交流など方面に大幅に活用し続けるに従って、ニューツーリズムという用語がよく使われている。

観光庁は観光を振興するために、次のようにニューツーリズムの概念を以下のように定義している。

「ニューツーリズムとは、従来の物見遊山的な観光旅行に対して、これまで観光資源としては気付かれていなかったような地域固有の資源を新たに活用し、体験型・交流型の要素を取り入れた旅行の形態です。活用する観光資源に応じて、エコツーリズム、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズム、産業観光等が挙げられ、旅行商品化の際に地域の特

性を活かしやすいことから、地域活性化につながるものと期待されています。」(国土交通省観光庁 2016 年 3 月 11 日 http://www.mlit.go.jp/kankocho/page05_000044.html)

このように、伝統の物見遊山的な観光に対して、ニューツーリズムは二つの方面から観光活動を変革した。まずは地域固有資源の新たな活用について、地元の工場、文化、歴史、農業生活など人文資源と森林の生活、自然のリラックス機能など自然資源を考察し、産業観光、エコツーリズム、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズム、文化観光という五つの種類の観光種類を提案した。伝統の物見遊山的な観光と比べて、ニューツーリズムのテーマ性は顕著な特徴である。

次いで、体験・交流の要素入れはサービスの生産プロセス、消費プロセス、観光客とサービス提供者のインタラクションへ大きな影響を与えた。体験型・交流型の要素を取り入れた観光形態は、サービス提供者が観光客の要求を対応する立場から解放し、積極的に観光客に情報を提供し、観光客との文化価値の生成によって、事業の可能性と観光活動の価値を大幅に伸びている。

伝統のツーリズムに対して、ニューツーリズムの運営組織も変わっている。観光地において旅行会社が主導し、企画、募集、運営するのに対し、ニューツーリズムは着地側で地域住民や関係団体が主導し、民宿運営が地域住民に依頼する方式である。伝統の旅行会社が主導するツーリズムについて、提案者と観光資源の発掘者は旅行会社であり、地域の資源とコミュニティメンバーの特性が能動的活用してできないなど限定がある。一方で、地域住民や関係団体が主導する観光形態について、観光活動は地域と観光客の交流、コミュニティメンバーと観光客の参与に基づいて、完成させている。地域の魅力、地域生活の再発見、地域と住民との関係構築によって、観光客の再訪が可能になっている。

観光庁は観光地の魅力と固有資源を見直し、旅行商品化を通して、自主財源の確保を促進し、自立的経営を誘導することにより観光地域づくりをビジネスにつなげる取組を推奨している。

2.1.3 ニューツーリスト

ニューツーリズムという新しい観光方式の変換を促進する要因は観光客の追求の変化である。物見遊山的な観光客の観光志向と比べ、新しい観光客はいくつかなの変化がある。まずは、情報収集技術の変化である。インターネットとP2Pなど技術の普及とともに、観光客は望んでいる情報を簡単に入手できるようになっている。次は生産プロセスへの参加である。生産者主導から消費者主導への転換とともに、消費者の参加意識が喚起されている。観光における、観光客は物見だけ満足していない。住民のように生活するという主張はこの文脈で提示されている。最後は観光客のニーズの変化である。生産プロセスへの参加によって、物見的な観光より、地元の生活に深く入り込み、人に帰属する生活や文化などに関する認識とか理解とかを創出する。観光客のニーズの変化もコミュニティーのような生活という主張に一致していると考えられている。

ニューツーリストについて尾家建生（2010）は以下に述べている。

「新しい顧客であるニューツーリストは人とは違う体験を願望し、環境意識が高く、見かけよりも実質を楽しみ、何を持つかよりも生き方を優先し、用心よりも冒険を求め、ホテルのレストランより館外での地元の食事を好み、同質であるよりもハイブリッド(合成)でありたがる。」

観光は観光客を主体とし、出発地域から、交通経路を使い、観光地に到着、また旅行に関する各産業、ホテル・レストランなど含めてプロセスで完成している。このプロセスの中の各担当者、観光地の運営者、ホテルとレストランの運営者は高いレベルのサービスを提供する目的として、同質的公式的なサービスを提供している。しかし、ナレッジ・エコノミー時代の顧客は同質的サービスより、カスタマイズ的な体験、人生的な経験などライフサイクル的な獲得がもっと重視になっている。このニーズの変革に合わせ、民宿などシェアリング的な運営方式が高速的に発展している。

2.2 宿泊・ツーリズムの価値創造・共創

2.2.1 企業と消費者の関係変化

第1章第1節で述べたニューツーリズムという新しい観光形態は体験・交流の参加要素を取り入れ、観光の意味が大きく変わってきた。また、新たな観光形態に対応する観光客は、追及・ニーズが変わり、長期的な獲得を目指している。このような生産者と消費者の変化を説明するために、価値共創の概念を紹介する。

Prahalad と Ramaswamy が価値共創という概念が提唱した以来、価値の概念と生産プロセスが変わった。消費者と企業のネットワーク、生産関係、消費者参加など議論によって、企業と顧客の新しい関係を示している。伝統の生産関係の中で、商品やサービスの生産者は企業である。消費者の消費活動は商品の情報受容から、商品の情報を受け取り、興味を持ち、それから購買という活動が始まる。企業もこのプロセスについて、様々なマーケティング活動を展開し、消費者へ関与する。価値共創理論について、消費者は買い手だけでなく、生産過程の中で、重要な資源として、商品やサービスの生産に参加する。この考え方は、企業と消費者が一体になり、価値を共創する方式である。消費者は企業との協働を通して、経済価値を獲得する。企業は経済価値を獲得する同時に、競争優位が確立し、イノベーションも実現している。この考え方は、商品の使用価値だけ重視しているではなく、購買した後の使用価値も配慮している。

藤岡芳郎(2012)は、価値共創を「企業が顧客と継続的な相互作用を行うことで、顧客の文脈価値生成を支援すること、それらを通して企業は交換価値を実現すること」と定義した。価値を決めるのは消費者であり、重要なことは文脈価値だと提示している。企業の役割は価値の提供者から、消費者が価値を創造する時に支援する協力者まで転換している。

シェアリングの価値共創の方式は更に進化し、企業が一部分の権利と利益を譲渡し、一部分の消費者をプラットフォームに組み込んでいる。企業の資源として活用し、他の消費者にサービスを提供する。使わない資源を活用する同時に、他人と交流し、経験をシェアする。

2.2.2 宿泊・ツーリズムの価値創造・共創

観光・ツーリズムについて、様々な価値が創造できる。1.1で観光の経済波及効果と地域における活性化への期待を述べた。具体的な観光活動について、観光客の体験程度と参加程度によって、様々な価値が創出できる。中村孝太郎（2014年）は宿泊・ツーリズムの価値創造・共創を論じる時に、観光の交換価値、使用価値、文脈価値の違いを説明した。地域自然のリソースを活用し、宿泊設備が整えば、観光活動が実現できている。観光客にとって、宿泊サービスと自然のリソースが交換価値となっている。自然のリソースを享受する上で、更に高品質の食や伝統文化など文化的リソースを体験し、宿泊スタッフや地元住民と交流を行う場合、使用価値と指している。そして、自然環境によって心身がリラックスし、生活とか文化とか理解が創発できれば、文脈価値が創出していると言える。

使用価値と文脈価値によって、観光・ツーリズムの価値が非常に拡大している。観光客はこのような観光を通して、いい経験を創出し、支払った価格より多くの価値が獲得した。一方、文脈価値はこれら観光客を招待し、生活とか文化とか交流を行っている観光サービスの提供者に、どのような影響を与えているか、幸福度へ関与しているか。これらの質問は本研究の出発点の一つである。

2.3主観的幸福度

幸福は、客観的幸福と主観的幸福に分けられている。主観的幸福は、アンケートなどによって個人が幸福度に評価している主観的な判断である。この判断は人の過去の経験・将来の期待・他人との関係などに依頼し、自己認知のプロセスである。一般に言われる幸福度研究は、主観的幸福感を調査対象として展開されている。

1960 年代に経済発展を遂げた先進国は経済的な豊かさのと幸福感が直接的に結びついていない現象が発見した。「幸福のパラドックス」と定義されている。純粋に GDP の成長を追求することは、国民の幸福度を増加させないことを認識した上で、経済学、心理学、社会学など科目で幸福度に関する研究が発展してきた。「幸福のパラドックス」という現象は日本も例外ではないことを認識した上で、内閣府は幸福度に関する研究を開催した。

平成 22 年に、内閣府は「幸福度に関する研究会」を設置し、平成 23 年「幸福度に関する研究会報告―幸福度の指標試案―」をまとめている。この報告で、社会経済状況、心身の健康、健康性という 3 つの柱によって、主観的幸福度の上位概念を整理している。（内閣府、2011）

農林水産政策研究所は平成 25 年から農業・農村の新たな機能・価値を抽出するために、農業・農村の新たな機能・価値の評価手法に関する課題研究を開催した。佐々木らは都市・農村住民の幸福度に影響を与える要素について、農村の自然資本や社会関係資本という多面的機能を着目し、調査を実施した。2014 年 10 月に、全日本の 20 歳から 64 歳までのモニターから、各都道府県別の人口比率、性別比率、年齢層比率に留意し無作為で 1500 人分のデータを集めている。

2.3.1 個人属性に関する要素

調査の参加者の構成は都市住民 430 人、準都市住民 603 人、準農村住民 324 人、農村住民 119 人である。主観的幸福度の調査内閣府の幸福度の尺度と同様に、「非常に幸福」満点を 10 点に設定し、「非常に不幸」を 0 点にする。調査対象の主観的な判断によって、調査を完成した。全体の平準値は 5.82 点であり、農村住民の幸福度が一番高い、6.04 点である。次は準都市住民 5.88 点、都市住民 5.82 点である。準農村住民が一番低い、5.66 点である。

表 2-1 都市住民と農村住民の主観的幸福度

	度数	平均値	標準偏差
全体	1500	5.82	2.230
都市住民	430	5.82	2.339
準都市住民	603	5.88	2.132
準農村住民	324	5.66	2.231
農村住民	119	6.04	2.279

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

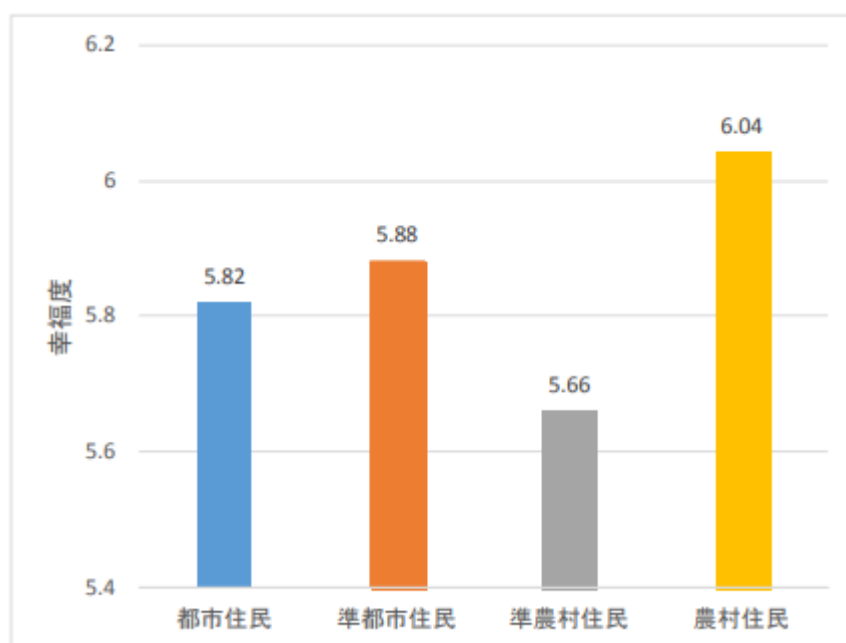


図 2-1 都市住民と農村住民の主観的幸福度比較

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

幸福度の分布をみると、内閣府の調査結果と同様に、どちらとも言えない 5 点の役割が一番高く、次いで 7 点、8 点の役割が多い。農村住民の分布形態は他の住民と違い、8 点の割合が最も多い。

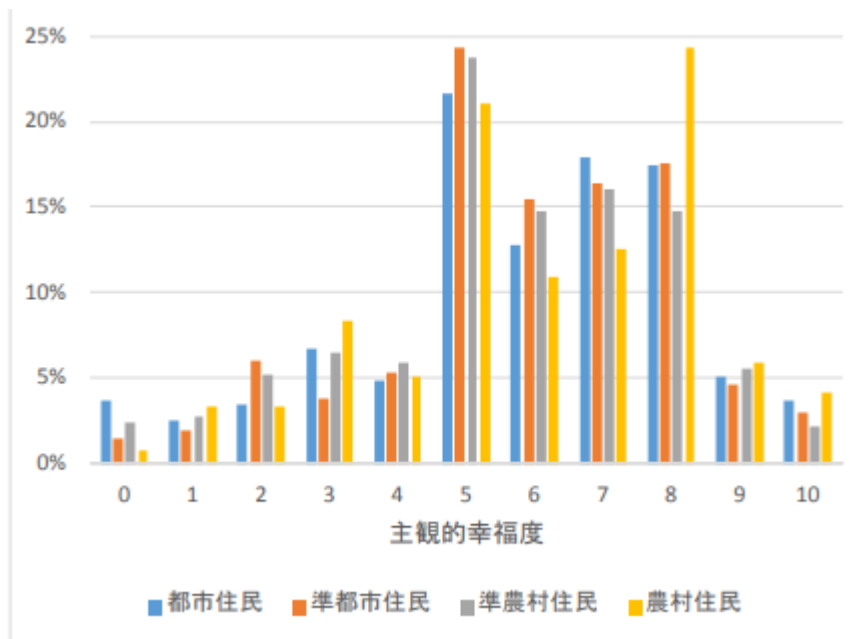


図 2-2 主観的幸福度の分布

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

農村住民のサンプル数が少ないので、以降の分析は都市住民と準都市住民を合併し、農村住民と準農村住民を合併する。

性別の結果によって、全体において、男性の幸福度は 5.62 点であり、女性の幸福度は 6.03 点である。女性の方は幸福を感じている。農村住民について、男性の幸福度は 5.82 点であり、女性は 5.71 点である。男性の方は少し高いが、ギャップが少ないために、有意差が存在しない。

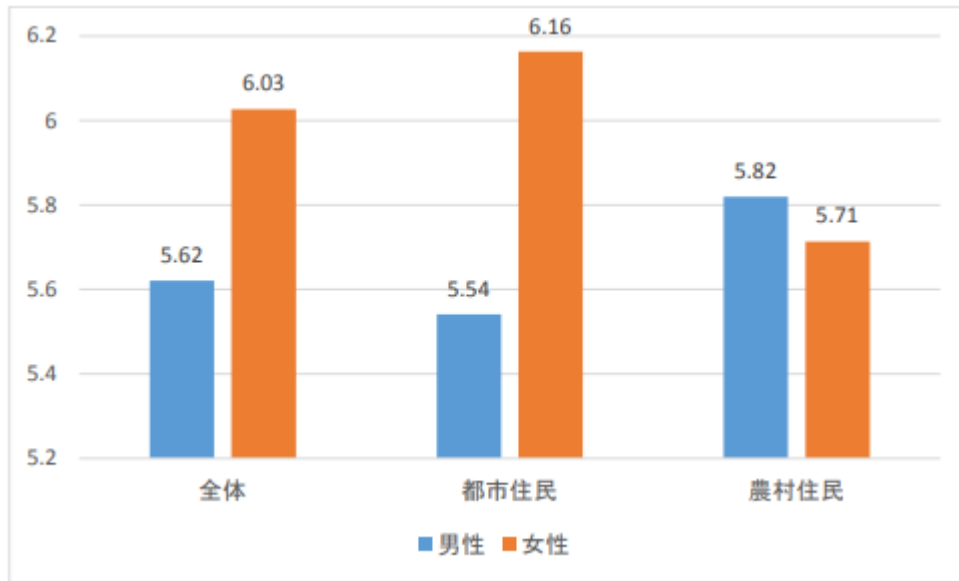


図 2-3 性別と主観的幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

年齢について、全体の幸福度は年齢とともに向上している。都市住民は同様な結果が出た。しかし、農村住民は U 字型の形態を展示している。30 代の幸福度は一番低い。

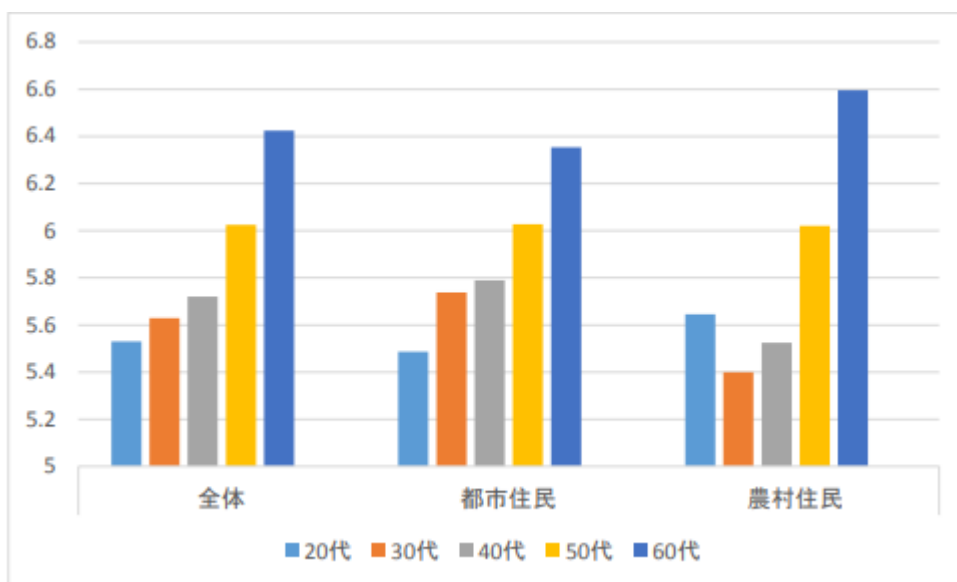


図 2-4 年齢と主観的幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

UIJ ターンの経験について複数回答できる形式で質問を設定した。I ターンは農村に意識的に移住したものと予測し、幸福度が一番高い 6.27 である。他の平準値より上回っているが、調査するサンプル数が限られているので、統計的な有意差が確認できないと判断されている。UIJ ターンの経験の有無は農業農村環境の保全活動の間接的経験と直接的経験と正の相関が導き出しされている。

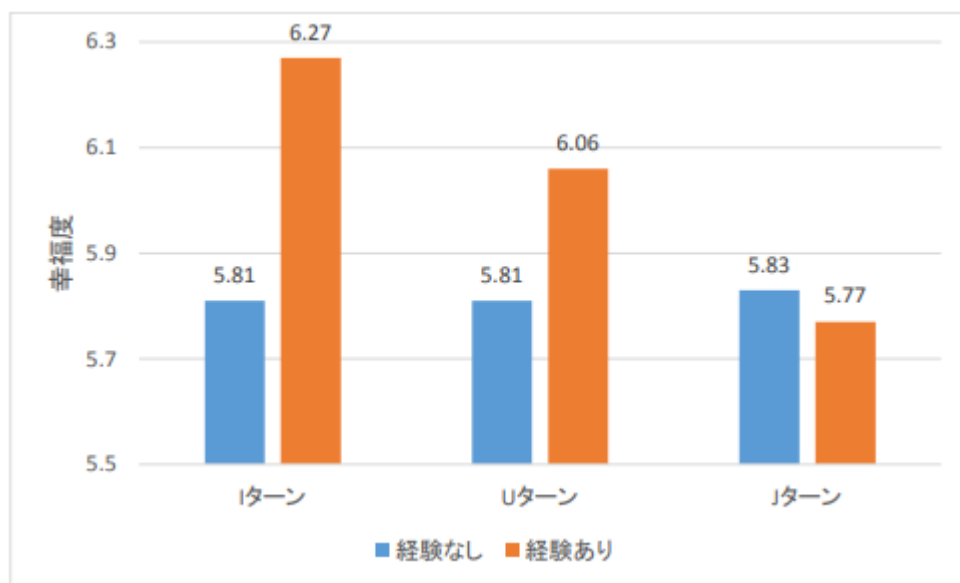


図 2-5UIJ ターン経験と主観的幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

2.3.2 経済的要素

全体として、「幸福のパラドックス」という現象があるので、経済の豊さと幸福度は直接的に結びつけていない。しかし、個人レベルの幸福度調査について、経済的要素は幸福度に影響を与えている変数としてよく論じている。佐々木らは所得、相対所得、資産という 3 つの方面から幸福度への影響を分析した。

まず、所得について、世帯全体の税込の年間総収入を 100 万円以下から、2000 万円以上の範囲で 12 レベルを設置した。1200 万円以上はサンプル数が少なかったため、まとめて一群にされている。

所得の分布によって、都市住民と農村住民の間に、大きな差がないが、平準値を見ると都市住民の方は有意に高い。

都市住民について、所得と幸福度は正の相関関係が示している。一方で、農村住民について、所得の増加に応じて幸福度が上昇する形勢ではない。

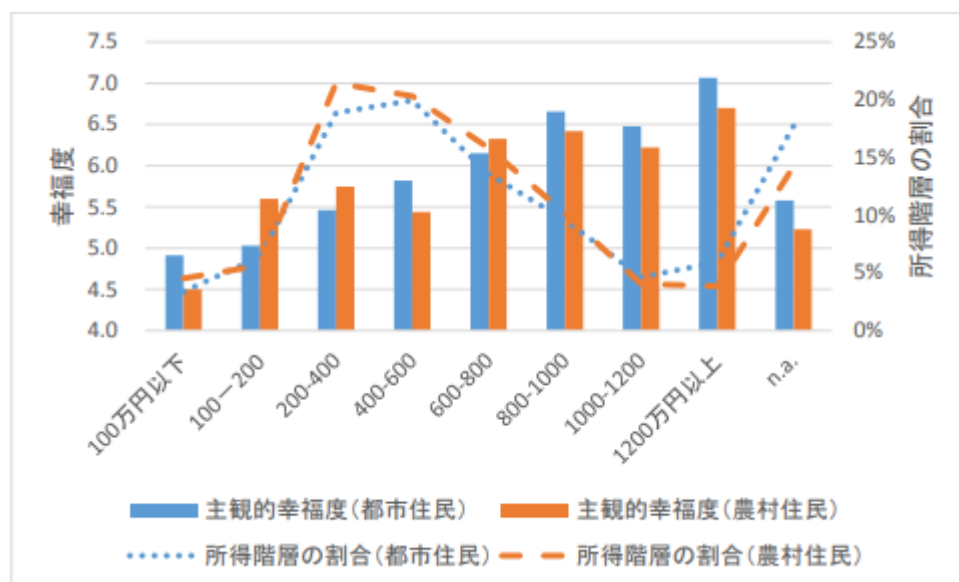


図 2-6 世帯収入と主観的幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

人々の幸福感は人の過去の経験・将来の期待・他人との関係などによって、主観的な判断である。佐々木らは人の絶対的な所得より、他人と比較した相対的な所得はさらに幸福度に影響を与えていると予想し、相対所得と幸福度の関係を調査した。質問は「あなたの生活水準はあなたの周りの人の生活水準と比べて高いと思いますか。」という形で調査した。「かなり高い」と「どちらかといえば高い」を選んだ人とそれ以外の人を分け、主観的幸福度との関係を分析する。全ての回答者は相対所得が高い方の幸福度が高いという結果が導き出した。

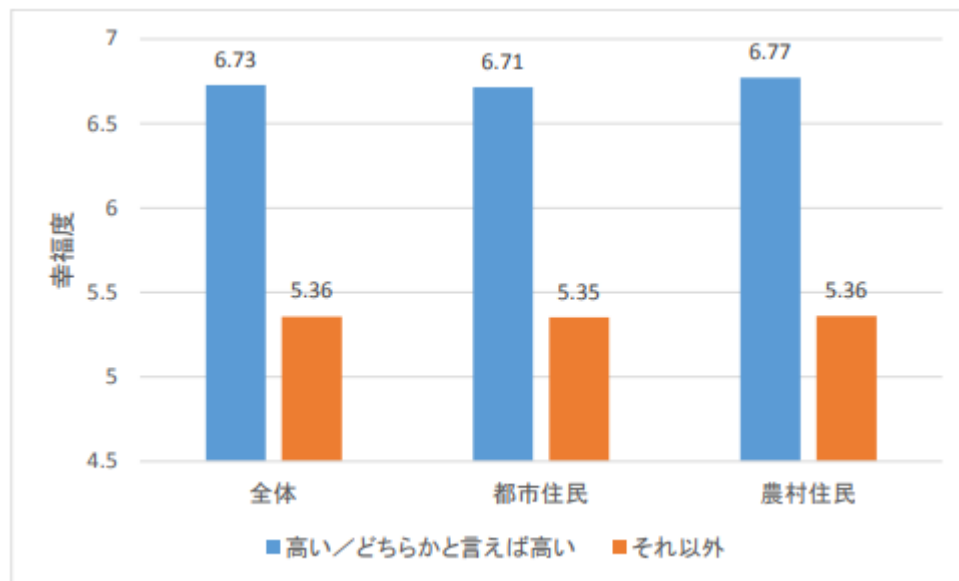


図 2-7 相対所得と主観的幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

最後は資産に関する調査である。佐々木らの資産に関する調査は土地、住宅、宅地など不動産と預り金、債券、株など金融資産を含めて調査した。アンケートは金融資産と不動産と分け、250 万円以下から 1 億以上まで 10 つの選択を設定した。

金融資産で 2 割ぐらい、不動産で 2・3 割の人は資産と所有していないと回答した。都市住民について、資産が多いほど幸福度が高いという関係を示しており、正の相関である。農村住民について、所得と同様に正の関係性が薄い。

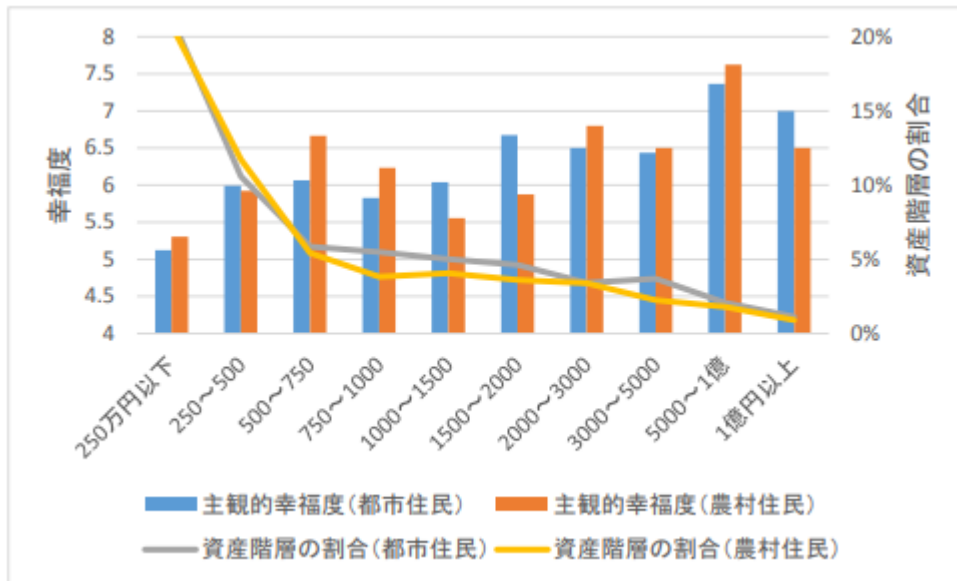


図 2-8 金融資産と主観的幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

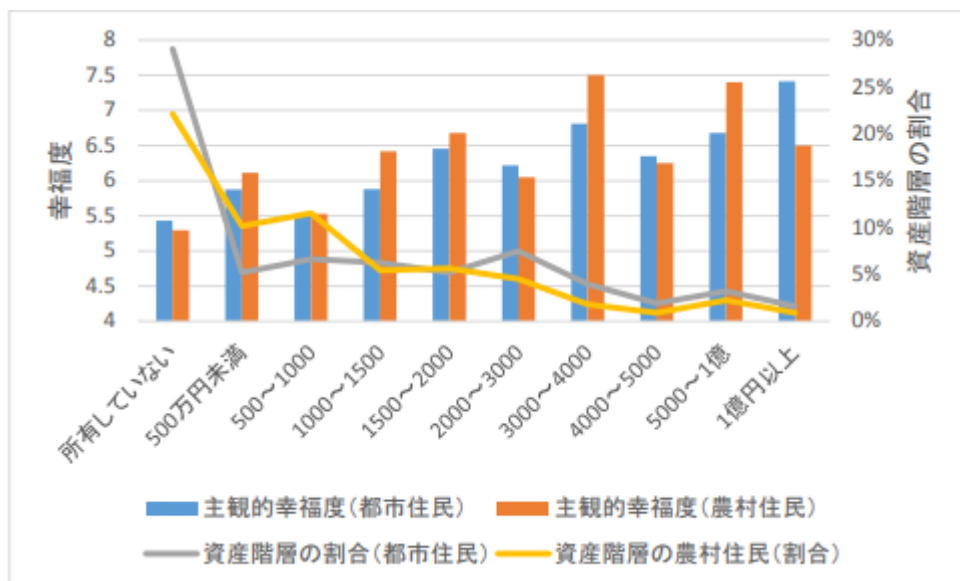


図 2-9 不動産資産と主観的幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

2.3.3 農村農業多面的機能に関する要素

佐々木らは内閣府が発表した調査結果によって、農村と漁村に住みたい都市人が増えているという傾向を示し、若者が田舎暮らしの魅力を感じているという結果を導き出している。

農村農業多面的機能は、農村に存在する物的資本、人的資本、社会関係資本、自然資本の方面に豊かな資源が備えている。農林水産省によって、「農業・農村の多面的機能とは、「国土の保全、水源の涵養（かんよう）、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等、農村で農業生産活動が行われることにより生ずる、食料その他の農産物の供給の機能以外の多面にわたる機能」である。」国民は農村農業多面的機能から生み出されるサービスを広く享受することによって、幸福度が向上できると考えている。国民の福利に貢献できるようになるために、農村の価値や魅力を再認識必要があると指摘している。

農業農村の有する様々な価値の中に、多面的機能の価値は農村住民でも都市住民でも様々な影響を与えている。佐々木らは自然資本を利用価値と非利用価値に分類する。以下でまとめる。

表 2-2 多面的機能の価値の分類

	価値の種類	例
利用価値	直接利用価値	食料生産、木材生産
	間接利用価値	国土保全 レクリエーション 水源かん養
	オプション価値	将来のレクリエーション
	存在価値	多面的機能の存在
非利用価値	遺産価値	将来の多面的機能の維持・保全
	利他的価値	農村の存在

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

次いで、農村農業多面的機能に関する調査は多面的機能の保全意向、農山村での活動頻度と地域の食や農に関する行動頻度に基づいて、調査した。

多面的機能の保全意向に関する調査は食料安全保障機能、国土保全機能、水源涵養機能、気候安定機能、景観保全機能、心身保養機能、教育機能、文化伝承機能という8つ要素で構成した。8つ多面的機能のいずれについて、保全意向が高いほど、回答者の幸福度が向上する。都市住民でも、農村住民でも同じの傾向が示している。多面的機能の保全意向は幸福度と正の相関関係を示している。認識が強い回答者は幸福度が高い。

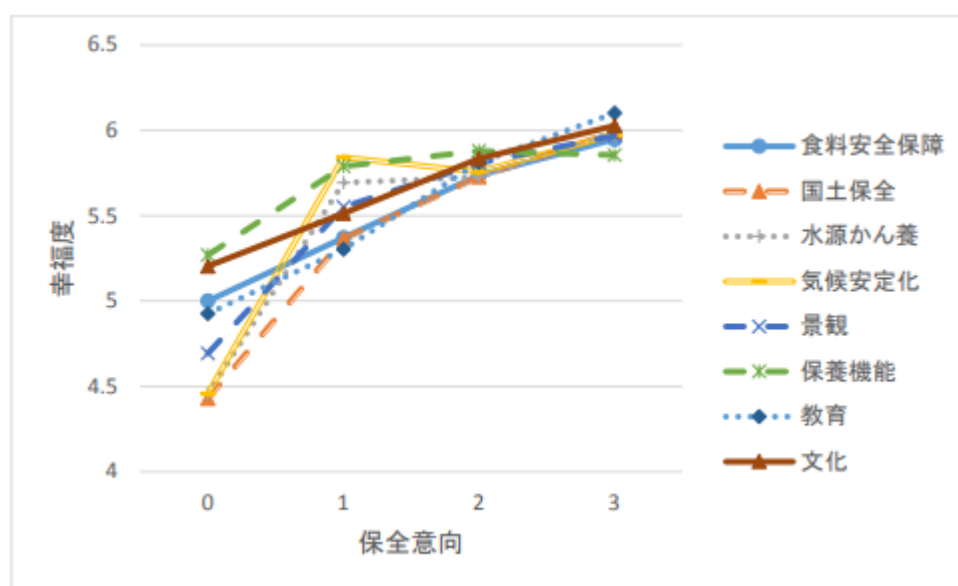


図 2-10 多面的機能の保全意向と主観的幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

これからは農村の保全活動によって、農山村での活動頻度を指す。保全活動は農作業、森林管理、道路・水路管理、伝統芸能・祭り、環境保全、ボランティア、福祉地という7種類の活動を含めて調査している。都市住民について、たまたに活動する回答者では、幸福度との相関が明らかにできてない。頻繁に活動していると回答した1割程度の回答者は、幸福度との関係が負の関係と見られている。佐々木らは、地域や家庭等の状況で、地域活動に参画せざるを得なくなったと予測している。農村住民について、活動頻度と主観的幸福度は正の関係が見られ、都市住民は逆の結果が得られた。

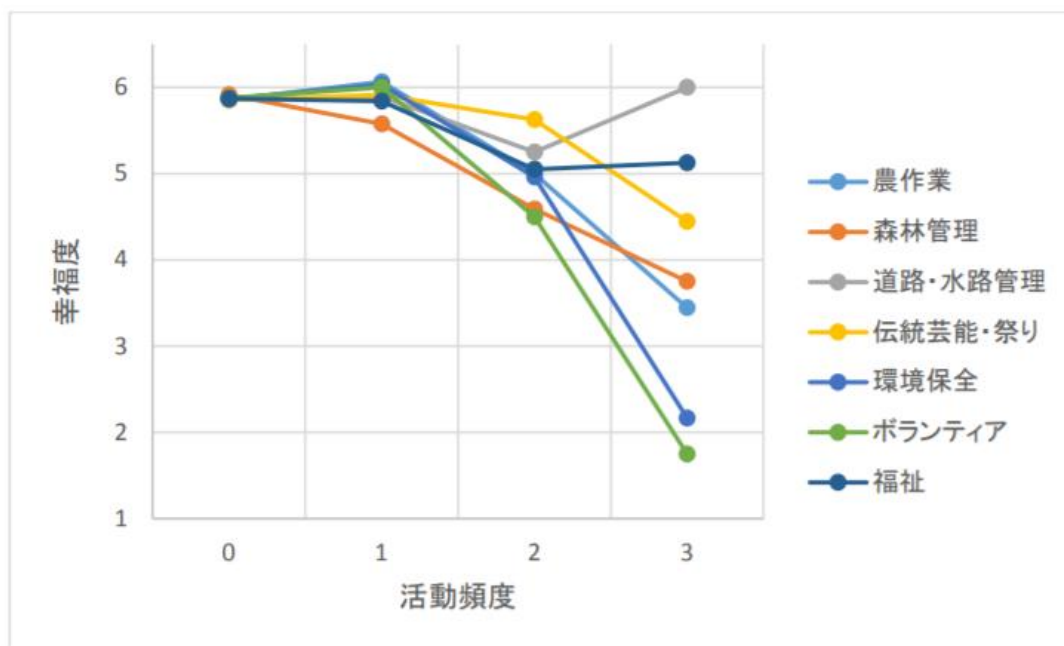


図 2-11 農山村での活動と幸福度の関係（都市住民）

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

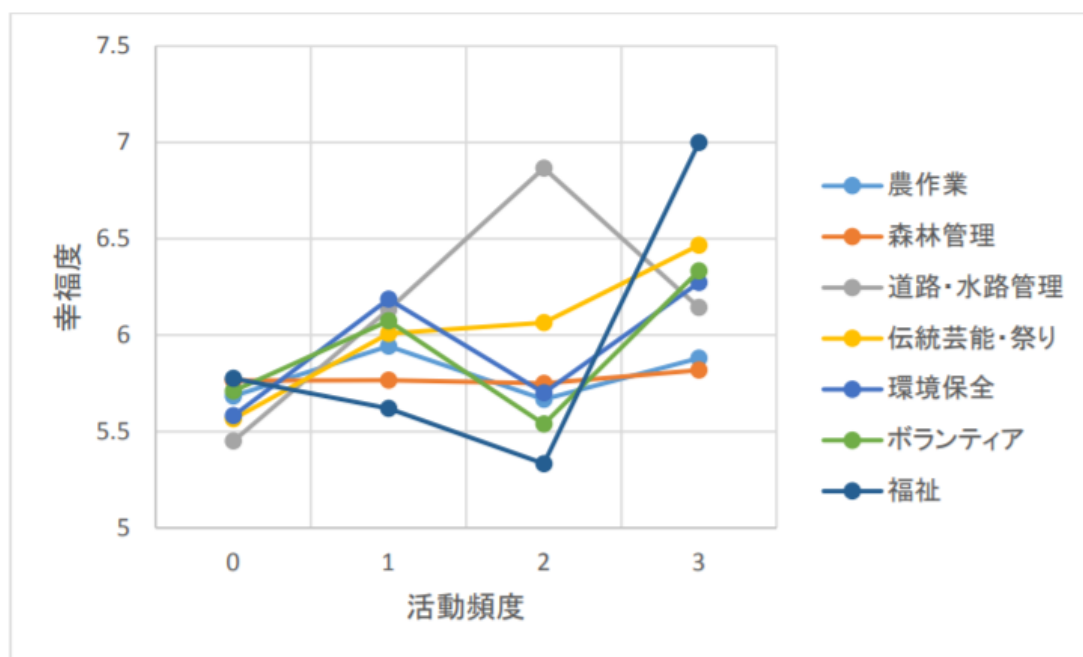


図 2-12 農山村での活動と幸福度の関係（農村住民）

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

佐々木らは、農村に係る活動は直接席な活動だけでなく、間接的に地域の食や農を支える活動も、幸福度に影響を与える可能性があると想定し、調査を行った。これからは促進活動によって、地域の食や農に関する行動頻度を指す。促進活動はオーナー制度、小口投資、地産地消、環境保全型農産物、グリツリ日帰り、グリツリ宿泊という6種類活動を含めている。都市住民について、頻度が低い場合は、おおむねに幸福度と正の相関であるが、頻度が上がると、負の相関が展示している。一方で、農村住民は逆の形勢が得られた。その活動と幸福度の関係は正の相関が見られる。地産地消、環境保全型農業の購買について、都市住民でも、農村住民でも、正の相関が示している。

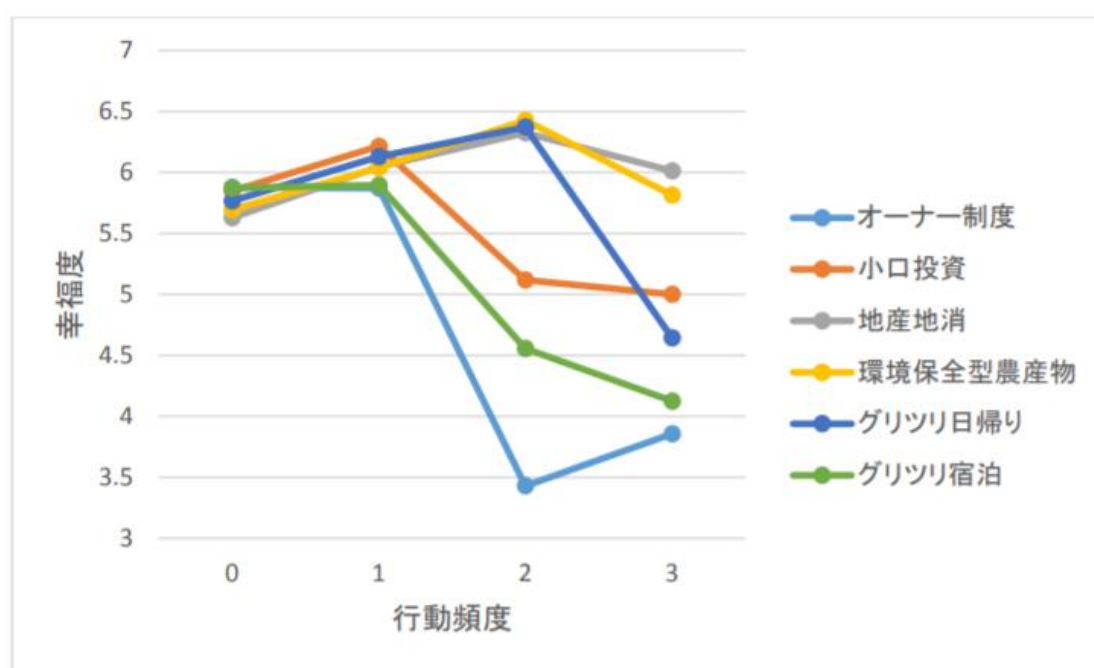


図 2-13 地域の食や農に関する行動頻度と幸福度の関係（都市住民）

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

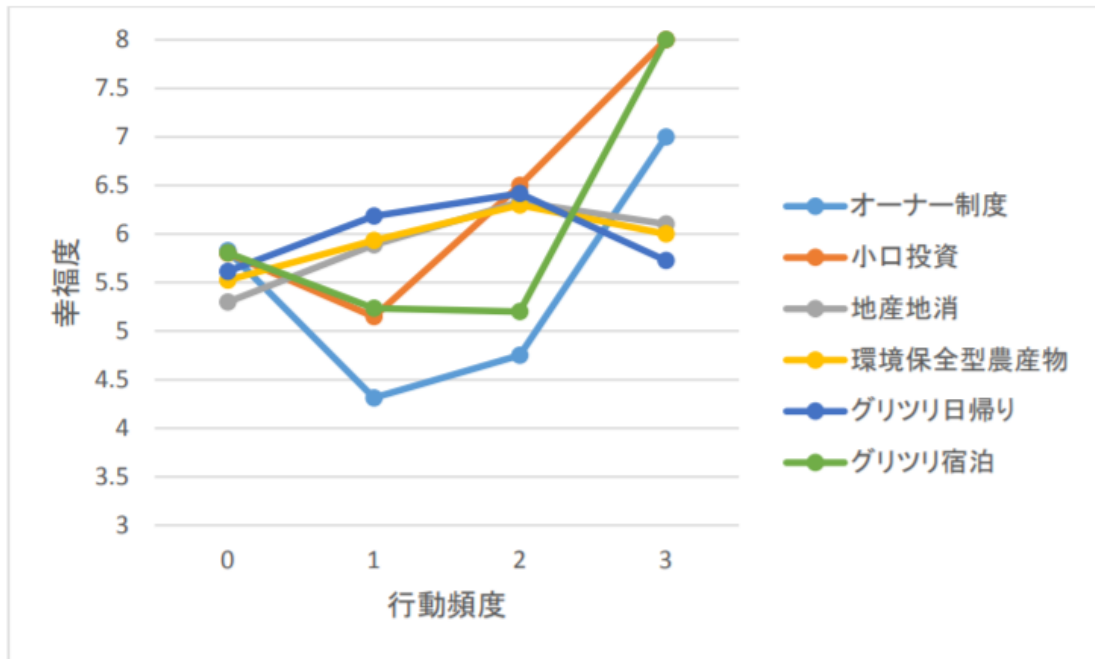


図 2-14 地域の食や農に関する行動と幸福度の関係（農村住民）

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

2.3.4 ソーシャル・キャピタル

主観的幸福度において、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)はまた重要な測定要素である。佐々木らは幸福度に影響を与えている要素とその影響を確認するために、ソーシャル・キャピタルに関する質問を設定し、調査を行った。佐々木らは近所付き合い程度、地域活動への参画の程度、互惠性の規範（自らを犠牲にした地域貢献）という3つの範囲について、ソーシャル・キャピタルと主観的幸福度の関係を明らかにした。

近所付き合い程度について、都市住民でも、農村住民でも正の相関関係を表している。

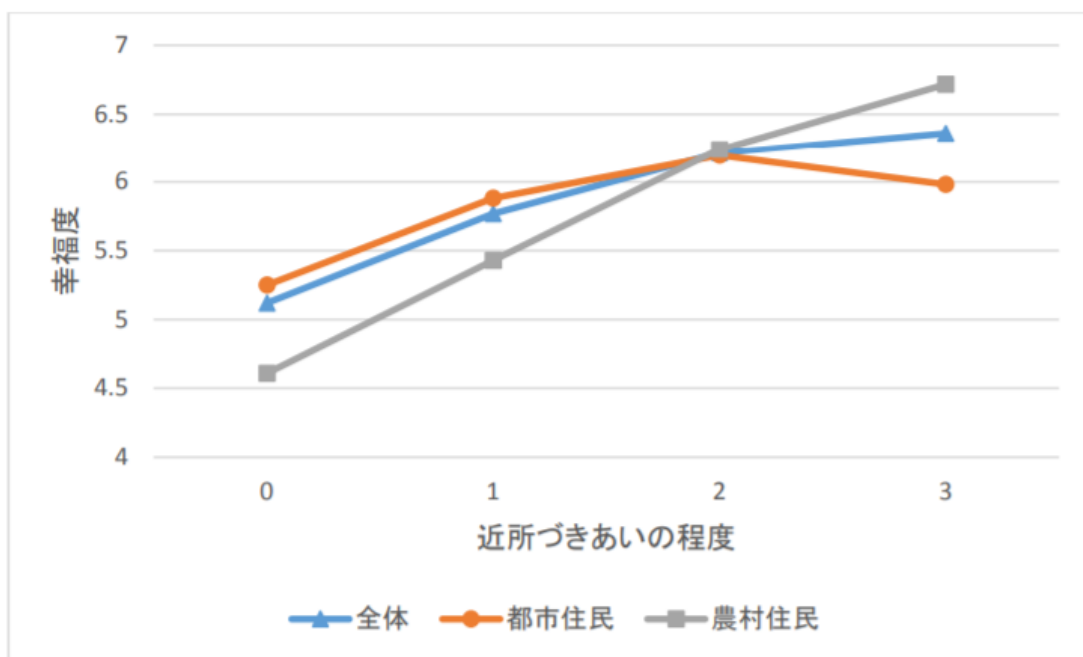


図 2-15 近所付き合いの程度と幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

地域活動への参加について、農村住民は正の関係性が展示している。一方で、都市住民において参加の頻度と幸福度は負の相関関係を図示している。

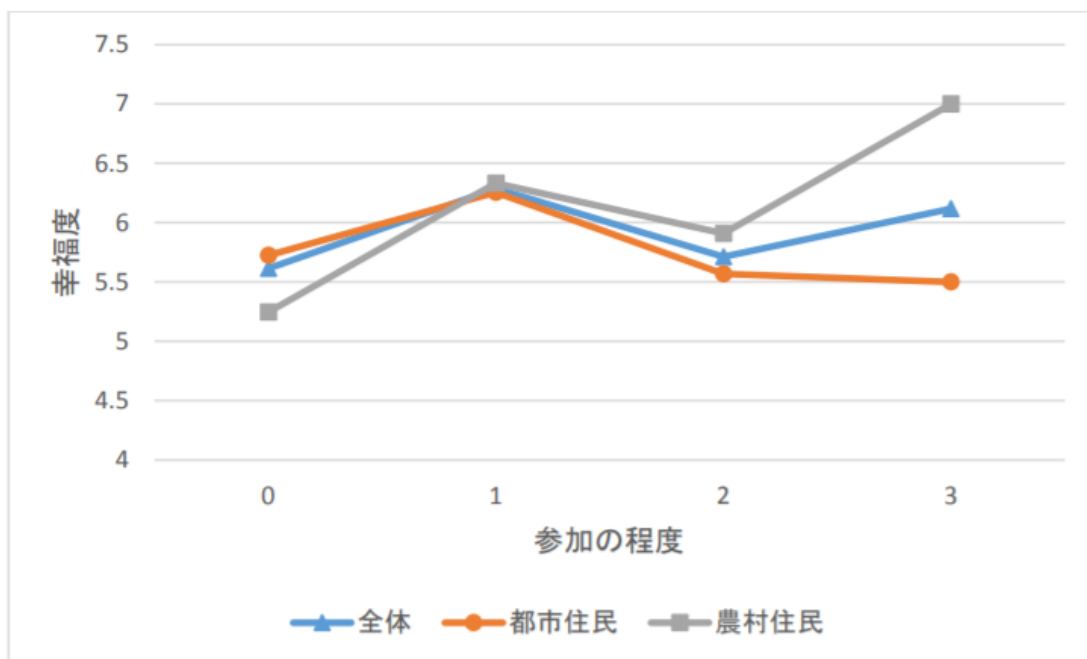


図 2-16 地域活動への参加の程度と幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

自らを犠牲にした地域貢献については、「あなたにとって直接的な利益はありませんが、地域全体にとっては利益があることのために、半日だけ時間を提供することが自治会や町内会でルール化された場合、あなたは賛成しますか」という質問によって、賛成する人と反対する人を分類し、幸福度への影響を分析する。都市住民、農村住民のいずれについても、地域に貢献したい方は幸せを感じている。

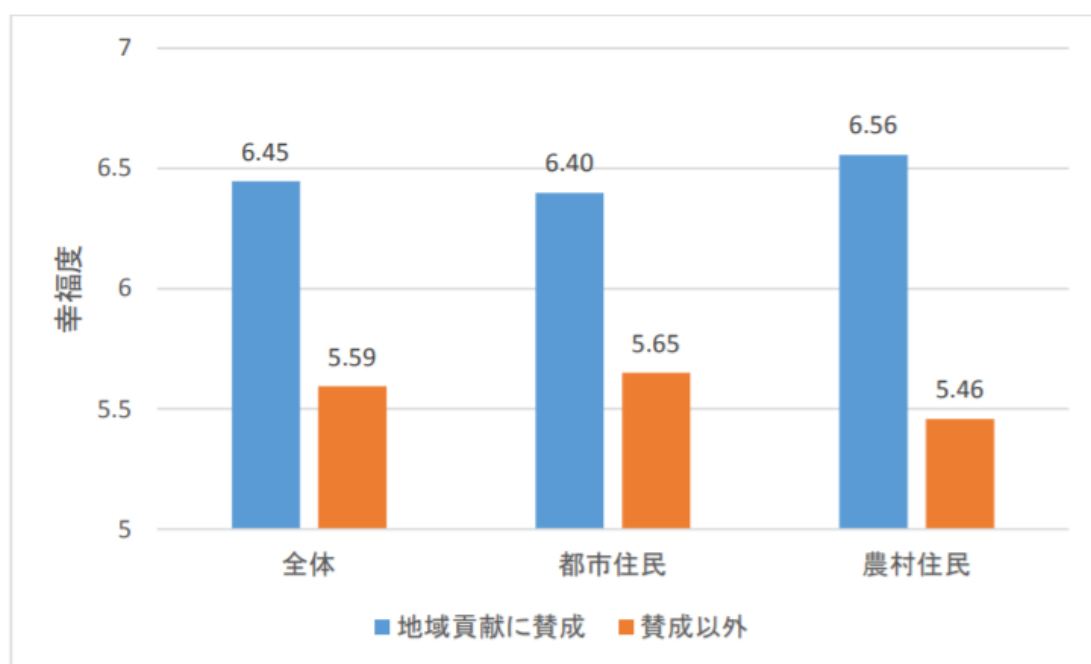


図 2-17 地域活動における互惠性の規範と幸福度

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

農村農業多面的機能に関する調査項目はソーシャル・キャピタルの調査項目、「地域活動へ参画の程度」と「自らを犠牲にした地域貢献」がある程度の重なりがあるので、本研究のアンケートが設問するときに、重複な内容は農村農業多面的機能に関する質問で調査した。ソーシャル・キャピタルに関する質問は近所付き合い程度、居留意識、観光客との信頼関係という3つの方面を調査した。自らを犠牲にした地域貢献について、民宿事業の経営目的とインタビューによって明らかにする。

2.3.5 将来展望

幸福度を考えた上で将来への展望が重要であると考えているために、将来展望に着目した調査を行った。将来展望の調査は、将来的な幸福度の見込みと農村や農業問題に関わる展望について、アンケート質問を設定した。

まず、主観的幸福度の10年後の見込みについて、都市住民と農村住民は全く異なる傾向がみられる。都市住民について、真ん中40代が一番低いようなU字である。農村住民について、20代から50代までの将来幸福度が緩やかに落ちており、60代の将来幸福が一番高い。

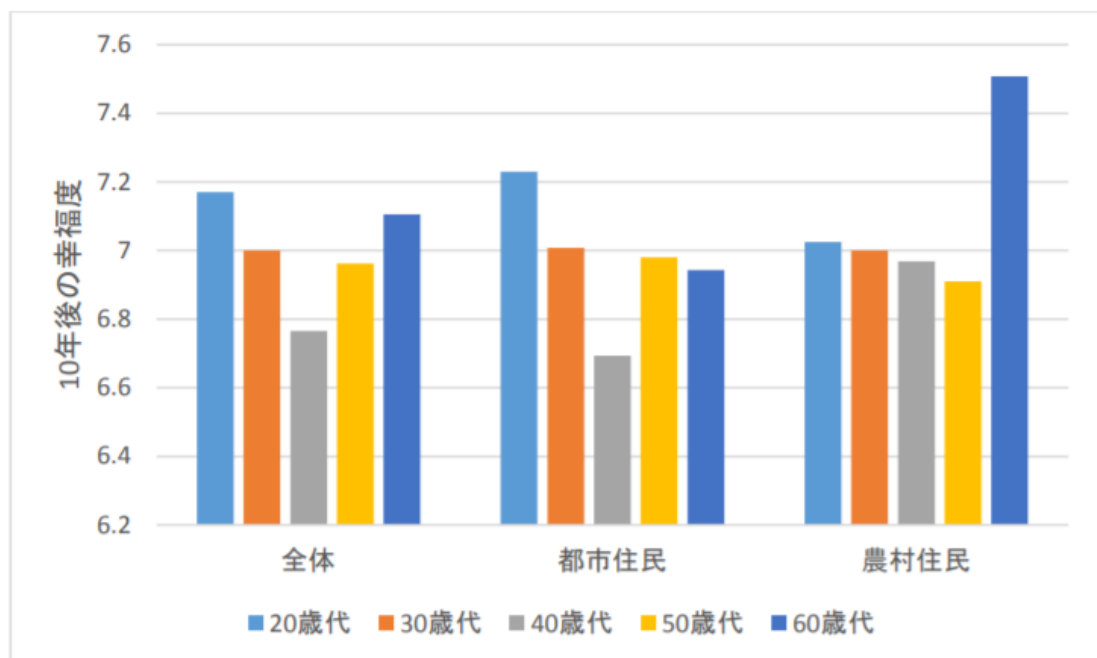


図 2-18 主観的幸福度の10年後の見込み

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

将来展望に関する質問は食料自給率，食の安全性，過農作放棄地，過疎化，都市と農村交流，再生エネルギー，輸出という7つの方面で構成された。

都市住民でも，農村住民でも将来展望は幸福度と概ねに正の相関が図示している．農村住民の方はさらに顕著である．

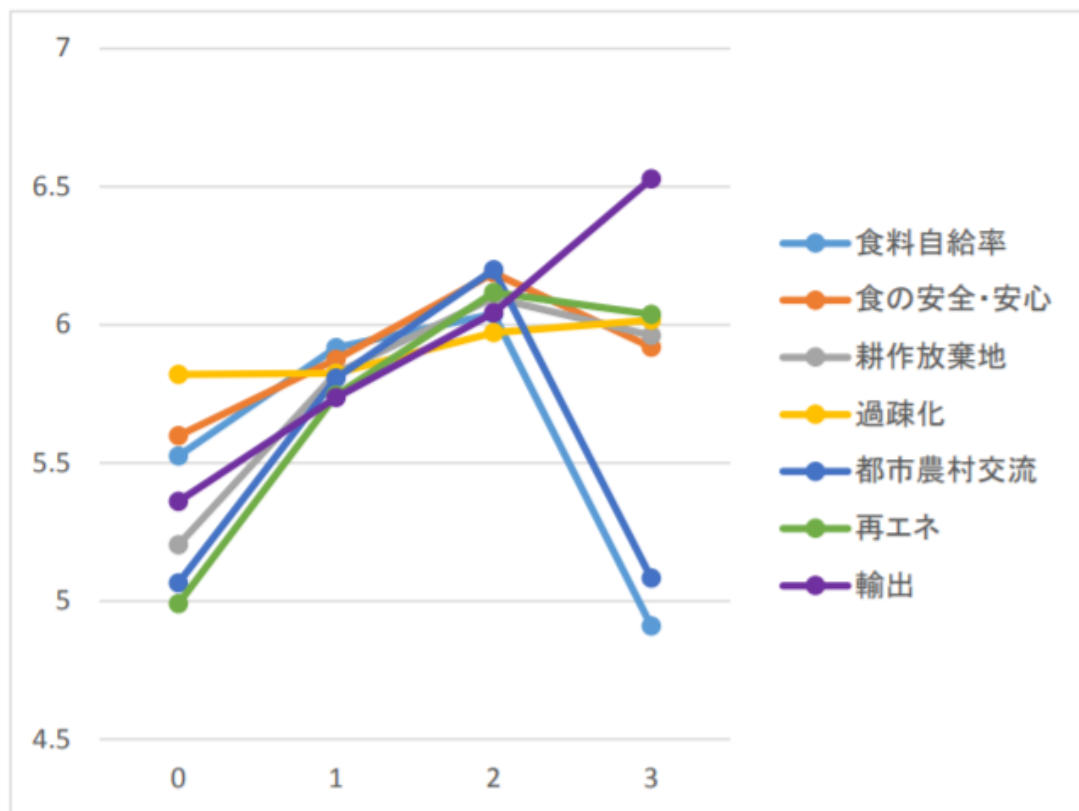


図 2-19 農業農村の将来展望と幸福度（都市住民）

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

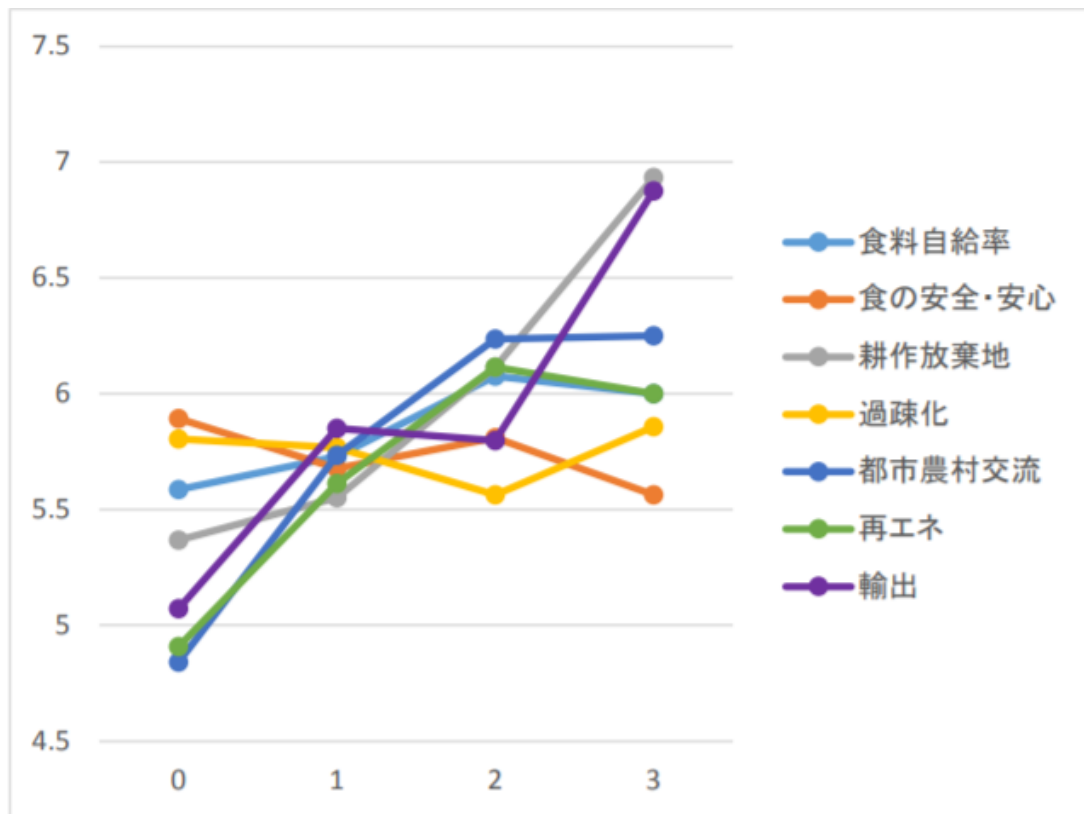


図 2-20 農業農村の将来展望と幸福度（農村住民）

出典：農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発

2.3.6 まとめ

佐々木らの研究は農村の自然資本と社会関係資本について着目し、幸福度との関係を明らかにした。都市住民の幸福度の平準値 5.82 点と比べると、農村住民の平準値は 6.04 で少し高い結果が出した。これによって、幸福度は経済・便利性以外の要因から影響を受け取ることが示している。農村農業多面的機能と社会関係資本など方面の考察から、農村価値の再認識の必要性が示唆した。

具体的な項目によって、都市住民と農村住民の間に顕著な違いが図示している。性別について、都市住民の男性の幸福度は平準的に女性より低い。年齢については、都市住民が正の相関であり、農村住民が U 字である。UIJ ターンの経験の有無は、I ターンの経験者の幸福度が正の相関が見られている。

所得について、都市住民の幸福度はせいの相関であるが、農村住民の幸福度と所得の関係が観察されなかった。相対所得は、都市住民、農村住民両方において正の相関である。

自然資本関係の変数では、都市住民においては、多面的機能を保全する意識の強い人ほど幸福度が高い。食料・農業・農村問題への展望が明るい人は幸福度が高い。

社会関係資本について、近所付き合い程度と信頼できる人の数が多いほど幸福度が高い。

2.4 春蘭の里に関する文献調査

2.4.1 地域発展過程の合意形成

春蘭の里は地域創発成功例として、地域発展過程の民宿合意がよく論じている。山下らは地域発展過程の合意形成の特性を着目し、急速な人口減少が進む地域において、合意形成の要素を明らかにしている。この研究は組織の方面から、民宿の発展を論じている。

「地域づくりに関する合意形成は、構想段階での利害関係の調整や事業決定後の円滑な実施体制の構築、成果利害の分配、再投資方法などの重要な要件を包含する、ステークホルダーによる集合行為である。」（山下ら、2011）

春蘭の里を成功事例として考察し、合意形成に関する二つの要素を導き出した。まずは利益の呼び込み効果である。「1世代につき毎月20～40万円の利益が安定的に期待できる事業であれば、反対している住民を必ず賛同するという成功の認識があった。」と論じている。もう一つはリスク評価の認識である。衰退している地域において、過疎化と少子高齢化が直面している。活性化活動が成功しなくても将来像が悪化しない、成功したら将来の悪化が回避できるという認識を受け取り、合意形成が実現できる。

2.4.2 春蘭の里の成功要因分析

浦達雄は春蘭の里を事例として、農村の活性化の成功は以下のいくつかの要因を分析した。まず、委員会の指導価値を認めている。過疎化と少子高齢化が進んでいる地域における、自発団体春蘭の里実行委員会は経営目的を明確し、参加者に指導している。次は、石川県・能都町など行政の各種の支援の作用を提示した。さらに、地域の各サイトと繋がることを推奨している。そして、春蘭の里は日本を代表する平凡な農村と考えている。春蘭の里の成果は地域固有資源の活用に帰属した。最後は春蘭の里の経営戦略である。春蘭の里は大規模的に開発していなく、風向や宿泊施設など資源より地域の文化・精神が最も重要な役割を果たしている。（浦達雄，2015）

2.4.3 村づくり産業化

春蘭の里における、村づくりの産業化を分析するために、佐藤真弓は小学校の事例を活用し、村づくりの産業化の可能性と原因を論じた。村づくりの目標は以前の生活環境整備から経済振興へ移行し続けていることを提示した。この背景で、春蘭の里のように小学校の活用は地域資源の活用と産業の延長と考えている。村づくりにとって、地域の農林産資源と人的資源を活用し、既存の地域資源から新たな価値を生み出すことは、従来の地域産業の展開が実現している考え方である。地域資源に新しい意味を与え、再発見することは各地域に村づくりの可能性を示している。一方、過疎化と少子高齢化が進んでいる地域における、高齢者の価値を再認識し、自営業者に進め、農産物の加工・販売できるように指導する。これによって、地域発展を実現する可能性を見せている。（佐藤真弓，2011）。

2.5 おわりに

第二章は本研究に関する参考文献をレビューした。農家民宿サービスをある程度理解する上で、本研究の調査方向、主観的幸福度を引き出す。また、主観的幸福度に関与する要素、農業多面的機能と社会的資本を紹介する。そして、農家民宿サービス提供を主観的幸福の関係を説明するために、サービスの文脈価値を紹介する。最後は春蘭の里に関する文献をレビューする。

第3章 春蘭の里の紹介

第3章では本研究の研究対象春蘭の里を紹介する。春蘭の里の概観から、春蘭の里の運営組織、リーダーの経営理念、経営目的など方面から紹介する。

3.1 春蘭の里の概観

1996年9月に、宮地・鮭尾地域異業種の7人（農業・林業・会社員など）が春蘭の里実行委員会を成立した。地域活性化、町づくり、高齢者生きがいづくり等目標を設定し、宿泊・農産物加工など各種事業を展開してきた。春蘭の里の所在地の能都町は、自然の恵みへの感謝気持ちと神への信仰心が高い。地域で、部屋など有形文化財産と祭りなど無形民俗文化財が今まで受け続けている。人気になるとともに、民宿の範囲も能都町から、輪島、穴水町まで拡大している。他のネットで調べた情報を表3-1で表す。

表 3-1 春蘭の里の概観

団体設立時間	1996年9月
範囲	能登半島の北東部に位置し、山田川上流域の山あいにある能登町宮地、鮭尾などの集落一帯
民宿所在地	石川県能登町の宮地、鮭尾、柏木、瑞穂、武連、柿生など地域、輪島市、穴水町
生物地理区分	コナラ林（西日本）
人口	日本人17912人、外国人150人、総世帯数7722戸（能登町のデータ平成29年）
環境要素	二次林、水田、畑、小川・水路、ため池、社寺林、人工林、その他
取組主体	春蘭の里実行委員会

3.2 春蘭の里の運営組織

図 3-1 のように、春蘭の里の運営組織は(農)のと夢づくり工房、農家民宿郡、NPO 法人こぶし、(有)春蘭の里ファーム、奥能登春蘭の里実行委員会という 5 つの部分で構築されている。各組織は独立採算制を採用しているが、自分が担当している役割を完成し、有効的に協力している。具体的な割り当ては、奥能登春蘭の里実行委員会が農家民宿の運営を指導し、農作業体験・イベント等のプランを企画し、特産品開発・栽培品目等企画を提案する役割を担当している。農家民宿群はサービスの実際提供者と観光客との直接交流者として、宿泊サービス・地元料理提供・農作業体験サービスなど提供している。夢づくり工房は農産品加工の役割を担当し、直売所として運営している。夢づくり工房は観光客だけでなく、地元住民にとっても重要なショッピング場所である。NPO 法人こぶしは宿泊管理の役割を担当し、また都市から人の定住の促進と修学旅行受け取りを行っている。最後は(有)春蘭の里ファームである。主に農産品栽培と山管理を行っている。

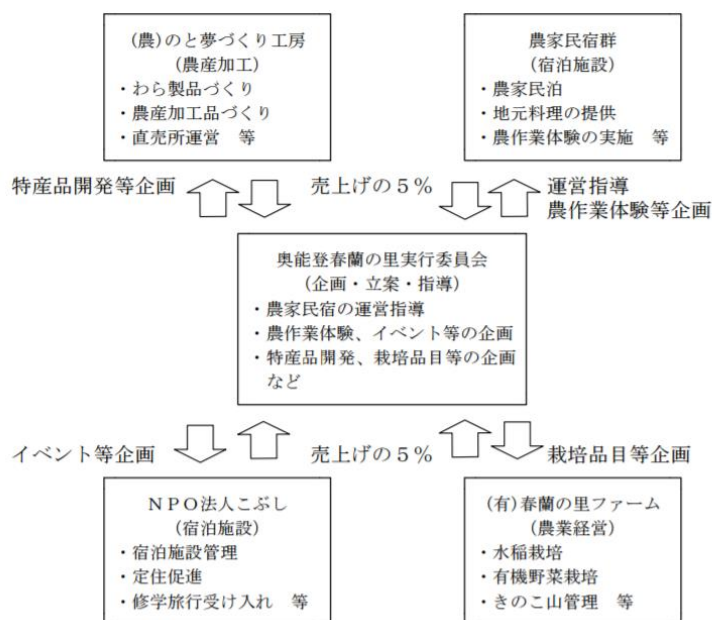


図 3-1 春蘭の里の運営組織

出典：農林水産省（平成 23 年 6 月）内閣総理大臣賞受賞 「白壁」と「黒瓦」の統一イメージを通じた農家民宿を中心としたむらづくり

3.3 春蘭の里実行委員会事務局長と経営理念

農家民宿で地域おこし 春蘭の里の取り組み		
多田喜一郎 春蘭の里実行委員会事務局長 (石川県能登町)		ただ・きいちろう 1948年生まれ。砕石会社の社員などを経て、 91年多田興業輸送（有）設立、代表取締役社長。 96年春蘭の里実行委員会設立、 97年民宿「春蘭の宿」開業。 2003年紙谷砕石（株）代表取締役社長。 山村生活が体験できる農家民宿の仕組みを地域に導入、日本の原風景と重なり海外からの訪問者数も伸びている。

図 3-2 春蘭の里実行委員会事務局長

多田氏の論述は以下の6点にまとめることができる。

- a) 地域の再生は、若い者が戻ってきて、赤ちゃんの泣き声が聞こえる地域になることである。そのために若者を戻し、人口のバランスを再構築する。
- b) 元気な高齢者は地方の資源だという視点を持って、若い人が戻って来られる環境を作る。
- c) 地域再生を実現するために、お金の循環が必要である。若い者が戻ってくる条件は農家民宿で収入が40万を達成することと設定し、地元の本業と日常生活以外に、農家民宿を運営しながら、ゆとりの暮らしを目指す。
- d) 事業の成功は地域特色の活用に帰属する。農家民宿の創業の出発点は、ホテルの同質化と違い、地域特色と日本の伝統的なものを感じできる宿泊と食事を提供することである。地元だけで体験できる経験を提供し、観光客を喜んで来る形で運営する。
- e) 教育旅行と修学旅行を大事にする。旅行を通して、体験しながら、教育効果も生まれる。
- f) 春蘭の里は地域行政に依存しないが、行政の支援が得られるシステムを構築することを目指す。

3.4 春蘭の里から発信している情報

3.4.1 情報の構成

以下では，春蘭の里のホームページをとおして，観光客に伝達している情報を紹介する．

春蘭の里のホームページは主に三つの方面の情報を示している．民宿とサービスの紹介，経営理念と創業構想，地域連携である．

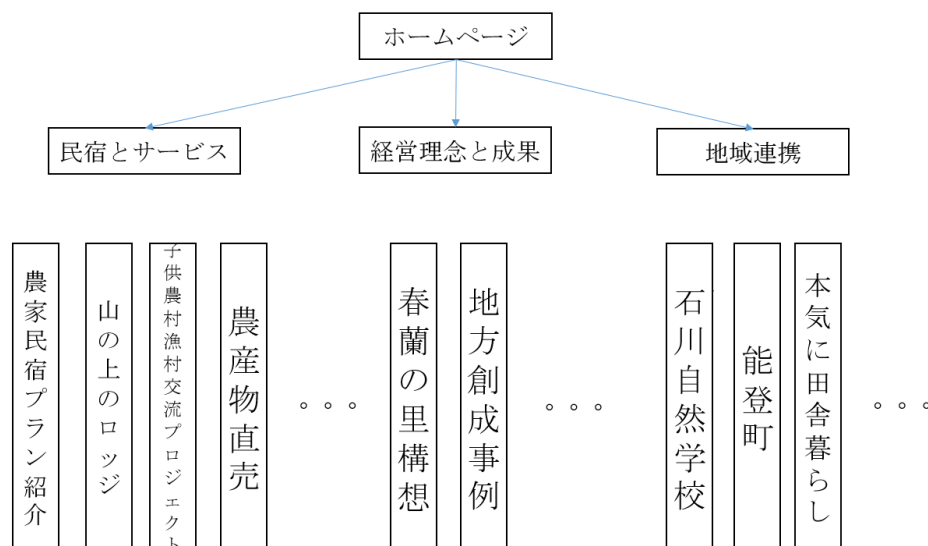


図 3-3 ホームページの構成

3.4.2 春蘭の里の創業構想

春蘭の里のホームページで組織リーダーの考え、創業目標、春蘭の里がどのような組織であるかという情報を観光客に伝達している。春蘭の里は森林、農業など地域資源を活用し、林農公園ビジネスを行っている。観光形態は農家民宿の形で、農法、山菜、別荘地など要素を活用している体験参加型観光である。春蘭の里によって、地域生活を全体的上昇させ、観光客に魅力を認識させ、地域活性化を実現するなど目標を期待している。

このような観光活動は都市住民に地方生活の体験チャンスを提供しているが、体験と共同生産が実現できないと、都市住民だけでなく、地域住民にとっても大きな損失と思われる。

春 蘭 の 里 構 想

春蘭の里全体構想に基づき観光森林、観光農業等地域全体を林農事公園ビジネスとする

都会人が故郷と思うような1日一客の民宿群（いろりつき）自然農法、山菜、キノコ、貸ロッジ、貸別荘等の造成により体験参加型のシステム

図 3-4 春蘭の里構想

出典：春蘭の里のホームページの構想 (<http://shunran.info/kouso/kouso.pdf>)

春 蘭 の 里

春蘭の里実行委員会（H8年9月吉日）

*趣 旨

地域（集落）の活性化、故郷を愛し自然を愛し利己主義からの脱皮
個人主義（個々、人が全て良くなることを願う）的で魅力が多彩で納得
若者、お年寄りで誇り高い故郷作りを目的とする。

図 3-5 春蘭の里趣旨

出典：春蘭の里のホームページの構想 (<http://shunran.info/kouso/syusi.pdf>)

3.4.3 地域システムの組み込み

春蘭の里のホームページは、能登スマートドライブ、能登鉄道会社、能登町、能登観光プラン、田舎暮らしなど外部リンクがあり、地域の組織と積極的に連携している。

春蘭の里目標は地域の行政を依頼しないが、行政が応援してくれるような組織を構築することである。他の地域組織と積極的に交流しながら、自発的に努力し、目標を達成している。

表 3-2 外部リンクネット

リンクシステム	ネットアドレス
能登スマート・ドライブ・プロジェクト協議会 事務局	http://www.pref.ishikawa.jp/syoko/notosmartdrive/index.html
のと鉄道株式会社	http://www.noto-tetsu.co.jp/
のと夢づくり	https://noto-yume-zukuri.jimdo.com/
いしかわ自然学校	http://ishikawashizen.jp/
能登町	http://www.town.noto.ishikawa.jp/www/total_top.jsp
本気に田舎暮らし	http://www.mjna50.net/

第4章 研究の構成

本章では、民宿運営者の立場から、組織リーダーと観光客との関係を紹介する。また、組織リーダーと民宿運営者の目的共有、問題意識について説明する。

4.1 農家民宿に組み込む三者の関係

観光客、春蘭の里と民宿運営者という三者が農家民宿サービスと観光活動を構成する。観光客はサービスの受容者だけでなく、体験・交流の要素を理解する上で、サービス生産のプロセスへ積極的に参加する。民宿運営者は観光客を地域につなぎ、観光客と直接的に接している。地域で観光客と共同に生み出した良い経験は観光客の獲得だけでなく、民宿運営者にとって、また重要獲得である。春蘭の里組織はサービスを提案し、また民宿の運営を指導している。三者の関係は伝統の旅行会社の方式と役割分配と比べると、各自の役割が融合し続けている。

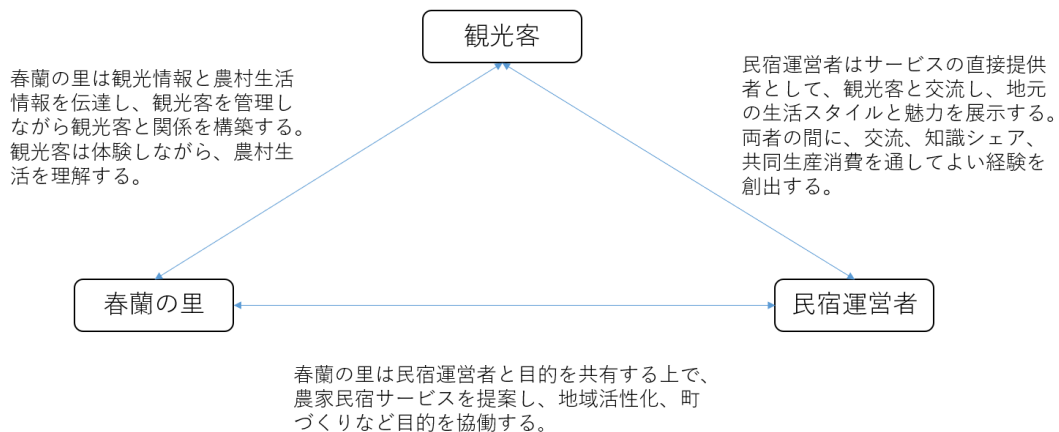


図 4-1 全体の関係

4.2 組織リーダーと民宿運営者の目的共有

地域活性化，町作りなど目標の達成は組織リーダーと民宿運営者の協力を依頼している．さらに，観光客との協力も必要だと考えられている．第3章で述べた春蘭の里の運営組織のように，民宿運営者は実行委員会の指導を受け取り，提案するサービスを実施する．獲得する経験によって，フィードバックする．民宿運営者は組織リーダーの考えが一致しているかどうかは事業の結果と直接的に結び付けている．

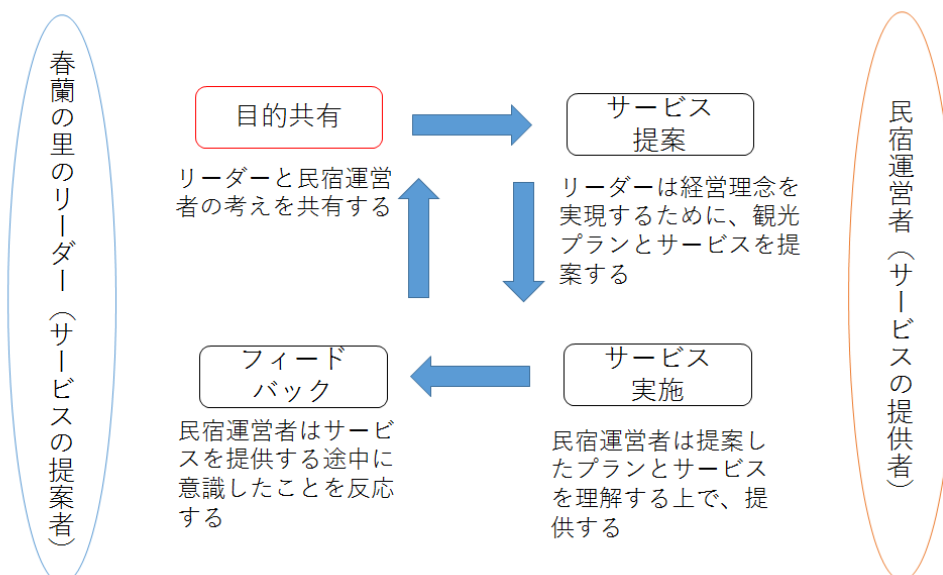


図 4-2 サービスの提案者と提供者の目的共有

4.3 問題意識

民宿運営者は主に地域の高齢者で構成されている。地域活性化と町づくりなど目標のために、民宿を営業し、地域に貢献している。民宿運営者たちの状態を把握するために、主観的幸福度の尺度でアンケート調査とインタビュー調査を行う必要だと考えられる。得られるデータを分析し、民宿運営者は何を重視しているかを明らかにする。

次いで、民宿運営者と組織リーダーの関係について、考えは一致しているかどうかを明らかにするために、アンケート調査とインタビュー調査によって、得られるデータと組織リーダーのインタビュー結果を比較し、共通点と相違点を導き出す。

最後は、観光客との間に、インタビューによって、印象深い経験を分析し、主観的に幸せ感への影響をまとめる。

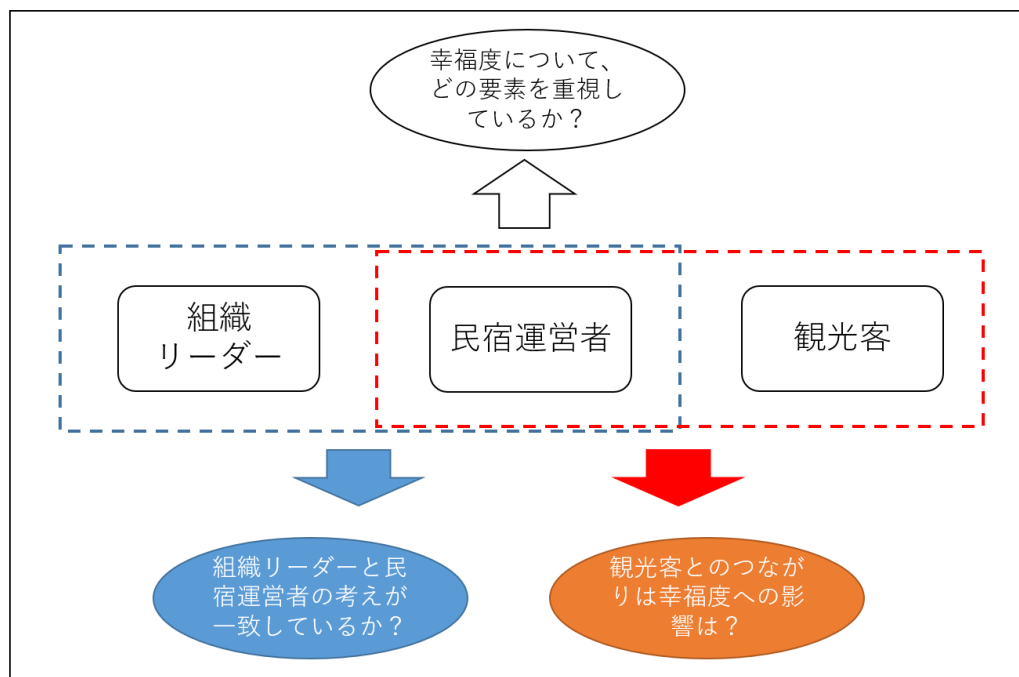


図 4-3 問題意識

第 5 章 組織リーダーに関する予備調査とアンケート設定と実施

本章では、組織リーダーに関する予備調査、アンケートの設定と実施について説明する。組織リーダーに関する予備調査は、春蘭の里のリーダー多田氏の訪問によって、多田氏との相談を通して、春蘭の里の現状、創業期待、直面している問題、地域分析、各調査要素への観点に関する情報が手に入れた。次いで、アンケート質問設定は本調査のアンケート設計と根拠を説明する。最後は、アンケート調査の実施を紹介する。

5.1 組織リーダーに関する予備調査

5.1.1 予備調査行程

2018 年 1 月 6 日 7 日に、春蘭の里のリーダー多田氏の宿に 2 日の訪問が行った。第 1 日に、リーダー多田氏との相談について、多田氏は事業の現状、経営の目的、地元の食と文化の守りたい気持ちが分かった。また、地域の料理、生活と文化を体験した。図 5-2 は囲炉裏を使う伝統の生活状態を見せている。図 5-4 は春蘭の里の料理と漆器の写真である。山菜・野菜など農産物によって、自然の味を享受し、伝統の漆器・杯を通して、地域の食の文化を体験した。

第 2 日の行程は、多田氏と一緒に 3 軒の民宿を見学し、夢づくり直売所を訪問した。また、インタビューによって、多田氏は農村農業多面的機能と社会的資本に関する各要素の観点を調査した。

表 5-1 第 1 回実地調査の行程表

第 1 日 2018 年 1 月 6 日	15:00～17:00 17:30～20:30 参加者：多田喜一郎夫婦，池田満教授，王也
第 2 日 2018 年 1 月 7 日	10:20～10:45 春蘭の里→竹端 11:05～11:15 竹端→夢づくり直売所 11:20～11:50 夢づくり直売所→小栗 12:00～12:30 小栗→海岸線→新龍坊 12:50～13:00 新龍坊→春蘭の里 参加者：多田喜一郎，王也



図 5-1 多田氏との写真



図 5-2 囲炉裏



図 5-3 伝統的彫刻



図 5-4 伝統的食事

5.1.2 春蘭の里の現状

- 参加民宿について、全春蘭の里の民宿は 47 軒の宿を運営している。民宿は宮地、鮭尾など十数町を含めており、春蘭の里から走行して 25 分以内に分散している。
- 2017 年に、約 1 万 6 千人の観光客が来た。人数が最も多い団体は関東からの中学生の修学旅行、約 300 人であった。
- 外国からの観光客は減少になっている。特に去年は台湾・中国からの観光客が少なくなった。民宿運営者は外国人との交流が困難になっている。
- 民宿の運営者について、若者は三人だけで、他の運営者は大体高齢者である。
- 現在の春蘭の里は民宿、販売、体験などサービスについて、他の観光と区別させ、範囲を広げることによって、ブランド化されつつある。

5.1.3 創業理念

多田氏との相談を通して、以下のことが分かった。まず、多田氏は戦略的に収入のことを強調している。これはネット上に述べた経営理念と同じである。民宿運営について、1 軒あたり 40 万円の売上を期待している。40 万円の売上は自家製あるいは地産地消の農作物食材のコスト、電気料金、水料金などを支払った後に、民宿運営者がまた十分な利益を得ることができる。

この目標設定の原因は二つである。まずは少子高齢化の改善のためである。地域の若者たちは金沢など地域近い都市とか、東京など大都市とか引っ越しして生活している。魅力的な収入がないと、若者が戻れないと考えている。もう一つの原因は、参加者の高収入によって住民を参加させたいと考えている。

農家民宿、地域ブランド化、農産物販売、これらの努力は地域に愛着を持っているためである。地域における、少子高齢化と過疎化の改善によって、伝統の味、農業の生活、伝統の文化を守りたいと考えている。

5.1.4 農村農業生活に関する各要素のレビュー

組織リーダー多田氏との相談を通して、多田氏は農村農業多面的機能と社会的資本に関する各要素の観点に関する各要素の考えをまとめる。

地域の若者が都市に移動し、ほとんどの民宿は高齢者だけ運営している。少子高齢化を改善するために、若者が戻れる環境を整えたい。そのために、収入増加を主要な経営目的を設定し、より多くの若者が地域に定着できるように努力している。

農村農業のための機能の保全意向に関しては、経営のために、地域の保養機能、教育機能、文化要素を最も重視している。他の保全機能、気候安定化機能、景観保全機能は主要な目的を設定していない。

農山村の保全活動について、道路・水路管理活動が定期的に行っている。森林の管理活動はあまり行っていない。地域の祭りなど文化要素を最も重視している。地域の住民は雪かきなどボランティア活動にあまり行っていないと判断した。

農山村の促進活動について、農産物の品質に自信があり、地域住民は地産地消活動をよく行っている。また、農産物のブランド化が進んでいるが、民宿産業の急速成長と比べると、発展が早くない。教育機能を重視し、伝統の文化を子供に教えることの意義を認め、修学旅行という観光方式を最も歓迎している。

将来展望について、食の安全性に自信がある。将来に食料自給率、過農作放棄地と農村過疎化は悪化につながると考えている。また、農村と都市の交流を期待している。農村と都市の交流を通して、都市の人に農村の生活と文化を紹介し、地域の過疎化を改善したい。

最後は地域の住民の近所付き合いが高いと考えている。また、観光客と信頼関係を構築したい。

表 5-2 組織リーダー多田氏の農村農業生活に関する各要素のレビュー

調査対象	組織リーダー多田氏
個人属性	高齢者を大切する。 大体の若者が家事を助けていない。 UI ターンの状況がある。 収入増加は主要的な経営目的を考えている。 年齢層のバランスを重視している。
農村農業ための面的機能の保全意向	保養機能，教育機能，文化要素を一番重視する。 保全機能，気候安定化，景観保全をあまり重視していない。 伝統文化（食，生活，文化）を守りたい。
農山村の保全活動	道路・水路管理活動が定期的に行われる。 森林の管理活動は住民自らの自発的活動である。 地域の祭りなど文化要素を一番重視している。 地域における住民は雪かきなどボランティア活動があまり起こっていない。
農山村の促進活動	農産物の品質に自信があり，地域住民は地産地消活動をよく行っている。 農産物のブランド化を進んでいるが，発展は民宿より遅い。 修学旅行という観光方式を一番推奨する
将来展望	食の安全性に自信がある。 将来に食料自給率，過農作放棄地と農村過疎化は悪化につながると考えている。 農村と都市の交流を期待している。
社会関係資本	地域の住民の近所付き合いが高いと考えている。 観光客への信頼性が高い。

5.2 アンケートの設定と実施

次いで、本調査のアンケート設計と実施を紹介する。

5.2.1 アンケートの設計

本調査のアンケートは表 5-3 のように、個人属性、農村農業多面的機能、将来展望、ソーシャル・キャピタルという 4 つの部分を含めている。個人属性について、佐々木らの調査を参考し、主観的幸福に関与する年齢、性別、UI ターンに関する質問を設定した。また、予備調査によって、民宿運営者の運営方式・運営期間と運営目的に関する質問を設定した。民宿運営者の運営方式と運営期間は主観的幸福に関与していると考えている。運営目的は組織リーダーとの比較のために、設定した。農村農業多面的機能に関する調査は農村農業多面的機能の保全意向、保全活動の参加頻度、促進活動の参加頻度で構成されている。農村農業多面的機能に関する質問は佐々木らの調査尺度と問題形式を遵守した。将来展望に関する質問も佐々木らの調査尺度と問題形式を遵守し、調査を実施した。最後のソーシャル・キャピタルに関する質問は予備調査によって、居留意識と観光客対応が主観的幸福に関与していると考えているので、質問を設定した。

表 5-3 調査カテゴリー，要素，意義，出典

カテゴリー	調査要素	調査意義	出典
個人属性	年齢	民宿運営者の年齢層と主観的幸福度の関係を明らかにする	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
	性別	民宿運営者の性別と主観的幸福度の関係を明らかにする	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
	運転方式	一人暮らしか家族生活かと主観的幸福度の関係を明らかにする	個人提案
	UI ターン	民宿運営者の都市生活経験の有無と主観的幸福度の関係を着目する	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
	経営目的	民宿運営者の経営目的を明らかにする	個人提案
	運営期間	民宿運営者の運営期間と主観的幸福度の関係を明らかにする	個人提案
	主観的幸福度	主観的幸福度の定量調査	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
農村農業多面的機能	農村農業多面的機能の保全意向	農村農業多面的機能の保全意向に関する各要素の重要性の認識を明らかにする	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
	保全活動の参加頻度	民宿運営者の農村保全活動の参加頻度と幸福度の関係を明らかにする	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
	促進活動の参加頻度	民宿運営者の農村促進活動の参加頻度と幸福度の関係を明らかにする	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
将来展望		民宿運営者の農村農業に関する将来展望と幸福度の関係を明らかにする	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
ソーシャル・キャピタル	居留意識	民宿運営者が住み続けるかと幸福度の関係を明らかにする	個人提案
	近所付き合い程度	民宿運営者の近所付き合い程度と幸福度の関係を着目する	主観的幸福度アプローチによる都市と農村の比較分析
	観光客対応	観光客への信頼性を明らかにする	個人提案

5.2.2 調査概要

本研究は2018年1月11日から2018年6月10日にかけて（大雪のため中断あり）、柏木、鮭尾、宮地、瑞穂、柿生、竹太、古君という7つの地域で調査を実施した。春蘭の里に登録している32軒の民宿の中で、アクセス性が悪い所と休眠状態にあるところ除外し、多田会長から了承が得られた宿18軒を訪問し、有効な調査結果を15件取得した。

以下で6回の調査の行程を表6-2でまとめた。

表 5-4 アンケート調査行程

日付	訪問民宿	訪問人
2018/1/11	たかお	王也
2018/4/26	思い出，磨郷，じろしろ，かや	池田満，王也
2018/5/21	和助，清龍坊，堂々坂	王也
2018/6/1	大峰，道場，ぜんべ，	王也
2018/6/2	古君，能登，柿生	王也
2018/6/10	陸	王也

第 6 章 データ分析

本章では、アンケート調査とインタビュー調査について得られたデータを分析する。アンケートの部分は調査対象の個人属性、農村農業ため面的機能の保全意向、農山村で保全活動の参加頻度、農山村で促進活動の参加頻度、調査対象の将来展望、社会関係資本が主観的幸福度にどのような影響を与えているについて分析する。インタビュー部分は主に、民宿運営者が観光客・春蘭の里組織内に他のメンバーとの交流について得られた知恵・経験・価値観を調査した。得たデータを分析し、民宿運営者と観光客の経験構築と幸福度への影響を分析する。

6.1 アンケート調査

6.1.1 主観的幸福度

図 6-1 に春蘭の里の民宿運営者の幸福度の分布結果が示した。回答者の選択は主に 8 点から 10 点まで分布している。結果として、日本全体での調査では、5 点（どちらとも言えない）の回答が一番多く、次いで 7 点、8 点の役割が多い（幸福度に関する研究会報告，内閣府，2011）。佐々木らの調査について、農村住民の幸福度は 8 点の役割が最も多い。以上二つのデータと比べると、春蘭の里の民宿運営者は 9 点の役割が一番多い。幸福度の分布をみると、民宿運営者の幸福感が高いと言える。

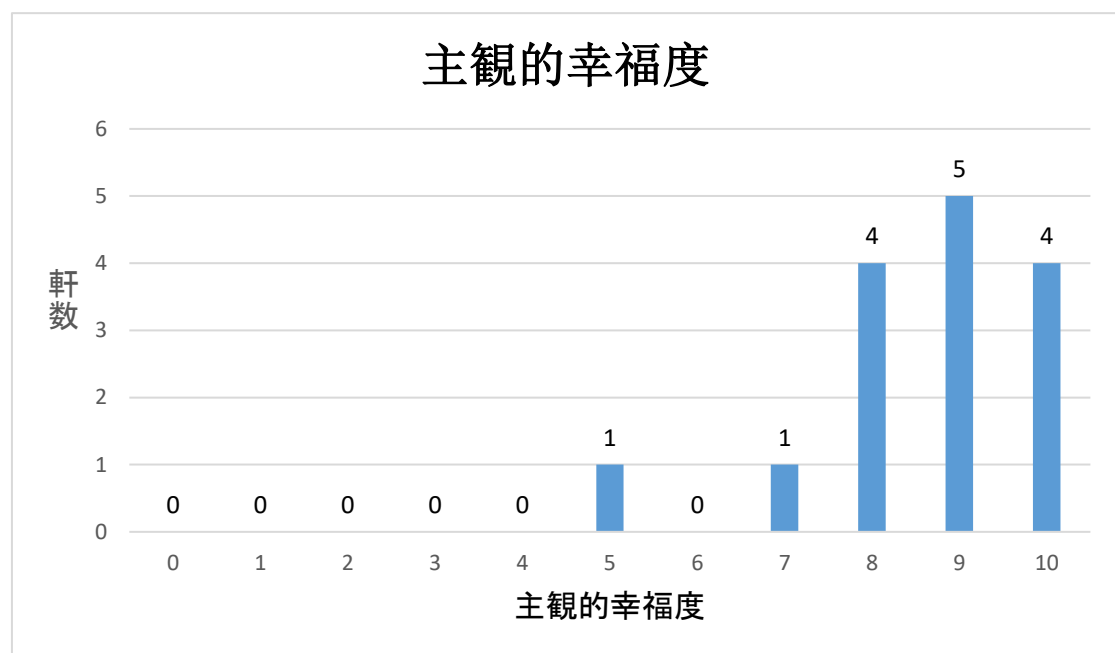


図 6-1 主観的幸福度の分布

6.1.2 個人属性

まずは、主観的幸福度に影響を与えている民宿運営者の個人属性について分析する。個人属性に関する年齢、性別、民宿の運営方式、運営期間、UI ターン、経営目的を調査し、主観的幸福度への影響を分析する。

表 6-1 回答者の個人属性

宿	年齢	性別	仕事	運営方式	運営期間	UI ターン	経営目的
1	80 代	女性	農業	個人	10 年	なし	地域活性化, 収入増加
2	80 代	男性	農業	家族	10 年	なし	町づくり, 収入増加
3	70 代	女性	農業	個人	15 年	なし	地域活性化, 収入増加, 町づくり
4	50 代	女性	自営業	個人	5 年	なし	収入増加
5	30 代	男性	自営業	家族	5 年	I	高齢化, 町づくり, 文化伝承
6	30 代	女性	民間企業	家族	5 年	I	地域活性化, 文化伝承
7	30 代	女性	家事手伝い	家族	10 年	U	地域活性化
8	70 代	男性	民間企業	家族	15 年	U	地域活性化, 収入増加,
9	70 代	男性	年金生活	家族	10 年	U	地域活性化, 環境保全
10	70 代	男性	農業	家族	5 年	U	地域活性化, 高齢化, 町づくり
11	70 代	男性	農郷	家族	10 年	なし	地域活性化, 町づくり
12	80 代	女性	自営業	個人	10 年	なし	高齢化
13	70 代	女性	年金生活	個人	10 年	なし	地域活性化, 町づくり
14	70 代	女性	年金生活	個人	2015 年	U	地域活性化, 高齢化, 町づくり
15	70 代	女性	農業	家族	10 年	なし	地域活性化, 高齢化

6.1.2.1 年齢と主観的幸福度

図 6-2 のように、この調査参加者は 30 代 3 人、50 代 1 人、70 代 8 人、80 代 3 人で組み立てる。また、各年齢層と全体の主観的幸福度平準値が示している。70 代の運営者の幸福度が最も高い、次は 80 代、50 代、30 代である。70 代と 80 代の幸福度は全体を上回っている。70 代まで、幸福度は年齢とともに向上する傾向がある。80 代の運営者の幸福度の低下原因はインタビューの分析で説明する。

佐々木らの調査によって、農村住民は 30 代から年齢とともに幸福が向上する傾向がある。本調査は 70 代まで同じの傾向が示しているが、80 代の幸福度が少し落ちた程度で、日本全体の調査で得られた、年齢とともに、幸福度が落ちる傾向とは違っている。

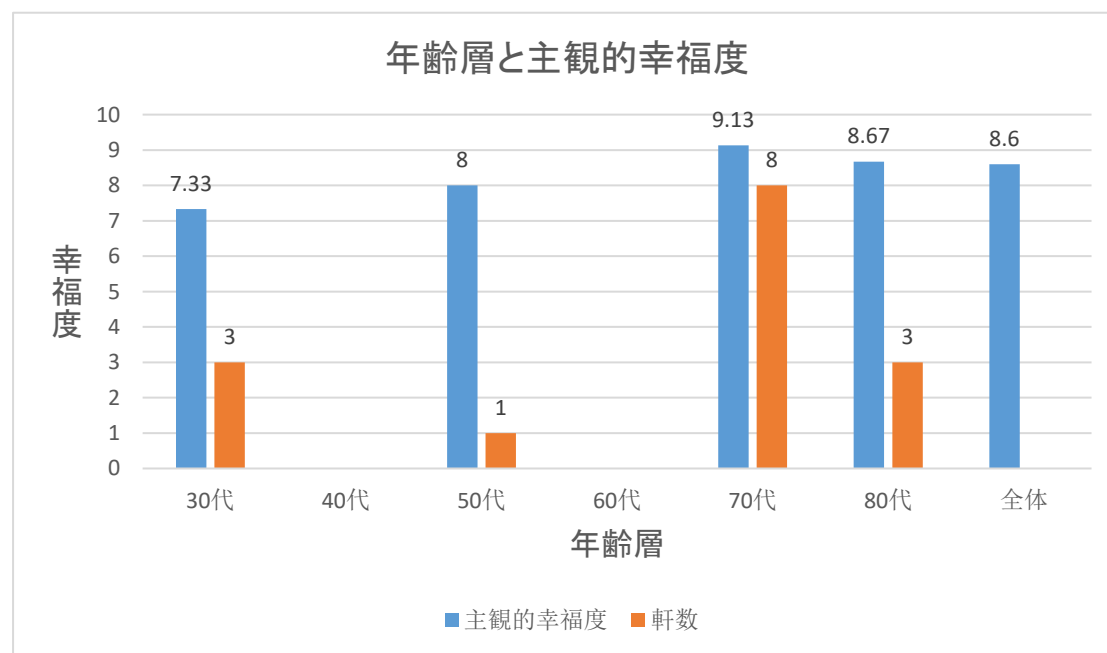


図 6-2 年齢と主観的幸福度

6.1.2.2 性別と主観的幸福度

図 6-3, 図 6-4 は性別の分布と主観的幸福度の関係を示している. 男性運営者の幸福度は 9.17 で, 標準偏差は 0.75 である. 女性運営者の幸福度の平準値は 8.22 で, 標準偏差は 1.56 である. すなわち, 男性の方は女性より幸せを感じている. また, 男性の幸福感の差別が低い.

佐々木らの調査結果を見ると, 農村住民における, 男性の幸福度の平準値は 5.82, 女性は 5.71 である. 全体として男性は 5.62, 女性は 6.03 である. 農村住民について, 男性の方は幸福感が高いが, 有意差は存在しないと判断した. 男性の幸福度が高いという現象は同様である.

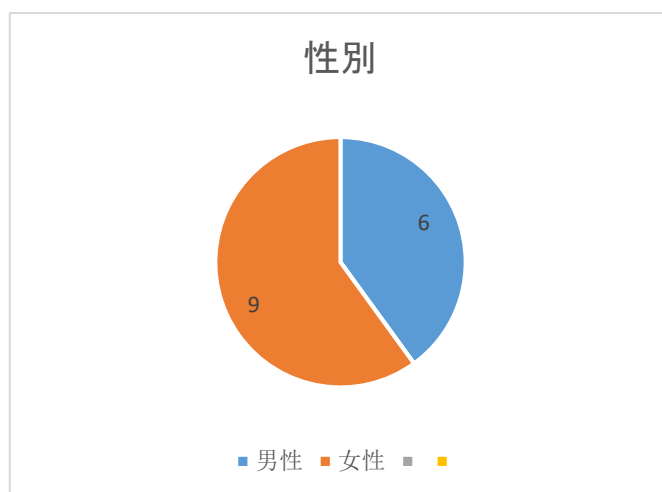


図 6-3 性別分布

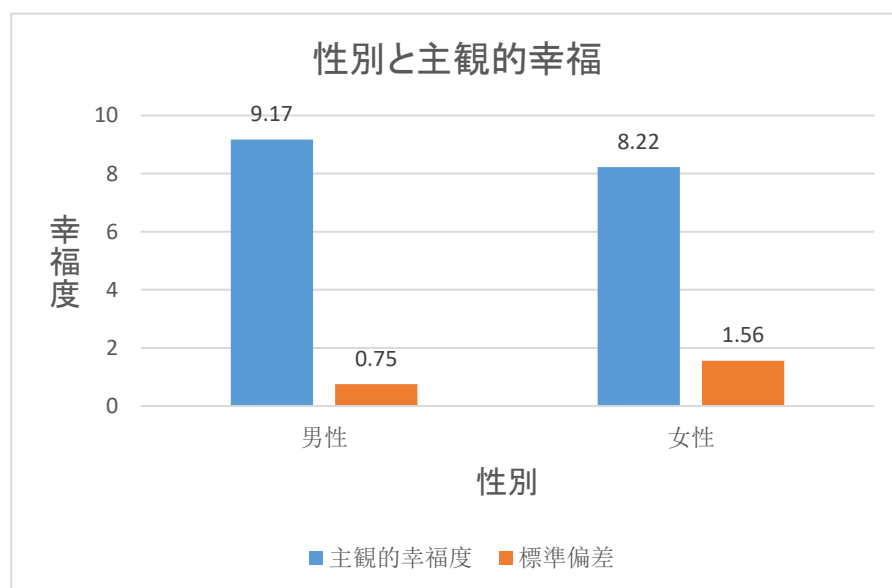


図 6-4 性別と主観的幸福度

6.1.2.3 運営方式と主観的幸福度

運営方式の質問は幸福度に関連するかを考察するために設定した。前で論じた春蘭の里の民宿運営者は能登地域で分布している。少子高齢化問題が非常に深化している地域として、若者が地域から引っ越し状況が普遍になる。若者が高齢者を援助して民宿を運営する事例はただ一つだけである。

図 6-5 を見ると、個人的運営している民宿は 6 軒、家族主に夫婦の方式で運営している民宿は 9 軒である。図 6-6 は運営方式と主観的幸福度の違いを示している。家族運営の民宿運営者の幸福度は 8.78、個人運営の民宿運営者の幸福度は 8.33 である。家族運営している民宿は個人運営する民宿より幸福度が高い。民宿を拡大する時に、家族共同運営できる住民は幸せを感じしやすいと考えられる。

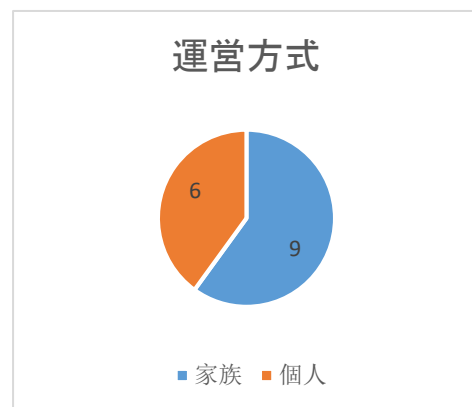


図 6-5 運営方式の分布

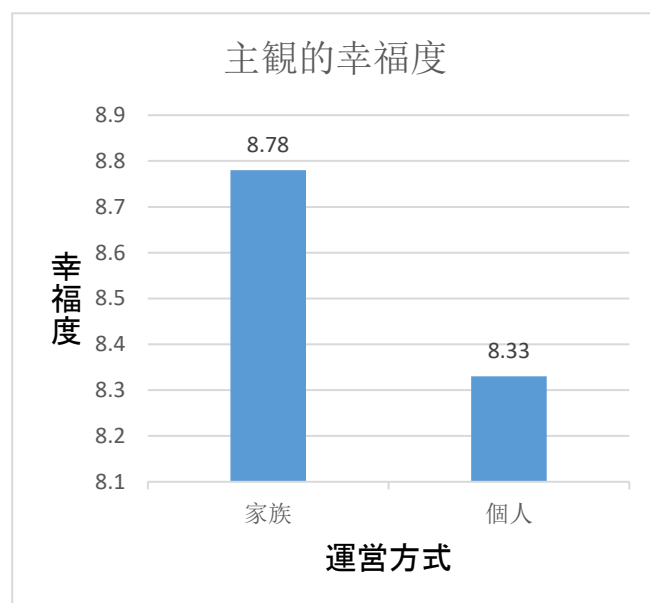


図 6-6 運営方式と主観的幸福度

6.1.2.4 都市生活経験と主観的幸福度

佐々木らはUターン、Iターン、Iターンの経験の有無と幸福度の関連性について、Iターン経験者の幸福度は6.27となり、他の平準値より多い。サンプル数が限られているので、有意差が確認できないという結論が導き出した。

春蘭の里の状況と組み合わせて設問した。調査範囲はUターン、Iターン、移動なしを含めている。図6-7のように、Uターン経験者の幸福度は8.4、Iターン経験者の幸福度は8.5、移動なし方の幸福度は8.75である。移動なし方の幸福度は少し高いが、三種類の民宿運営者の幸福度は大きな違いがない。Uターン経験者とIターン経験者の高幸福度によって、都市生活経験が持っている方は地域へ戻り、民宿サービスを開始してから感じている幸福度は経験なしの運営者と大きな違いがない。したがって、春蘭の里における、UIターンは幸福度に大きな影響を与えていない。

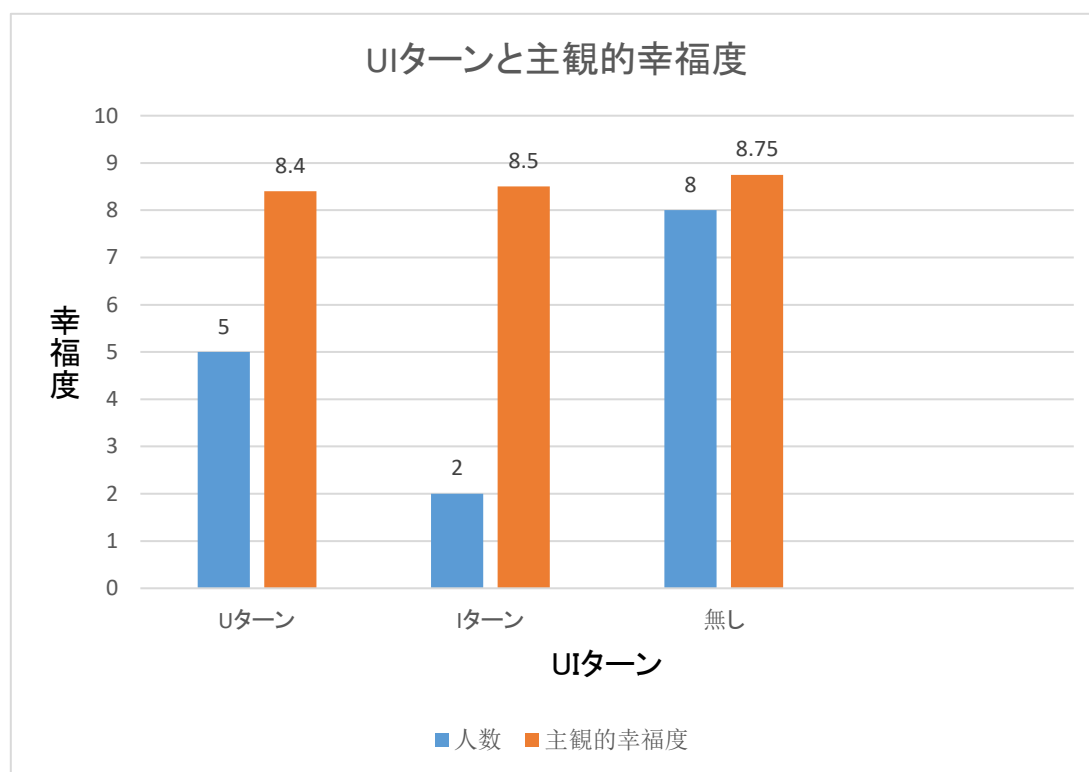


図 6-7 都市生活経験と主観的幸福度

6.1.2.5 経営目的

春蘭の里の組織では、実行委員会は観光客予約・サービス提案・指導の仕事を担当し、民宿と直接的な管理関係がない。民宿運営者がどの経営目的を持ってサービスを提供するのは、観光客との関係構築に大きな影響を与えていると考えられる。この状況について、経営目的に関する質問を提案した。6つの選択肢の中で、最大3つのオプションを選択できると設定した。

図 6-8 が示した通りに、地域活性化を選ぶ人 11 人 (73.3%)、次は町づくりが 8 人選んだ (53.3%)、その後は住民収入増加 6 人 (40%)、少子高齢化改善・文化伝承・環境保全を選んだ人が少ない。地域活性化と町づくりは個人より地域的な立場である。すなわち、半数以上の回答者は地域を援助する目的を持ち、民宿事業に参加してきた。住民収入増加を経営目的として事業を運営する回答者はただ 40%であり、年金の補足として民宿サービスを提供している。多くの民宿運営者は損得を考えずに事業を行っている。

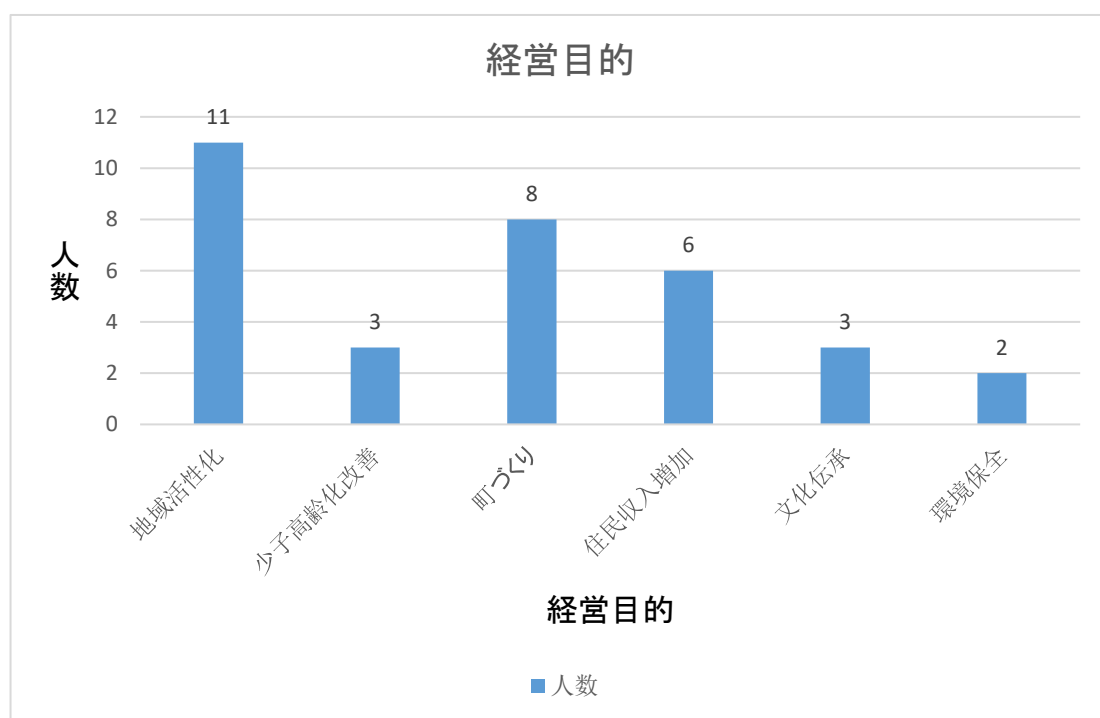


図 6-8 経営目的認識

6.1.2.6 運営期間と主観的幸福度

図 6-9 のように、2015 年開始した民宿運営者 1 人、運営経験 5 年ほどは 4 人、運営経験 10 年ほどは 8 人、運営経験 15 年ほどは 2 人である。

図 6-10 に示した通りに、運営 15 年ぐらい回答者の幸福度が一番高い、また標準偏差が最も低い。15 年ほどの運営者は大体春蘭の里事業開始ばかり時に、最初の事業協力者である。地域を改善する目的で春蘭の里の事業に参加してきたので、自発的な地域協力意識が高いと考えられる。15 年ほど以外の回答者の幸福度の平準値は 8 と 9 の間である。運営期間と主観的幸福度の間の相関は明確には認められない。

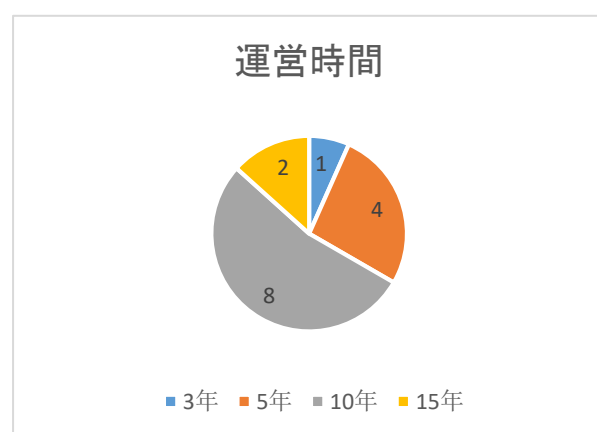


図 6-9 運営期間の分布

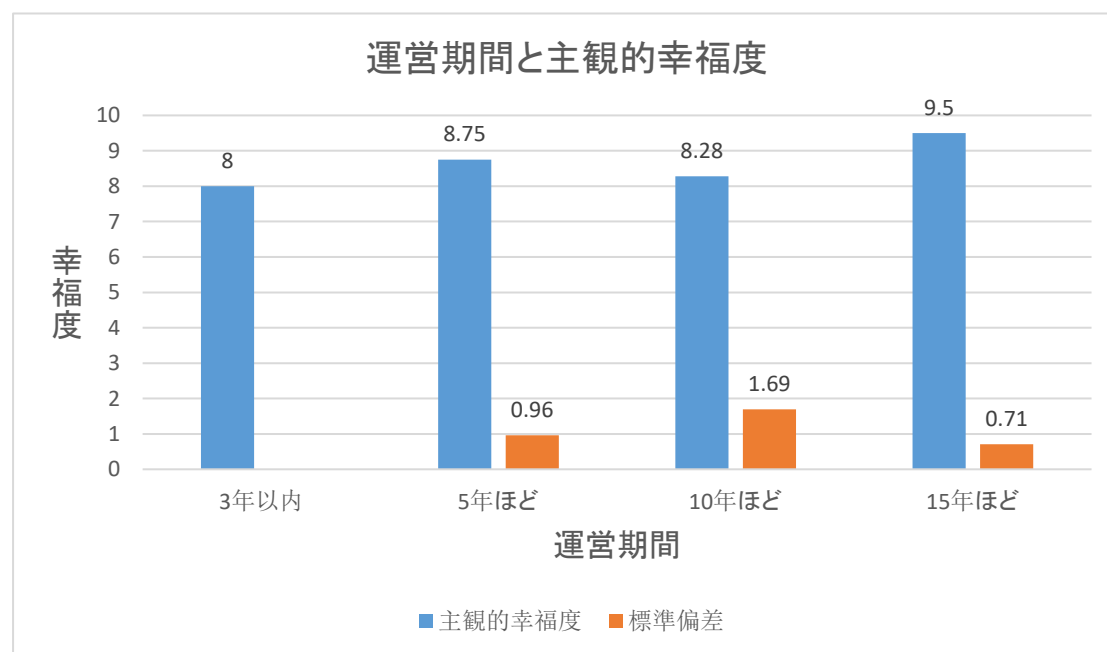


図 6-10 運営期間と主観的幸福度

6.1.3 農村農業多面的機能の保全意向

次は、農村農業多面的機能保全の重要性の認識に関する調査である。以下の8つの要素について、「非常に重要」から「全く重要ではない」まで4段階の選択肢で、アンケートが実施した。「非常に重要」の3点、「全く重要ではない」を0点とし、民宿運営者が各要素の重要性認識を測定した。

- (1) 貿易に過度に依存せず、国内の農業生産による安定的食料の供給によって得られる安全感。
- (2) 水田や畑が大雨時の河川の氾濫を抑え、洪水を防ぎ、地滑りを防ぐ働き。
- (3) 農地が地下水を涵養し、河川の水量を安定化させる働き。
- (4) 農村で栽培される作物が光や熱を吸収し、気温を下げる働き。
- (5) 農村の自然が育む豊かな生態系やふるさとの景観。
- (6) 都市生活の疲れを癒し、心と身体をリフレッシュさせる保養機能。
- (7) 子供たちが人と自然の豊かな関わりを学ぶ体験学習の場。
- (8) 農業の営みの中育まれた祭りや芸能などの歴史と文化。

表 6-2 農村農業ため面的機能の保全意向データ

宿	食料安全保障	国土保全	水源涵養	気候安定化	景観	保養機能	教育	文化
1	3	3	3	3	3	3	3	3
2	3	3	3	3	2	3	3	3
3	3	3	3	3	3	3	3	2
4	3	3	2	3	3	3	2	2
5	2	3	2	3	1	2	3	3
6	3	3	3	3	3	3	3	3
7	2	2	1	1	2	2	2	2
8	3	3	2	3	3	3	3	3
9	3	3	2	3	3	3	3	3
10	3	3	3	3	3	3	3	2
11	3	3	3	3	3	3	3	3
12	3	3	3	3	3	3	3	3
13	1	1	2	3	3	3	3	1
14	3	3	3	3	3	3	3	3
15	2	3	3	3	3	3	3	3

図 6-11 は農村農業ため面的機能の保全意向に対して民宿運営者の重要性認識と標準偏差を示している。全体的に見ると、8つ要素の平準値は全部 2.5 以上であり、最低な水源涵養 2.53 である。回答者は農村農業の気候安定機能、心身保養機能、子供への教育機能が一番重視している。そして、心身保養機能、子供への教育機能の標準偏差が最も低い、回答者の観点の一致性が高い。次いで重視している要素は国土保全機能、景観保全の機能、食料安全保障機能、文化伝承機能、水源涵養機能である。国道保全機能を重視している原因は、以前に地域で洪水の災害が発生した。洪水の印象が深いと考得られる。

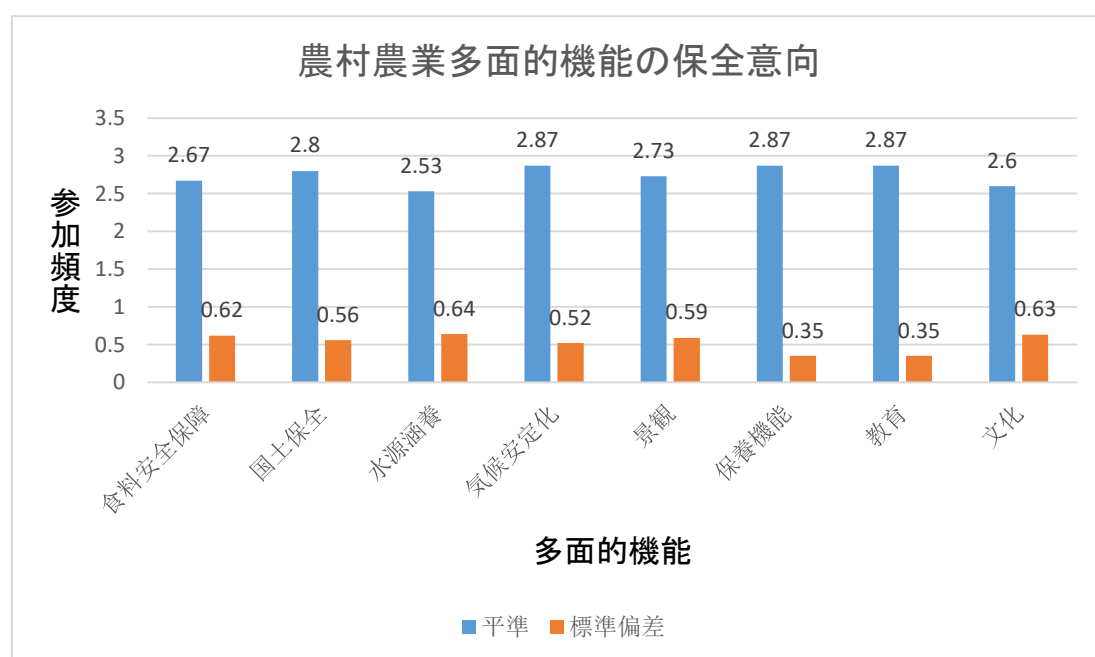


図 6-11 農村農業ため面的機能の保全意向

佐々木らの調査結果を見ると、8つの多面的機能の全体について、重要性の認識の増加とともに、回答者の幸福度が増えているという関係が証明した。この傾向は都市住民と農村住民の共通点である。

春蘭の里に関する民宿の調査について、高いレベルの保全意向，すなわち2点3点を選んだ回答者は、保全意向の向上とともに、回答者の幸福度が増えている傾向が顕著である。2点前の回答者について、重要性の認識と幸福度の相関関係が顕著ではないと考えられる。

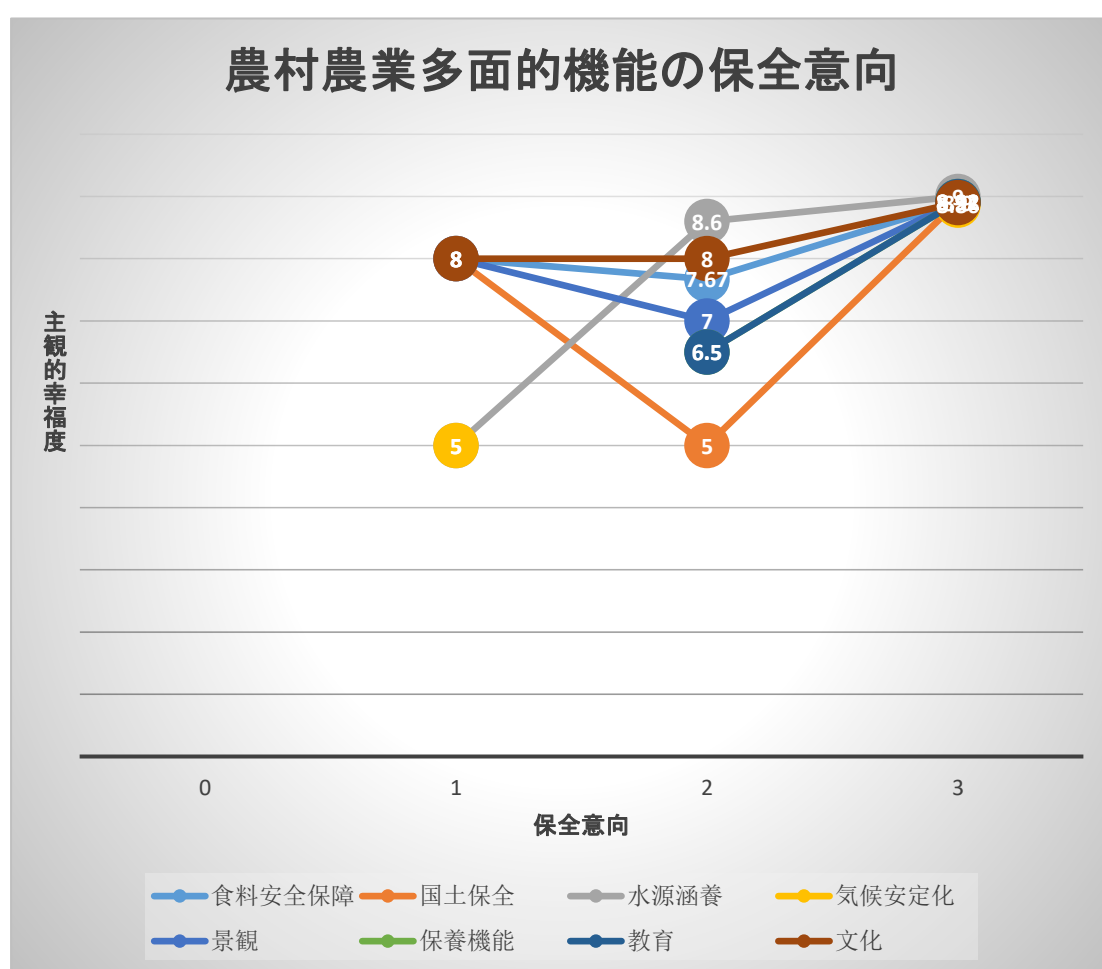


図 6-12 農村農業ため面的機能の保全意向と主観的幸福度

6.1.4 保全活動参加頻度

次は、民宿運営者が生活している地域で自身が直接的な参加する保全活動の頻度と標準偏差に関する調査である。地域の保全活動に関する質問は以下の7つの要素について、「頻繁に行う」を3点から「全くない」を0点で、アンケート調査が実施した。

- (1) 農作業の手伝い.
- (2) 下草刈りなどの森林の管理の手伝い.
- (3) 集落内の道路や水路の清掃，修繕の手伝い.
- (4) 地域の伝統芸能や祭りの手伝い.
- (5) 環境保全活動.
- (6) 災害支援や雪下ろしなどのボランティア活動.
- (7) 高齢者の買い物代行などの生活支援や福祉サービスの手伝い.

表 6-3 保全活動参加頻度データ

宿	農作業	森林管理	道路・水路管理	伝統芸能・祭り	環境保全	ボランティア	福祉
1	0	2	2	2	2	1	1
2	0	2	2	2	1	1	1
3	0	0	2	0	0	0	0
4	0	0	2	2	0	0	0
5	2	3	1	2	2	1	2
6	3	3	3	3	3	3	3
7	0	0	0	0	0	2	0
8	2	1	2	3	3	1	3
9	2	3	3	3	3	3	3
10	3	3	3	3	3	3	3
11	3	3	3	3	3	3	3
12	0	0	2	0	0	0	0
13	2	0	3	0	0	0	1
14	3	3	3	3	3	3	3
15	3	2	2	3	3	2	1

結果からみると、この7つの活動の中に、道路・水路管理に参加する頻度が一番多い、また標準偏差が最も低い。なぜならば、地域は定期的に道路・水路の掃除修繕活動を開催し、回答者は積極的に参加している。次いで、伝統芸能・祭りの参加頻度は二位、1.93である。しかし、標準偏差は1.28であり、回答者の観点がばらばらになった。少子高齢化の深化とともに、祭りの参加者が減少している。また、将来に多くの回答者がこの状況を改善することについて、悲観的な態度が示した。以外の5つ要素は大体同じの結果が見せている。標準値は1.6ぐらい、標準偏差は1.3ぐらいである。回答者の高齢者たちは年齢、健康など問題を直面している。回答者の若い世代は積極的な態度を示した。

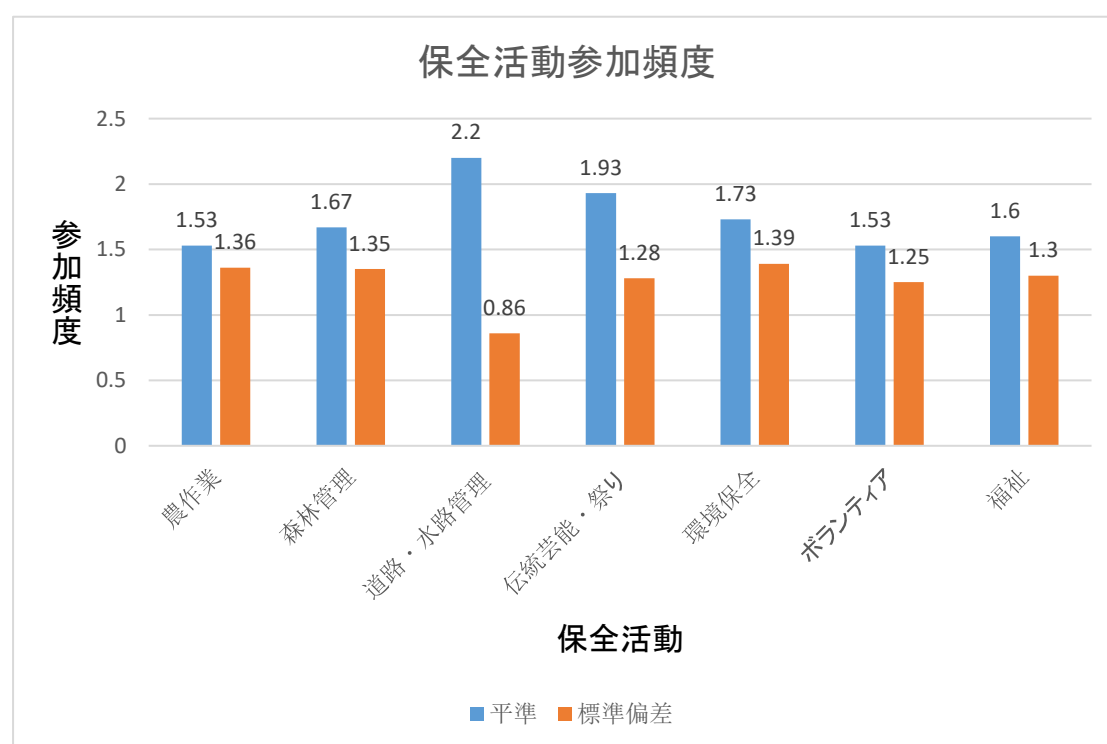


図 6-13 保全活動参加頻度

佐々木らの研究は、農村住民について、活動頻度と主観的幸福度が正の相関関係という結果が導き出したている。民宿運営者について調査結果を見ると、農作業、道路・水路管理、伝統芸能・祭りは参加頻度と幸福度が正の相関関係である。他の活動について、たまに活動する、すなわち0点と1点の場合、参加頻度と幸福感の相関が見られないが、頻繁に活動している回答者、すなわち2点と3点を選んだ人の参加頻度と幸福感が正の相関関係を考えられる。

回答者は身体健康の原因で、参加頻度が低いとか参加できないとか状況があったが、できるだけ参加するという積極的な意向は伝達している。

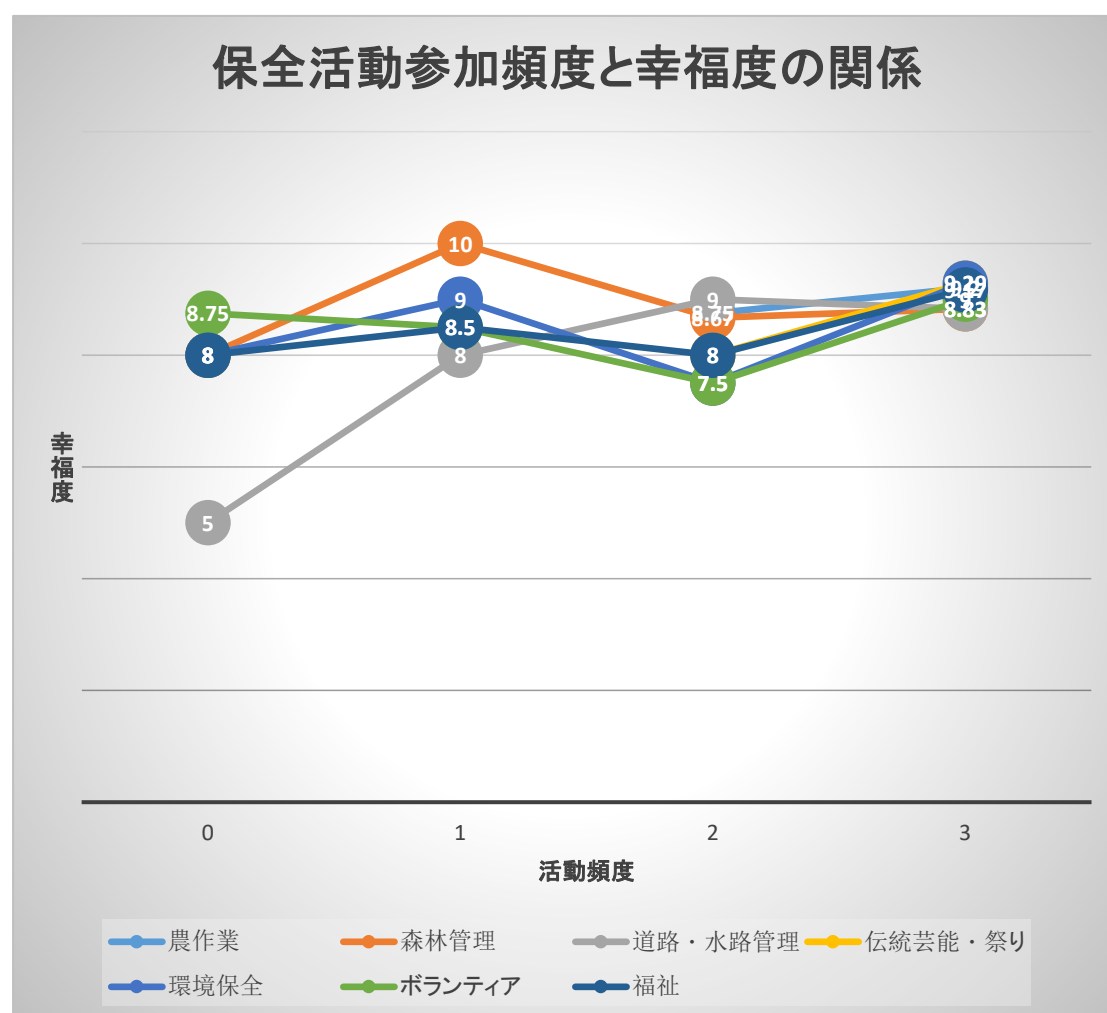


図 6-14 保全活動参加頻度と主観的幸福度

6.1.5 促進活動参加頻度

農村生活にかかっている活動について、直接的な参加する保全活動が分析した。次いで、間接的に地域と関連し、地域の食やの農業を支える促進活動について、民宿運営者の地域促進活動の参加頻度と標準偏差を分析する。下で、促進活動を6つ要素で、「頻繁的に行う」を4点から「全くない」を0点について、民宿運営者の参加頻度を測定する。

- (1) 農地や農畜産物のオーナー制度への参加(棚田オーダー等)。
- (2) 小口の投資(故郷納税など)。
- (3) 地域採れた農林水産品の積極的な消費。
- (4) 有機など環境保存型農産物の購買。
- (5) 日帰りのグリーンツーリズム(例えば、農産物直売場での地元農産物の購入、ブドウ狩りなどの観光農園の利用)。
- (6) 宿泊・滞在型のグリーンツーリズム(例えば、農家民宿、子供の体験学習)

表 6-4 促進活動参加頻度データ

宿	オーナー制度	小口投資	地産地消	環境保全型農産物	グリツリ日帰り	グリツリ宿泊
1	0	0	3	3	3	2
2	0	2	3	3	3	2
3	2	0	3	3	3	3
4	0	0	3	3	3	3
5	0	3	3	2	2	2
6	3	0	3	3	3	3
7	0	2	0	0	2	3
8	0	3	3	3	3	3
9	0	0	2	3	3	3
10	3	0	3	3	3	3
11	0	0	1	0	0	3
12	0	0	2	2	0	0
13	0	3	0	0	0	3
14	3	3	3	3	3	3
15	3	3	3	2	3	3

図 6-15 が見せた通りに、グリーンツーリズム宿泊の参加頻度が一番高い、2.6 である。地域として、民宿運営者は修学旅行と子供体験学習が最も歓迎するとフィードバックした。だから、標準偏差は 0.83 であり、観点の一致性が一番高い。他の参加頻度が高い促進活動は地産地消、グリーンツーリズム日帰り、環境保全型農産物の購買である。過疎地が深化しているにしたがって、ショッピングが困難になった。地域の地産地消と直売所売買活動が普遍になっている。

一方で、オーナー制度・小口投資など投資活動が少ない。小口投資は主に地域納税の活動である。また、両方の標準偏差は高い、参加頻度が 3 点と 0 点をよく選んで、分散が極端だ。このような投資情報の伝達が難しく、活用も困難になった。

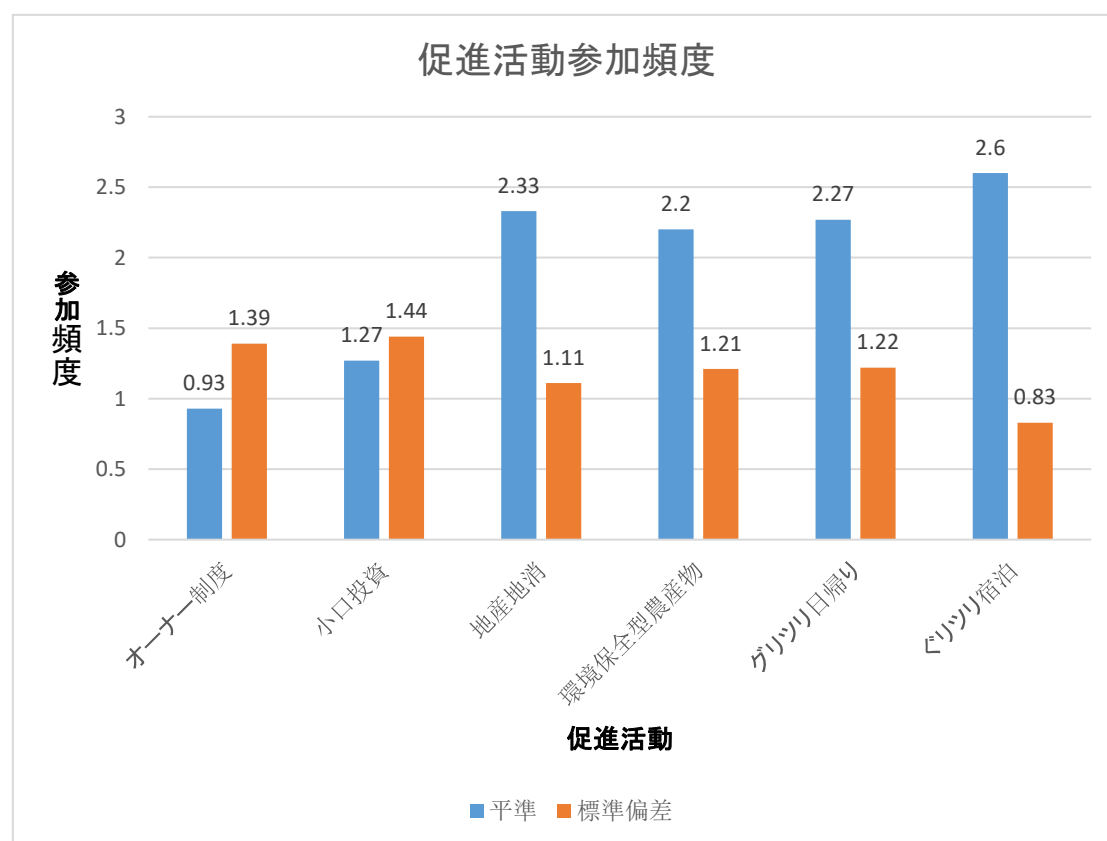


図 6-15 促進活動参加頻度

佐々木らの研究では，農村住民について，促進活動の参加頻度と幸福度がおおむねに正の相関が論じている．民宿運営者の調査は促進活動の頻度が高くない場合には，相関の関係が見られない．一方で，参加頻度が上がると，知産地所と環境保全型農産物以外の活動は正の相関関係が顕著になっている．

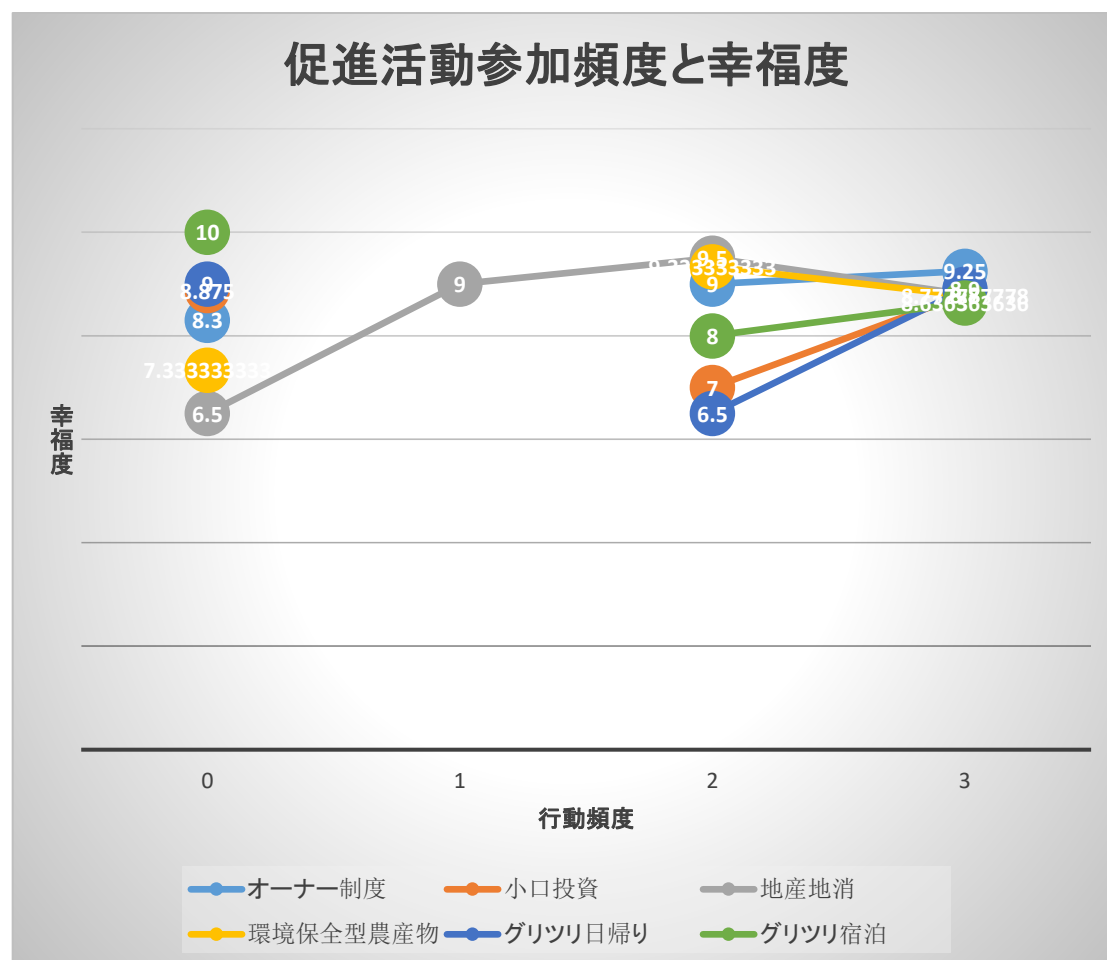


図 6-16 促進活動参加頻度と主観的幸福度

6.1.6 10年後の主観的幸福度

図 6-17 のように 10 年後に民宿運営者の幸福度見込みが見せている。5 点どころとも言えない以下を選んだ人が増えて 2 人になった。10 点を選ぶ人が一番多い、7 人である。次は 8 点 6 人である。

全体では、10 年後の幸福度平準値は現在より少し落ちた、将来にマイナスの傾向が示している。具体的な各年齢層を見ると、50 代の回答者の将来の幸福度見込みが向上し、一番高くなった。30 代の回答者の幸福度見込みが変わっていない。70 代の回答者の幸福度見込みも少し落ちた。80 代の回答者は将来の幸福度に対して、大幅的に低落した。主に、身体健康の問題について悩んでいるためと考えられる。

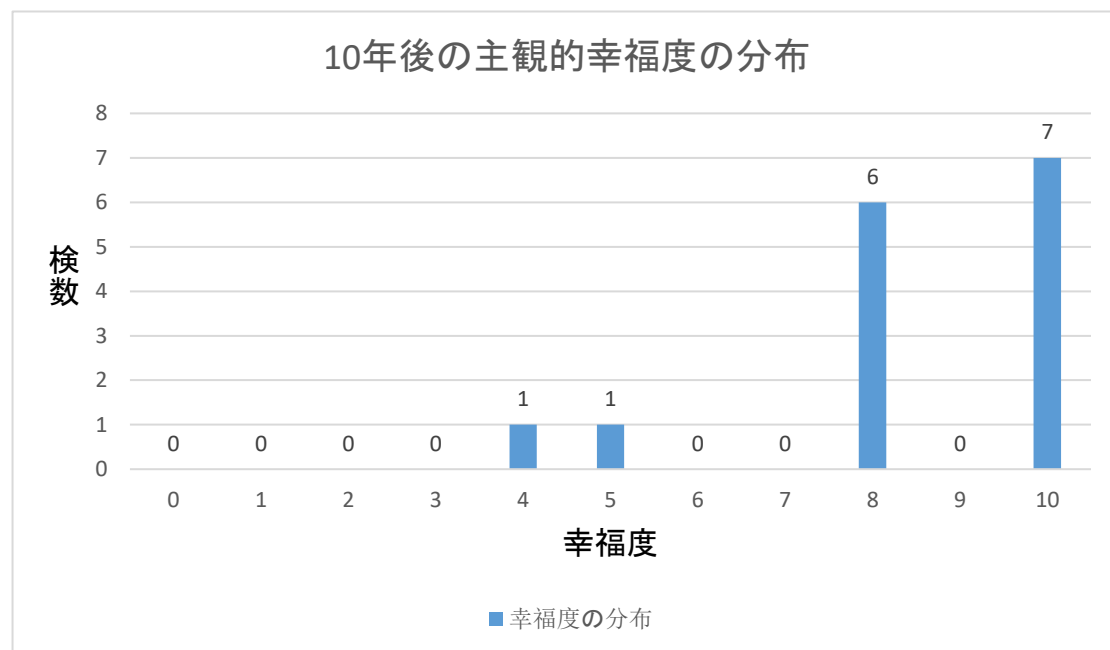


図 6-17 10 年後の主観的幸福度の分布

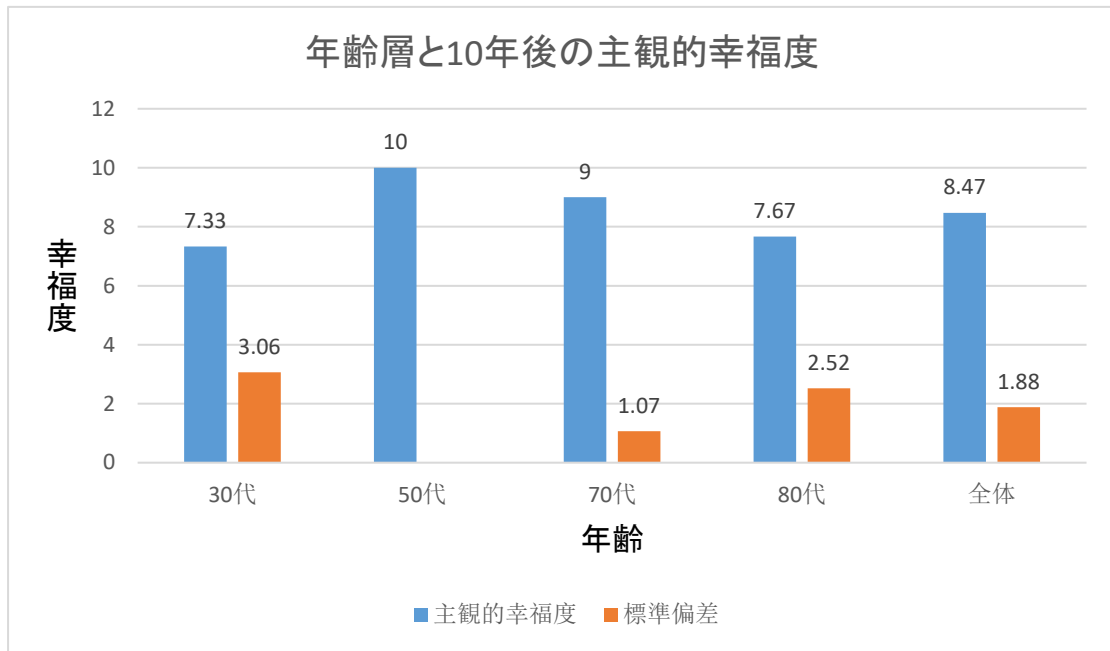


図 6-18 年齢層と 10 年後の主観的幸福度

図 6-19 と図 6-20 から見ると，10 年後主観的幸福度見込みについて，人数の変動傾向が分かる．幸福度変動なし回答者は7人，マイナスの回答者は5人，プラスの回答者は3人である．マイナスの方が少し多く，マイナスの傾向が鮮明だ．30代と70代の回答者の中で，マイナスとプラスを選んだ方が両方いる．80代の回答者は更に悲観的な傾向を持っている．

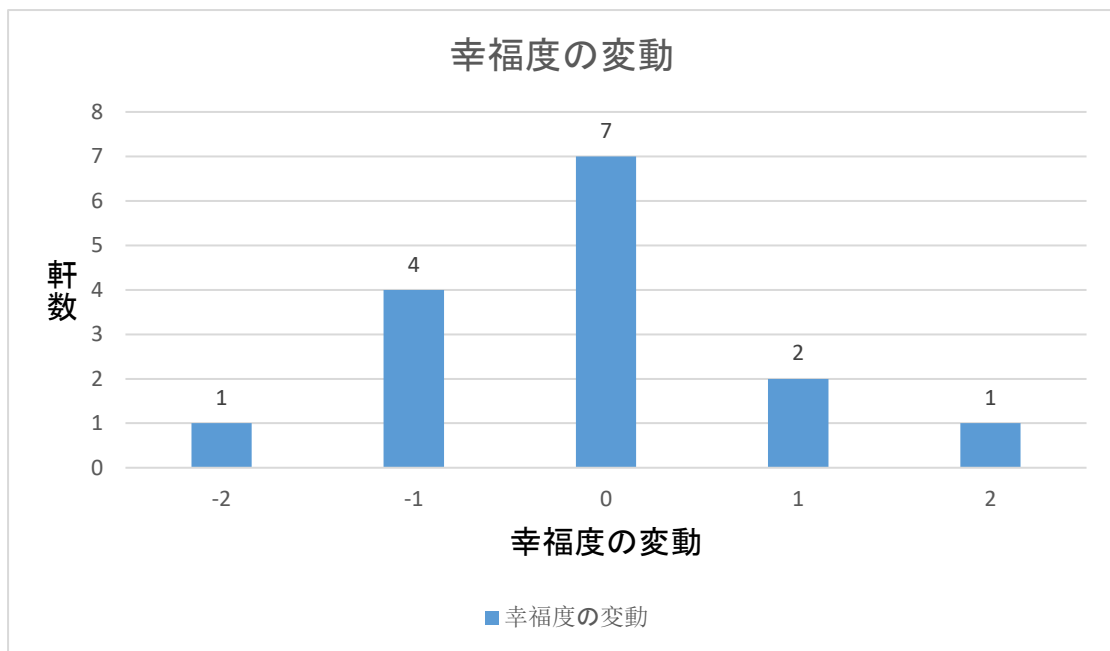


図 6-19 10 年後の主観的幸福度の人数変動

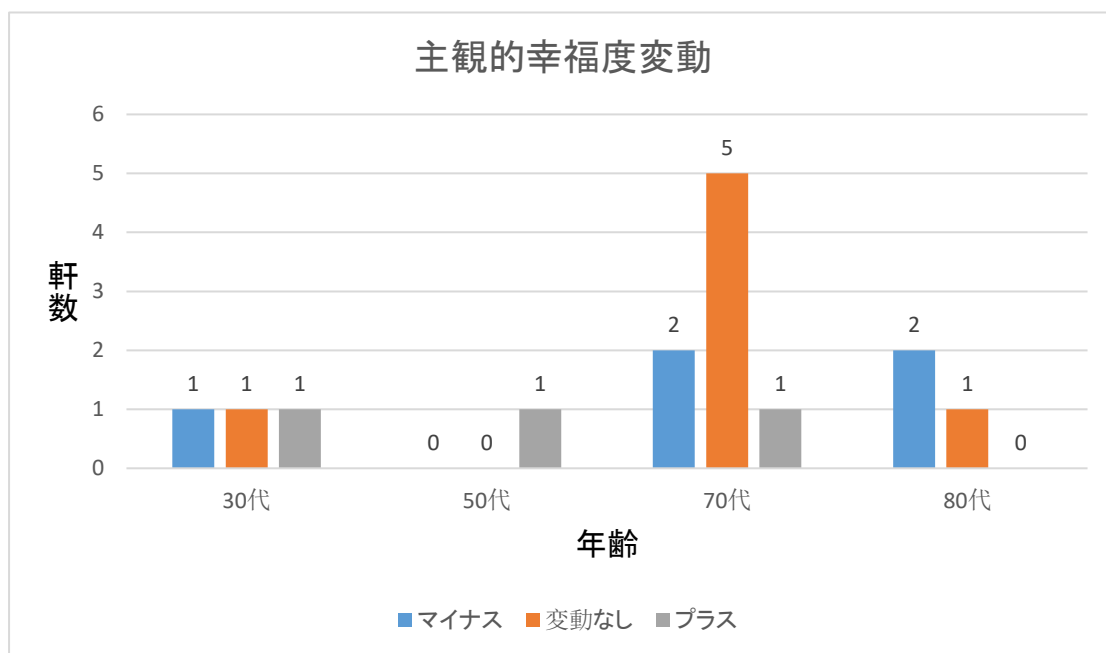


図 6-20 年齢層と人数変動

6.1.7 将来展望

次いで、将来展望に関する7つ要素の調査である。将来展望の7つ要素について、選択肢「大幅に向上」を3点から、「大幅に悪化」を0点として、回答者の将来の変化の期待を測定する。

- (1) 食料自給率(国産農産物の安定的な供給)。
- (2) 食の安全・安心。
- (3) 農作放棄地。
- (4) 農村の過疎化。
- (5) 都市と農村の交流。
- (6) 農村における再生可能エネルギー生産・利用。
- (7) 国産農産物の輸出。

表 6-5 将来展望データ

宿	将来幸福度	食料自給率	食の安全・安心	耕作放棄地	過疎化	都市農村交流	再エネ	輸出
1	5	1	1	3	3	1	2	1
2	8	1	2	1	1	2	2	2
3	8	1	1	3	3	1	3	1
4	10	1	2	1	1	1	2	2
5	8	2	1	1	0	1	1	1
6	10	3	1	0	1	2	2	2
7	4	2	1	1	1	2	1	1
8	10	1	1	1	1	1	1	2
9	10	1	2	0	0	2	2	2
10	10	1	2	2	1	1	2	1
11	8	1	2	1	1	2	1	2
12	10	1	1	1	1	2	1	2
13	8	2	1	1	1	2	3	2
14	8	2	2	1	1	2	2	3
15	10	1	2	0	0	2	2	2

これらの将来展望について、民宿運営者が悲観していること、楽観していることが分かった。地域過疎化と農作放棄地に対して、将来の期待が最も低い、1.07 と 1.13 である。これらは地域全体が重視している点であり、将来的に改善することを悲観的な態度が持っている。食料自給率と食の安全・安心について、平準値 1.4 と 1.47 は 1.5 点（どちらとも言えない）より少し低く、悲観的な態度が示している。平準値 1.5 以上の要素は 3 つある、都市と農村の交流、再生エネルギーの活用、農産物の輸出である。再生エネルギー活用の期待が一番楽観している。地域における、活用する経験者がいるが、全体として生活費用を下がる目的が持っている。農産物輸出について、地域生産する農産物は誇るものとして信じしている。安全安心性と美味しさが自信満々だが、農業従業員減少、農作放棄地増加、過疎化など原因で、1.73 だけ期待している。

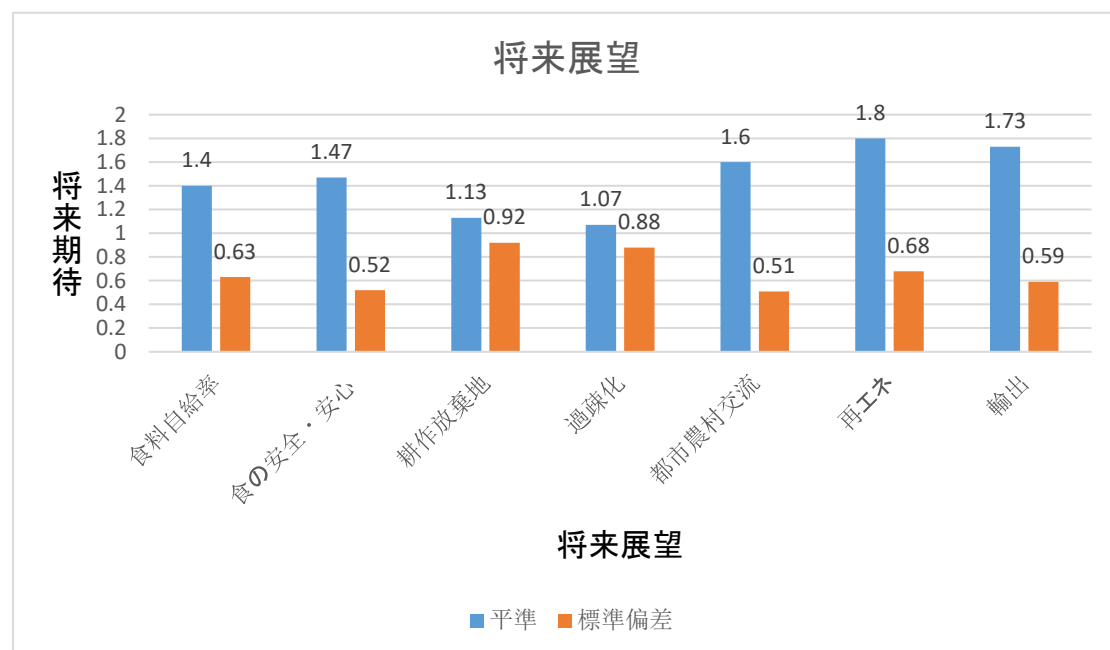


図 6-21 将来展望

将来展望と幸福度について、佐々木らの結果と見ると、農村住民でも将来展望は幸福度と概ねに正の相関が図示している。農村住民の方はさらに顕著である。食料・農業・農村問題への展望が明るい人は幸福度が高い。

図 6-22 のように、農村の過疎化と都市農村交流は負の相関関係と考えられる。他の要素は幸福度との関係が顕著ではないと考えられる。食料・農業・農村問題への展望と幸福度の関係が全く違っている。

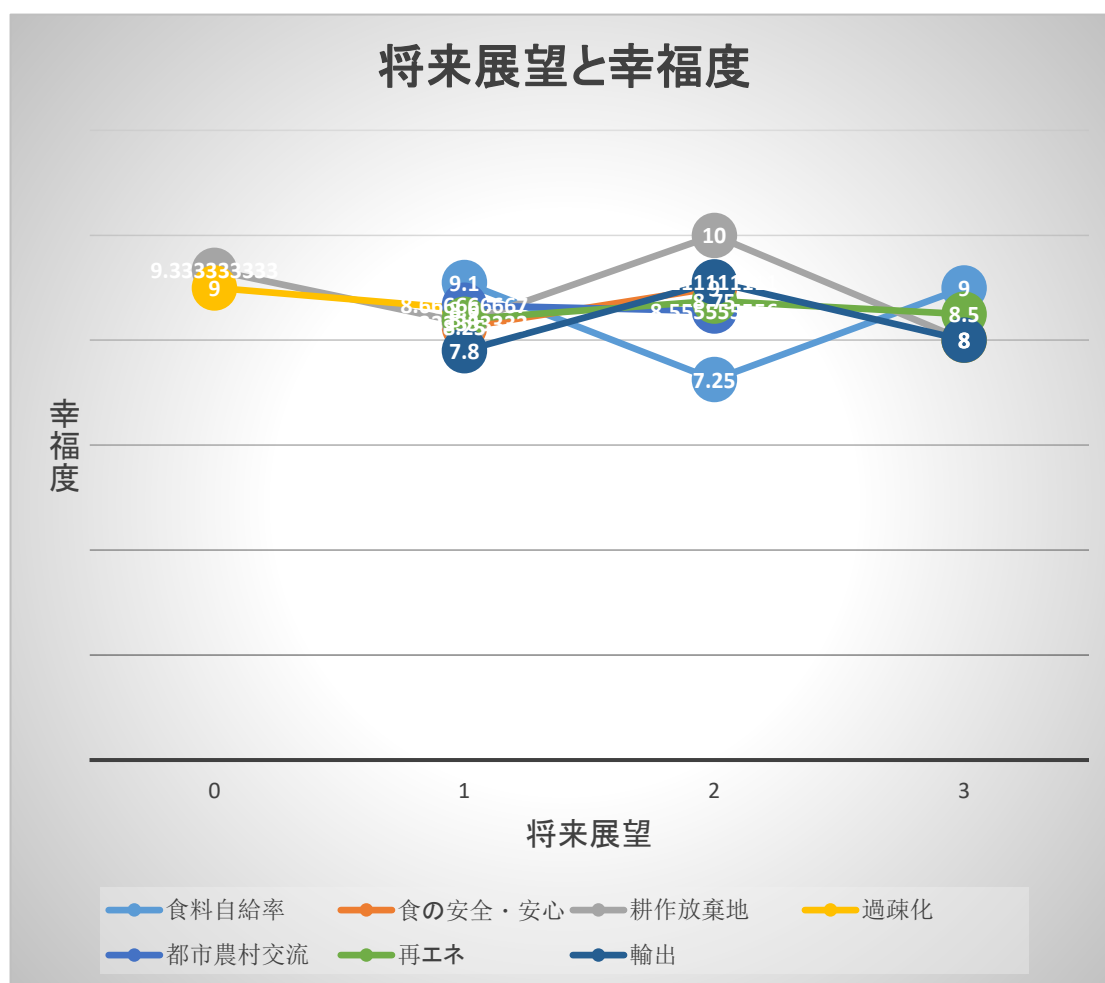


図 6-22 将来展望と幸福度

6.1.8 ソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタルの意識については、地域活動参加、お互いに助け合う活動など要素は地域保全活動と促進活動調査の部分で行ったので、ここでは近所付き合い程度、居留意識、観光客との信頼関係について調査を実施した。

近所付き合い程度は「頻繁に行う」の3点から、「全くない」の0点まで、4つの選択肢を備えた。地域住みたいは「ずっと住みたい」を3点から、「全く住みたくない」を0点で調査した。観光客との信頼関係は「ほとんどの人信頼している」を3点から、「誰もいない信頼している」を0点まで調査した。

表 6-6 ソーシャル・キャピタルに関するデータ

宿	付き合い程度	居留意識	信頼性
1	3	3	1
2	2	3	3
3	3	3	1
4	2	1	3
5	3	3	3
6	3	3	3
7	2	1	2
8	3	3	3
9	3	3	3
10	3	3	2
11	2	3	2
12	2	2	1
13	3	3	3
14	2	3	3
15	3	3	2

6.1.8.1 近所付き合い程度と主観的幸福度

図 6-23 が示している通りに、回答者全員は 2 点以上選んだ。この結果はインタビューの結果と一緒である。地域の住民は主に高齢者で構成されている。できるだけお互いに交流し、皆の身体健康状態を把握する。話題がないでも、挨拶ぐらいの相談も行っている。付き合い程度の増加とともに、幸福感も増えている。また、「頻繁に行う」を選んだ回答者は一致性が更に高い。近所付き合いについて、佐々木らの結果が一致している。

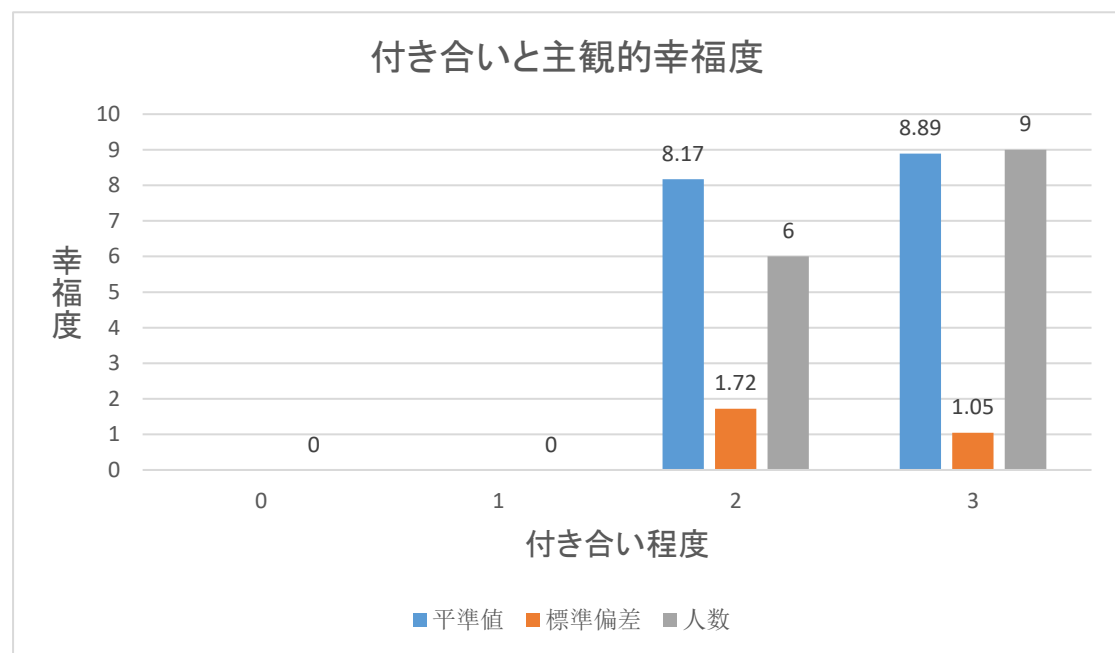


図 6-23 近所付き合い程度と主観的幸福度

6.1.8.2 居注意識と主観的幸福度

次いで、居注意識と主観的幸福度の関係を分析する。回答者の中に、12 人が 3 点を選んだ（80%）。2 点を選んだ人 1 人、2 点を選んだ人 2 人である。ずっと住みたい民宿運営者の選択理由は主に 2 つがある。第一は、故郷の熱情、地域の生活を喜んでいる。この考えを持っている人が多数を占めている。もう一つ理由は、都市に引っ越しする能力がない。地域の不動産は都市と比べ、大きな差がある。地域過疎化と少子高齢化の原因で、長期的な歴史が持ち、文化価値が高い部屋でも、低い値段で売買されている。また、人がない原因で倒れた部屋も少なくない。現状として、地域開発が非常に緊急になったと考えられる。

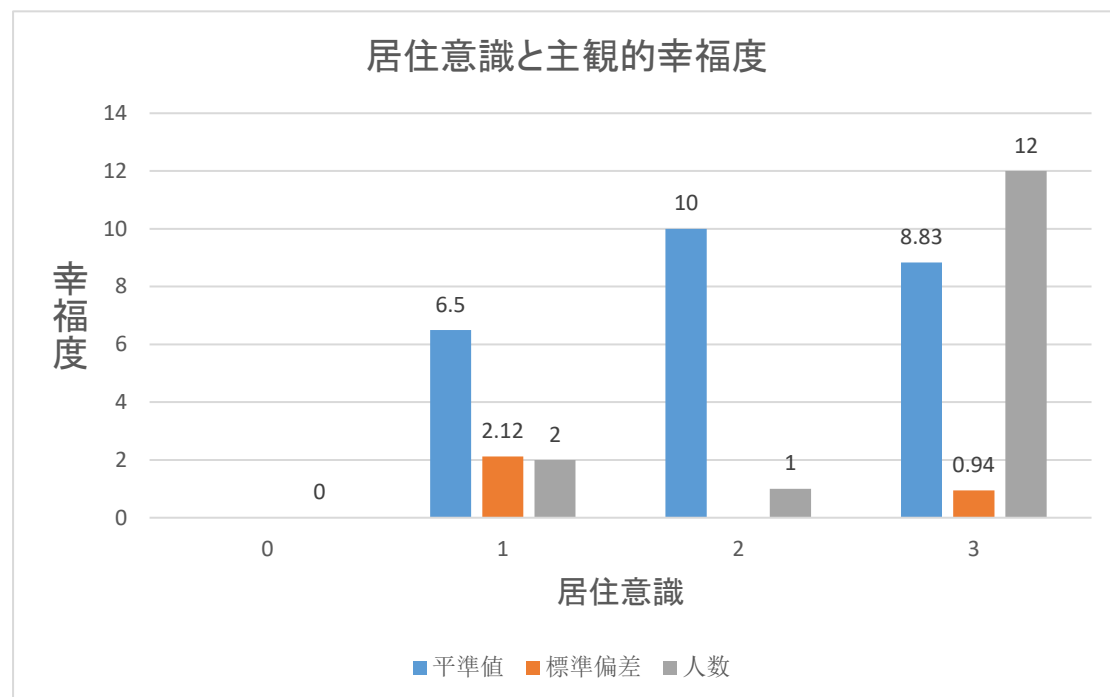


図 6-24 居注意識と主観的幸福度

6.1.8.3 観光客信頼性と主観的幸福度

最後は観光客信頼性と主観的幸福度の分析である。こちらの観光客は日本国内の観光客と海外の観光客が含まれている。図 6-25 のように、信頼性によって、回答者の幸福度はあまり変わっていないと見せている。しかし、3 点と選んだ回答者の一致性が一番高い。

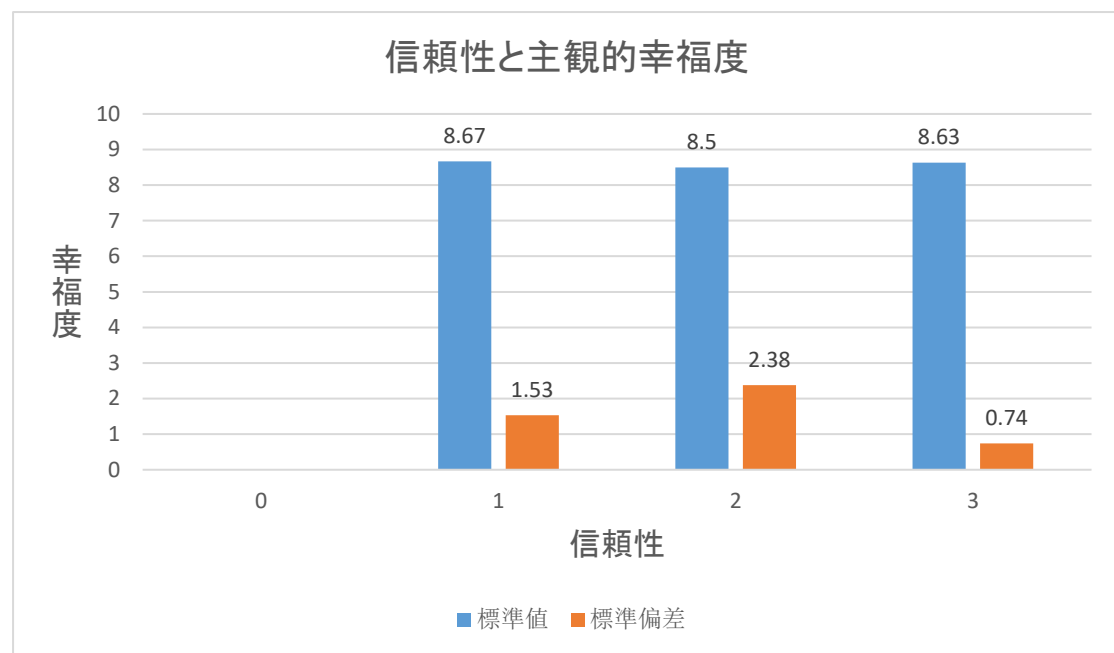


図 6-25 観光客信頼性と主観的幸福度

6.1.9 アンケート調査の考察

アンケート調査によって、民宿運営者の幸福度が高いということが分かった。主観的幸福度に影響を与えている民宿運営者の個人属性、農村農業多面的機能の保全意向、農山村で保全活動の参加頻度、農山村で促進活動の参加頻度、調査対象の将来展望、社会関係資本を分析する。

個人属性について、民宿運営者の中に高齢者の割合が多い。また、高齢者は高い幸福度を感じている。男性の幸福度は女性より高い。家族運営する方は個人運営の運営者より幸福度が高い。都市から地域に移住する例があるが、都市生活経験は幸福度への影響が顕著ではない。民宿運営者の経営目的の順番は地域活性化、町づくり、収入増加である。地域活性化を最も重視している。民宿の運営期間と幸福度の相関関係は顕著ではないと考えられる。

農村農業多面的機能の保全意向について、8つ要素の平準値は全部2.5以上であり、高いレベルの保全意向を示している。保全意向が高い回答者について、重要性の認識の増加とともに、回答者の幸福度が増えている傾向が顕著である。

農山村の保全活動について、道路・水路管理と伝統芸能・祭りの参加頻度が最も高い。道路・水路管理に対して、森林の管理と環境保全活動の参加頻度はあまり高くないと示している。一方で、農作業手伝い、ボランティア活動、福祉活動の参加頻度が低い。保全意向と同様に、頻繁に参加している回答者について、参加頻度と幸福度は正の相関関係である。

農山村の促進活動について、地産地消、環境保全型農産物、グリツリ日帰り、グリツリ宿泊の参加頻度が高い。オーナー制度と小口投資の参加頻度が低い。参加頻度が上がると、知産地所と環境保全型農産物以外の活動は主観的幸福度と正の相関関係が示している。

将来展望について、食料自給率、食の安全性、過農作放棄地、農村過疎化という4つの方面に、将来が悪化になると考えている。都市との交流、再生エネルギー活用、農産物輸出という3つの方面に将来が向上できると考えている。農村の過疎化と都市農村交流は負の相関と考えられる、他の要素は幸福度との関係は顕著ではないと考えられる。

社会関係資本について、回答者は高い近所付き合い程度と居住意識を展示している。また、観光客へ高い信頼性を表した。

表 6-7 アンケートによって民宿運営者のまとめ

調査範囲	民宿運営者
個人属性	全体として幸福度が高い。 年齢層について、高齢者の割合が多い、また高齢者の幸福度が高い。 男性の幸福度は女性より高い。 家族運営する方は幸福度が高い。 UI ターン状況があるが、幸福度への影響が顕著ではない。 経営目的の順番は地域活性化，町づくり，収入増加である。 運営期間と幸福度の相関関係は顕著ではない。
農村農業多面的機能の保全意向	食料安全保障・国土保全・水源涵養・気候安定化・景観・保養機能・教育・文化という8つの機能が全部重視している。 高いレベルの保全意向意識について、重要性の認識と幸福度は正の相関関係である。
農山村の保全活動	道路・水路管理と伝統芸能・祭りの参加頻度が最も高い。 道路・水路管理に対して、森林の管理と保全活動の参加頻度はあまり高くない。 農作業，ボランティア，福祉活動の参加頻度が低い。 頻繁に参加する回答者について、参加頻度と幸福度は正の相関関係である。
農山村の促進活動	地産地消，環境保全型農産物，グリツリ日帰り，グリツリ宿泊の参加頻度が高い。 参加頻度が上がると、知産地所と環境保全型農産物以外の活動は正の相関関係が顕著になっている
将来展望	食料自給率，食の安全性，過農作放棄地，農村過疎化を悪化になると考えている。 都市との交流，再生エネルギー活用，農産物輸出を向上できると考えている。 農村の過疎化と都市農村交流は負の相関と考えられる，他の要素は幸福度との関係は顕著ではないと考えられる。
社会関係資本	近所付き合い程度が高い 居住意識が高い 観光客への信頼性が高い

6.2 インタビューについて

次いで、インタビューに関する分析を説明する。インタビューについて、民宿運営者は、主観的幸福度に関与する各要素に対する観点と考えをまとめ、アンケート調査の補足として分析する。また、印象深い経験の発生プロセスと、民宿運営者への影響を分析する。

6.2.1 質問に対する民宿運営者の観点と考え

本研究の調査は調査対象とインタビューしながら、記録する方式である。アンケートを完成する途中に、民宿運営者は各質問に対して、個人の考えとか、選ぶ理由など内容も記録した。

主観的幸福度は個人の主観的判断である。表 6-8 のように、主観的幸福度に影響を与えている各要素に対して、アンケートの質問と 1 つ 1 つ対応し、民宿運営者の判断理由と発想をまとめた。質問に対する観点と考えのまとめも個人属性、農村農業多面的機能の保全意向、保全活動の参加頻度、促進活動の参加頻度、将来展望、ソーシャル・キャピタルという 5 つの部分で分析する。

表 6-8 質問に対する観点と考えのまとめ

個人属性	年齢	民宿運営者は個人の年齢と身体健康を気にしている。回答者は普遍に、年齢と身体のせいで、民宿サービスを続けできなくなる恐れがある。
	性別	男性の幸福度は女性より高い。
	運転方式	地域の若者は大体都市に移住し、高齢者と一緒に生活する人が少ない。家族と共同に運営する宿は幸福度が個人運営する宿より高い。
	UI ターン	UI ターンの経験者は地域の生活によって、農村の民宿運営者の同様な幸福度を感じている。
	経営目的	民宿運営者は地域活性化と町づくりを最も重視している。収入増加は第 3 位の目的であるが、半数ぐらいの回答者は損得を考えずに運営している。地域への貢献意識が高いと考えられる。
	運営期間	15 年ぐらい運営した回答者の幸福度が一番高い。これらの回答者は最初の事業参加者として、地域に貢献する意識を持ち、事業を開始した。

農村農業多 面的機能	農村農業多 面的機能の 保全意向	8つの機能に関する保全意向は全部高いと示している。国土保全について、近年に川の水量が減少していると考えている。気候安定化について、以前より近年に、気候の変化が激しくなったと考えている。また、子供の教育を非常に重視している。都市の子供に自然を接触する場とチャンスを提供するために、民宿を運営している。
	保全活動の 参加頻度	地域は定期的に道路・水路管理の活動を開催するので、参加頻度が最も高い。また、環境をきれいにさせるために1年間2・3回ぐらい自発的に環境保全活動を行う回答者も少なくない。 祭りなど活動の参加頻度が高いが、少子高齢化によって、参加者が減少していると感じる回答者は数人がある。 高齢者社会なので、高齢者に買い物代行の状況がある。高齢者たちはボランティア活動とか福祉活動とか活動の参加頻度が高くないが、相互にできるだけ手伝う気持ちを伝えている。
	促進活動の 参加頻度	高齢者たちは地域投資に関する情報が受け取れないので、オーナー制度とか小口投資など活動をあまり行っていない。 買い物活動は大体夢づくり直売所で行い、地域で地産地消の生活を採用している。 修学旅行は一番歓迎する観光方式である。民宿運営者だけでなく、地域住民も修学旅行を通して、生活を喜んでいる。
将来展望		手作りの食は信頼性が高いという考えがあるので、増えている購買活動に対して、食の安全安心をやや悪化すると考えている。 全部の回答者は農作放棄地と過疎化への不安を提示した。また、近年に改善できないと考えている。 大体の回答者は電気代を下げるために、再生エネルギーを期待している。一方で、ある回答者は再生エネルギーが地域の風景を壊す恐れがあり、反対する。
ソーシャ ル・キャピ タル	近所付き合 い程度	高齢者は相互に守るために、近所との付き合いが頻繁に行っている。
	居留意識	多数の回答者は地域への愛着のために、住み続けたいが、他の都市に移住する能力がないので、地域で住み続けたい方も存在している。
	観光客対応	観光客との関係を構築するために、観光客への信頼性が高い。

6.2.2 印象深い経験と民宿運営者への影響

調査の最後の部分は印象深い経験に関する質問である。民宿運営者はサービスを提供する途中に、「米が美味しい、星空がきれい」など感慨や、外国人対応など印象を残している経験を調査し、発生のプロセスと民宿運営者への影響を分析する。

以下で、民宿運営者がよく言及する米が美味しい・星空がきれい、料理準備など活動の参加、農作業体験、メッセージカード・手紙など交流という4つの事例を採用し、発生のプロセスを紹介し、民宿運営者への影響を分析する。

表 6-9 印象深い経験と民宿運営者への影響

事例	発生プロセス	民宿運営者への影響
米が美味しい、 星空がきれい	民宿運営者は地域の自然資源を活用し、サービスを観光客に提供する。観光客は自分が持っている知識と結びつき、感慨を導き出す。	観光客との交流を通して、地元の資源と生活を再認識し、幸福度を向上させる。
料理準備など活動の参加	観光客は能動的にサービスの生産プロセスに参加し、地域のことを深く理解する。	共同生産を通して、相互に理解を深くさせる。両方が持っている経験や知識を共有する。
農作業体験	体験項目として、観光客に提供している。民宿運営者は仕事以外の面白さを獲得する。	今まで慣れた生活と仕事を再認識し、想像以外の楽しみを獲得する。
メッセージカード・手紙など交流	修学旅行の学生は農家民宿を体験し、感謝のメッセージカードを残す状況は少ない。	観光客との交流を通して、長期的な関係を構築する。民宿運営者は以前会えない人と出会い、交流の対象を提供する。

6.3 民宿運営者と組織リーダーの考えの共通点と相違点

組織リーダーに関する予備調査とアンケート調査・インタビュー調査を結びつけ、民宿運営者と組織リーダーの考えの共通点と相違点を分析する。

まず、個人属性について、高齢者の価値を再認識し、地域の活性化と町づくりに貢献するに関する考えは一致している。一方で、少子高齢化への認識が一致している。地域の若者が都市に移住し、高齢者社会になることに伴い、都市と農村の交流がもっと重要になっている。どちらも地域に貢献したいが、立場が違うので、収入増加の重要性に対する認識が違っていると考えられる。民宿運営者は自己実現のために、地域活性化と町づくりと最も重視し、地域の振興に協力したい。これに対して、組織リーダーはマネジャーとして、事業の規模を更に重視している。収入増加を通して、より多くの住民に参加を呼び掛けたい。

農村農業多面的機能の保全意向について、両方の共通点は保養機能、教育機能、文化機能に対する重要性への考えである。相違点は組織リーダーがサービス提供者の立場で、地域の食・生活など文化要素を守るために、サービスを提案している。食料安全保障・国土保全・水源涵養・気候安定化・景観という5つの要素はサービス提案の主要な目標を設定しない。民宿運営者は同様な重要性と考えている。

農山村の保全活動について、両方は道路・水路管理活動と伝統芸能・祭りへの重要性の認識が一致している。道路・水路管理活動と祭りを定期的に行い、民宿運営者が積極的に参加する。しかし、祭りを重視している組織リーダーに対して、一部分の民宿運営者は少子高齢化が進んでいると思うので、祭りの効果をあまり期待していない。

農山村の促進活動について、両方は農産物の価値に自信を持っている。地産地消活動をよく行っている。また、両方は農家民宿の教育機能を重視し、修学旅行という観光方式が一番歓迎している。

将来展望について、両行は食料自給率、過農作放棄地と農村過疎化の問題が悪化になっていると考えている。相違点はまず将来の食の安全性に対して、観点が違っている。手作り食品が少なくなるので、民宿運営者が将来の食の安全

性はやや悪化になると考えている。組織リーダーは少し向上できると考えている。また、民宿運営者は都市と農村の交流という質問について、1.6 やや向上を選んだが、自信がない。組織リーダーは将来の都市と農村の交流を非常に期待している。

社会関係資本について、両方は近所付き合いと観光客との関係構築を重視している。

以上の情報を表 6-8 にまとめて整理した。

表 6-10 組織リーダーと民宿運営者の考えの共通点と違い

調査範囲	一致	不一致	
		組織リーダー	民宿運営者
個人属性	高齢者の価値の再認識 少子高齢化への認識 地域に貢献する気持ち	自己実現を重視している	事業の規模の効果を更に期待している
農村農業多面的機能の保全意向	農村の保養機能，教育機能，文化機能への認識	主要目標と副次的な目標の区別	地域住民の立場で，全ての要素を同様に重視している
農山村の保全活動	道路・水路管理活動の参加意向 文化要素への認識	祭りの効果を期待している	一部分の民宿運営者が祭りの効果を期待していない
農山村の促進活動	地産地消活動をよく行っている 修学旅行を一番歓迎している		
将来展望	食料自給率，過農作放棄地と農村過疎化が悪化になると考えている。	食の安全性をあまり心配してしない 都市と農村の交流を非常に期待している	食の安全性を心配している 都市と農村の交流の向上をあまり自信がない
社会関係資本	近所付き合い程度が高い 観光客への信頼性が高い		

第7章 まとめ

本研究では、体験型民宿コミュニティ春蘭の里における、組織の参加者すなわち農家民宿運営者の角度で、サービス提供中に、幸せを感じるかという疑問を出発点として、研究を開始した。本研究は個人属性、農村農業多面的機能、社会関係資本、将来展望など方面から民宿運営者の幸福度との関係を調査し、民宿運営者が重視している要素を分析する。次いで、組織リーダーのインタビューと比べ、民宿運営者と組織リーダーの考えの共通点と相違点を分析する。また、事例を採用し、印象深い経験は民宿運営者の幸福度への影響を分析する。アンケート調査とインタビュー調査によって得られたデータを分析し、リサーチ・クエスチョンを回答する。

SRQ 1：主観的幸福度について、民宿運営者はどのような要素を重視しているか？

6.1 アンケート調査によって、民宿運営者が重視している要素を以下でまとめる。経営目的において、民宿運営者は地域活性化、町づくり、収入増加を重視している。農村農業多面的機能の保全意向について、食料安全保障機能、国土保全機能、水源涵養機能、気候安定機能、景観保全機能、心身保養機能、教育機能、文化伝承機能という8つ要素を全て重視している。農山村の保全活動について、民宿運営者は道路・水路管理と伝統芸能・祭りの参加頻度が最も高い。農山村の促進活動について、グリーンツーリズム宿泊、グリーンツーリズム日帰り、地産地消活動が頻繁に行っている。また、グリーンツーリズム宿泊について、修学旅行が最も歓迎している。将来展望について、食料自給率、食の安全性、過農作放棄地、農村過疎化を悲観しているが、都市との交流、再生エネルギー活用、農産物輸出を期待している。社会関係資本について近所付き合いと観光客との関係構築を重視している。

SRQ 2：主観的幸福度について、民宿運営者の考えは組織リーダーと一致しているかどうか？

6.3 民宿運営者と組織リーダーの考えの共通点と相違点の分析によって、以

下でまとめる。経営目的について、両者は地域への貢献意向が同様である。事業実施する時に、民宿運営者が自己実現の方面を考えているに対して、組織リーダーが事業の規模効果を更に重視している。農村農業多面的機能の保全意向について、組織リーダーは主要な目的と副次な目的を区別するために、保全機能、気候安定化、景観保全機能を一番重要な位置に置かれていない。農山村の保全活動について、両者は伝統芸能・祭りを重視しているが、得られる効果への考えが違っている。農山村の促進活動について、両者の観点が一致している。将来展望について、主要な相違点は将来の食の安全性と、地域と都市の交流を集中している。社会関係資本について、両者の観点が一致している。

全体として、民宿運営者と組織リーダーは地域貢献するために、考えが大体一致していると考えられる。

SRQ 3：体験・交流型観光において、観光客とのつながりは幸福度にどのような影響を与えているか？

6.2 印象深い経験と民宿運営者への影響によって、以下でまとめる。サービス提供途中に、観光客は生産プロセスへ積極的参加すると、相互に深い関係を構築し、観光の価値が非常に拡大できる。観光客とのつながりを通して、民宿運営者は今まで慣れた生活、仕事、文化など方面を再認識し、自分を喜んでもできる。さらに、体験した観光客と長期的な関係を維持し、交流の対象を提供する。観光客とのつながりによって、観光客でも民宿運営者でも新鮮な体験を享受し、慣れた生活と仕事を再認識させ、自分を喜んでもできる。主観的に幸せを感じている。

MRQ：民宿運営者が幸せを感じられる観光活動はどのような価値を形成しているか？

春蘭の里のような体験型民宿は組織リーダー、民宿運営者、観光客三者がお互いに影響を与え、共同に観光活動を完成する。3つのSRQの回答を通して、MRQの回答を導き出す。

幸せと感じられる観光活動はサービス提案とサービス実施2つの方面から分析する。

1) サービス提案について

民宿運営者と春蘭の里の関係は観光会社・ホテルの雇用関係と違い、農家民宿が民宿運営者の自主性に依頼し、宿泊と観光両方の機能が備えている。組織リーダーが提案するサービス、経営の目的、重視している文化要素など考えが民宿運営者の考えと一致しているかどうかは事業の成功と直接関連していると考えられる。SRQ1 と SRQ2 は宿運営者と組織リーダーの考えの共通点と相違点を回答した。民宿運営者と組織リーダーは地域貢献するために、考えが大体一致していると考えられる。

2) サービス実施について

民宿運営者はサービスの提供者として、観光客と直接に接している。本研究は民宿運営者の角度で、SRQ3 のように、民宿運営者が自分を喜び、幸せを感じられる事例を採用し、民宿運営者への影響を分析する。観光客と関係を構築できれば、観光客とのつながりを通して、民宿運営者は慣れた生活、仕事を再認識し、幸せを感じられると考えられる。

以上から、春蘭の里の成功要因の一つとして、組織リーダーと民宿運営者が、類似性の高い価値観・幸福観を基礎として、民宿経営の意義を共有しながら、地域活性化の活動を行うことができていることをあげることができる。

本研究は地域資源を活用し、経済の振興と地域活性化を目的として運営している地域創発団体における、組織の参加者すなわち農家民宿運営者の考えを明らかにするためにアンケート調査とインタビュー調査を行った。民宿運営者の主観的幸福によって、民宿運営者が重視していること、組織リーダーとの考えの共通点と相違点を分析し、また民宿運営者にとって、印象深い経験の発生と影響を論じた。これらによって、本研究の学術的な意義を構成すると考えられている。

本研究の実務的意義は民宿運営者と組織リーダーの考えの違い、観光客と共同に印象深い経験の発生を分析し、サービス提案と民宿運営者の幸福度向上など方面につながり、役立つことができると思われている。

本研究では民宿運営者の立場で、組織リーダーとの考えの共通性・相違性について調査・考察した。今後は、類似の組織などに調査範囲を拡大し、一般化を目指す必要がある。

謝辞

まず、本修士論文執筆にあたり、終始変わらぬ懇切丁寧な御指導、御鞭撻を賜った北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 池田満教授に心から御礼を申し上げたい。

本研究に関して貴重なご教示を頂きました北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 敷田麻実教授、小林重人教授、田中孝治教授に心より感謝いたします。

副テーマに当たり、ご指導いただいた北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 内平直志教授、西本直志教授に深く感謝します。

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科池田研究室のメンバーである陳先輩、劉さん、森田さんに深く感謝の意を表します。

本研究の調査協力者、春蘭の里の多田様、および、春蘭の里の民宿運営者山本様、藤田様、福井様たちが貴重な時間をかけて調査に協力していただいた。協力していただいた皆様に深く感謝の意を表します。

最後に、終始あたたかく見守り叱咤激励してくれた家族、ならびに友人達に感謝申し上げます。

参考文献

- [Brand 2011] Brand, Reon, and Simona Rocchi : “Rethinking value in a changing landscape”, *A Philips Design Paper. Philips Design, Koninklijke Philips Electronics NV* (2011).
- [Oskam 2016] Oskam, Jeroen, and Albert Boswijk : “Airbnb: the future of networked hospitality businesses”, *Journal of Tourism Futures* 2.1, Vol. 2 NO. 1 pp. 22-42(2016)
- [Frenken 2016] Frenken, Koen, et al. : “Smarter regulation for the sharing economy”, *The Guardian* 20 (2015).
- [尾家 2010] 尾家建生 : “ニューツーリズムと地域の観光産業” , 大阪観光大学紀要 , Vol. 10, pp. 25-37. (2010)
- [尾家 2010] 尾家建夫 : “ニューツーリズムの概要と現状分析及び展望” , 『SRI』(財)静岡総合研究機構, Vol. 101, pp. 3- 9. (2010)
- [藤岡 2012] 藤岡芳郎 : “価値共創型企業システムの展開の可能性と課題 : プロジェクト研究と事例研究をもとに” , 広島大学マネジメント研究, Vol. 12, pp. 63-75. (2012)
- [中村 2012] 中村孝太郎 : “2A22 「おもてなし」 型価値共創の視点 (第 4 報) : スロベニアにおける宿泊・ツーリズムのイノベティブ事例研究より (〈 ホット 이슈ー〉 グローバル・ニッチトップ企業のイノベーション戦略, 一般講演)” , 年次大会講演要旨集 Vol. 29, 研究・イノベーション学会, (2014)
- [観光庁] 国土交通省観光庁 : 観光立国推進基本法
<http://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/index.html> (参考日 :2018 年 7 月 5 日)
- [観光庁 2016] 国土交通省観光庁 : ニューツーリズムの振興
http://www.mlit.go.jp/kankocho/page05_000044.html (参考日 : 2017 年 4 月 10 日)
- [観光庁 2011] 国土交通省観光庁 : 「着地型旅行市場現状調査報告」(平成 23 年度調査)
http://www.mlit.go.jp/kankocho/page05_000044.html (参考日 : 2017 年 4 月 10 日)
- [草津市 2012] 草津市 : 幸福度研究に関する調査研究報告書ー総合計画への幸福度指標導入についてー (平成 24 年度調査研究報告書)
<http://www.city.kusatsu.shiga.jp/shisei/kenkyu/chousakenkyu/24nendohokoku.html> (参考日 : 2018 年 7 月 4 日)
- [内閣府 2011] 内閣府 : 幸福度に関する研究会, 「幸福度に関する研究会報告(案)ー幸福度指標試案ー」(平成 23 年)
<http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/shiryou/4shiryou/2.pdf> (参考日 : 2018 年 7 月 1 日)
- [佐々木 2015] 農林水産政策研究所, 佐々木宏樹・他 “農業・農村の新たな機能・価値の評価手法開発” , 新たな価値プロジェクト研究資料, Vol. 1, (平成 28 年)
http://www.maff.go.jp/primaff/kanko/project/attach/pdf/160831_28arackachi1.pdf (参考日 : 2017 年 12 月 11 日)

- [山下 2011] 山下良平, 一ノ瀬友博: “地域発展過程の合意形成の特性に着目した過疎地型地域経営モデルに関する事例的研究.” 農村計画学会誌 Vol. 30. 3, pp. 436-442. (2011)
- [浦 2015] 浦達雄: “奥能登・春蘭の里における農村の活性化.” 大阪観光大学紀要 Vol. 15. 15, pp. 1-7. (2015)
- [佐藤 2011] 佐藤真弓: “奥能登山村における「むらづくりの産業化」と地域社会構造.” 村落社会研究ジャーナル Vol. 18. 1, pp. 1-12, (2011)

付録

調査同意書

調査研究対象の方へ

年 月 日

体験型民宿コミュニティ春蘭の里におけるサービス提供 の価値形成に関する調査

研究の目的

本研究は、過疎化と少子高齢化が進んでいる地域で、地域の特性を活かした地域内発観光サービスを提供するコミュニティにおいて、コミュニティメンバーが民宿サービスの運営とともに、コミュニティメンバーの幸福度の変化を明らかにすることを目的として行っている。組織とコミュニティメンバーが協働しながら、農家民宿サービスを提供するシステムの中に、コミュニティメンバーと組織リーダーの目的共有が重要である。この調査は P2P 体験型民宿における、コミュニティメンバーの主観的幸福度、農業農村多面的機能とソーシャル・キャピタルに関する各要素の重視程度を測定する。

調査方法

ご協力いただく方には、5 ページのアンケートにお答えいただきます。所要時間は約 15 分です。

個人情報とデータの取扱い

取得したデータや個人情報は、研究目的以外には使用しません。データには番号付けを行うとともに匿名化しますので、専門学会、学術専門誌、学内研究会等を通じて研究発表する際も個人情報は守秘されます。データの保管には万全を期し外部へは漏洩しません。この保管データは、研究が終了してから 5 年後までに破棄します。

調査対象者の権利について

この調査に協力するか否かは自由意志で決定してください。また、一度同意した後でいつでも同意を取り消すことができ、それによる不利益はありません。匿名化番号を破棄するとともに、それまでに得られたデータや解析結果を破棄し、それ以降の研究には一切使用いたしません。但し、取り消し要求された時点で公表済みの解析結果がある場合は、このデータを破棄できませんのでご承知おきください。

調査に協力することによる利益と不利益

本調査研究に協力することによる費用の負担はありません。協力されなくても不利益を受けることは全くありません。

知的財産権について

研究の進展によっては、特許などの知的財産権が生ずる可能性があります。知的財産権の帰属は、研究者と池田研究室で決定され、データ提供者に帰属することはありません。

問い合わせ、苦情等の連絡先

なお、本調査に協力している方の権利が守られていないと思われた場合や、担当者以外の意見や情報が欲しい場合は以下の連絡先へご連絡ください。

北陸先端科学技術大学院大学 北陸先端科学技術大学院大学 池田満 王也

〒923-1211 能美市旭台一丁目 8 番地学生寄宿舍 2 の 405

メール：wangye@jaist.ac.jp

1. あなたの年齢を教えてください？
20 代・30 代・40 代・50 代・60 代・70 代・80 代
2. あなたの性別を教えてください？
男性・女性
3. 民宿以外の仕事は何ですか？
専業主婦主夫・民間企業・自営業・公務員・アルバイト・農業・漁業・林業・年金生活・その他
4. あなたは自分で民宿を運営していますか？
個人・家族（若者が助けている・若者が助けていない）・その他
5. あなたはいつから民宿を運営するか？
2016 年から・2015 年から・2014 年から・2013 年から・5 年程度前から・10 年前程度から・15 年前程度から・20 年前程度から
6. あなたはこの地域以外で生活した経験がありますか？
_____ (いつ) から _____ (いつ) まで, _____ (どの都市) で住んでました.
_____ (いつ) から _____ (いつ) まで, _____ (どの都市) で住んでました.
_____ (いつ) から _____ (いつ) まで, _____ (どの都市) で住んでました.
7. 春蘭の里の経営目的を選んでください？(三つまで複数を選んでください)
地域活性化・少子高齢化の改善・町づくり・住民収入増加・文化伝承・環境保全
8. 全体として、あなたは普段どの程度幸福だと感じていますか。「非常に幸福」を 10 点、「非常に不幸」を 0 点として、あなたは何点ぐらいになると思いますか？
0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

あなたは以下の 8 問(9~16)の各要素についてどの程度重要度(非常に重要~ほとんど重要ではない)を感じていますか？

9. 貿易に過度に依存せず、国内の農業生産による安定的食料の供給によって得られる安全感
非常に重要・ある程度重要・あまり重要ではない・ほとんど重要ではない
10. 水田や畑が大雨時の河川の氾濫を抑え、洪水を防ぎ、地滑りを防ぐ働き
非常に重要・ある程度重要・あまり重要ではない・ほとんど重要ではない
11. 農地が地下水をかん養し、河川の水量を安定化させる働き
非常に重要・ある程度重要・あまり重要ではない・ほとんど重要ではない
12. 農村で栽培される作物が光や熱を吸収し、気温を下げる働き
非常に重要・ある程度重要・あまり重要ではない・ほとんど重要ではない
13. 農村の自然が育む豊かな生態系やふるさとの景観
非常に重要・ある程度重要・あまり重要ではない・ほとんど重要ではない

14. 都市生活の疲れを癒し、心と身体をリフレッシュさせる保養機能
非常に重要・ある程度重要・あまり重要ではない・ほとんど重要ではない
15. 子供たちが人と自然の豊かな関わりを学ぶ体験学習の場
非常に重要・ある程度重要・あまり重要ではない・ほとんど重要ではない
16. 農業の営みの中育まれた祭りや芸能などの歴史と文化
非常に重要・ある程度重要・あまり重要ではない・ほとんど重要ではない

あなたは以下の7問(17～23)，農山村について保全活動の参加頻度(頻繁に行う～全くない)を教えてください？

17. 農作業の手伝い
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
18. 下草刈りなどの森林の管理の手伝い
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
19. 集落内の道路や水路の清掃，修繕の手伝い
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
20. 地域の伝統芸能や祭りの手伝い
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
21. 環境保全活動
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
22. 災害支援や雪下ろしなどのボランティア活動
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
23. 高齢者の買い物代行などの生活支援や福祉サービスの手伝い
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない

あなたは以下の6問(24～29)，農山村について促進活動の参加頻度(頻繁に行う～全くない)を教えてください？

24. 農地や農畜産物のオーナー制度への参加(棚田オーダー等)
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
25. 小口の投資(故郷納税など)
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
26. 地域採れた農林水産品の積極的な消費
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
27. 有機など環境保存型農産物の購買
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
28. 日帰りのグリーンツーリズム(例えば，農産物直売場での地元農産物の購入，ブドウ狩りなどの観光農園の利用)
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
29. 宿泊・滞在型のグリーンツーリズム(例えば，農家民宿，子供の体験学習)
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない

30. あなたは10年後にどの程度幸福だと思いますか。あなたは何点ぐらいになると思いますか？
0・1・2・3・4・5・6・7・8・9・10

あなたは以下の7問(25～31)に関する要素について、10年後にどのような変化(大幅に向上～大幅に悪化)があると思いますか？

31. 食料自給率(国産農産物の安定的な供給)
大幅に向上・やや向上・やや悪化・大幅に悪化
32. 食の安全・安心
大幅に向上・やや向上・やや悪化・大幅に悪化
33. 農作放棄地
大幅に向上・やや向上・やや悪化・大幅に悪化
34. 農村の過疎化
大幅に向上・やや向上・やや悪化・大幅に悪化
35. 都市と農村の交流
大幅に向上・やや向上・やや悪化・大幅に悪化
36. 農村における再生可能エネルギー生産・利用
大幅に向上・やや向上・やや悪化・大幅に悪化
37. 国産農産物の輸出
大幅に向上・やや向上・やや悪化・大幅に悪化
38. あなたと近所の付き合い程度を教えてください？
頻繁に行う・ある程度に行う・あまり行わない・全くない
39. これからもこの地域で住みたいと思いますか？
ずっと住み続けたい・住み続けたい・あまり住み続けたくない・全く住み続けたくない
40. あなたは観光客について、どのぐらいの人を信じていますか
ほとんどの人・半分程度の人・少数の人・誰もいない

41. あなたが観光客との交流から得た知恵・経験・価値観は何でしょうか



42. それらの知恵・経験・価値観は春蘭の里の運営にどう影響を与えていますか



43. あなたがリーダーとコミュニティメンバーとの交流から得た知恵・経験・価値観は何でしょうか



44. それらの知恵・経験・価値観は春蘭の里の運営にどう影響を与えていますか

